

63
206A



始



池B-46

樺
太
要
覽
全

樺
太
廳

63
2061



836343

凡例

- 一、本書ハ、邦領樺太ノ状況ヲ江湖ニ紹介シ、將來ノ開發ニ資センカ爲、明治四十四年編纂ノ樺太要覽ヲ基礎トシ、之ヲ訂正増補シタルモノナリ。
- 一、本書編纂ノ材料ハ、主トシテ大正元年末日迄ノ調査ニ係ルモノナレトモ、同一年ニ於ケル調査ニ據リタルモノナキニアラス。
- 一、本書中ノ地名ハ、概ネ新地名ヲ用キタレトモ、沿革其ノ他ニ在リテハ、便宜上新舊兩様ヲ使用シタリ。

大正二年十二月

樺太要覽

目次

第一章 總說	
第一節 沿革	一頁
第二節 地理	七頁
第三節 氣象	二〇頁
第二章 戶口及衛生	
第一節 總說	四五頁
第二節 本邦人	四六頁
第三節 外國人	五〇頁
第四節 土人	五一頁
第五節 市街及部落	五四頁
第六節 衛生	五七頁

目次

一

第三章 殖 民

第一節 總 說……………六三頁

第二節 土地處分……………六五頁

第三節 殖民地選定……………七三頁

第四節 區劃測設……………七七頁

第五節 移住民ニ對スル施設……………八二頁

第四章 農業及牧畜

第一節 總 說……………八七頁

第二節 農 業……………八八頁

第三節 牧 畜……………九五頁

第四節 農事試驗場及種畜場……………九六頁

第五節 動植物調査……………九七頁

第六節 狩 獵……………九八頁

第五章 水 產

第一節 總 說……………一〇一頁

第二節 種族及分布……………一〇頁

第三節 漁 業……………一五頁

第四節 水產物製造……………三〇頁

第五節 水產試驗場……………三三頁

第六章 森 林

第一節 總 說……………三九頁

第二節 森林調査……………四一頁

第三節 森林ノ利用……………四九頁

第四節 林産工業……………五六頁

第七章 鑛 産

第一節 總 說……………六一頁

第二節 地 質……………六二頁

第三節 有用鑛物……………六五頁

第四節 石材及工業用材……………一七一頁

第五節 採炭試驗所……………一七三頁

第六節 鑛業制度……………一七四頁

第八章 商工業

第一節 總說……………一七七頁

第二節 商業……………一七八頁

第三節 金融……………一九二頁

第四節 物資ノ移出入……………二〇四頁

第五節 水產物罐詰製造業……………二〇九頁

第六節 其ノ他ノ工業……………二一一頁

第九章 交通

第一節 總說……………二一五頁

第二節 陸運……………二一五頁

第三節 海運……………二二七頁

第四節 通信……………二五四頁

第十章 教育

第一節 總說……………二六五頁

第二節 施設……………二六七頁

第十一章 兵事

第十二章 社寺及宗教

第一節 總說……………二八五頁

第二節 神社……………二八六頁

第三節 布教……………二八七頁

第十三章 行政及財政

第一節 總說……………二九三頁

第二節 行政機關……………二九五頁

第三節 財政……………三〇三頁

第十四章 司法

目次

第一節 民政署時代ノ司法	三二一頁
第二節 裁判所	三二四頁
第三節 監獄	三一六頁

目次終

挿入寫真目次

第一章	○國境○國境標ノ南面○同上北面○幌内川ノ景
第二章	○豊原市街○大泊市街○真岡市街○農村部落○樺太廳醫院○豊原水道貯水池○殘留露人ノ家庭(其ノ一)○同上(其ノ二)○ギリヤーク人ノ風俗○オロツコ人ノ風俗
第三章	○移住當初ノ農家○移住後數年ヲ經タル農家○鈴谷平原未墾ノ草地○開墾地ノ排水溝
第四章	○牧草ノ收穫○蔬菜類○樺太廳農事試驗場(其ノ一)○同上(其ノ二)○樺太廳種畜場○農民共同放牧場
第五章	○一ノ澤漁場ノ鯨沖揚○昆布乾燥ノ狀況○蟹ノ漁撈○海豹島ニ於ケル鷹胸獸群居ノ狀況○樺太廳樂磨水産試驗場○東海岸幌泊ニ於ケル鯨ノ鹽藏
第六章	○落葉松林○椴松林○白樺林○天然更新○丸太材ノ集積○木材ノ搬出
第七章	○石炭ノ露頭○坑口ニ於ケル炭車

挿入寫真目次

第八章

○北海道拓殖銀行樺太豊原支店○豊原ニ於ケル煉瓦製造所○樺太廳豊原乾縮工場○豊原ニ於ケル製材所

第九章

○榮町停車場○大谷附近ノ拓殖鐵道○豊原眞岡間街道瀧ノ澤○スキー隊ノ山道踏破○犬橋輸送○氷上上陸ノ狀況○豊原郵便局

第十章

○廳立中學校○廳立豊原尋常高等小學校○廳立大泊尋常高等小學校○私立泊居尋常小學校

第十一章

○官幣大社樺太神社○同上境内ヨリ豊原市街瞰望

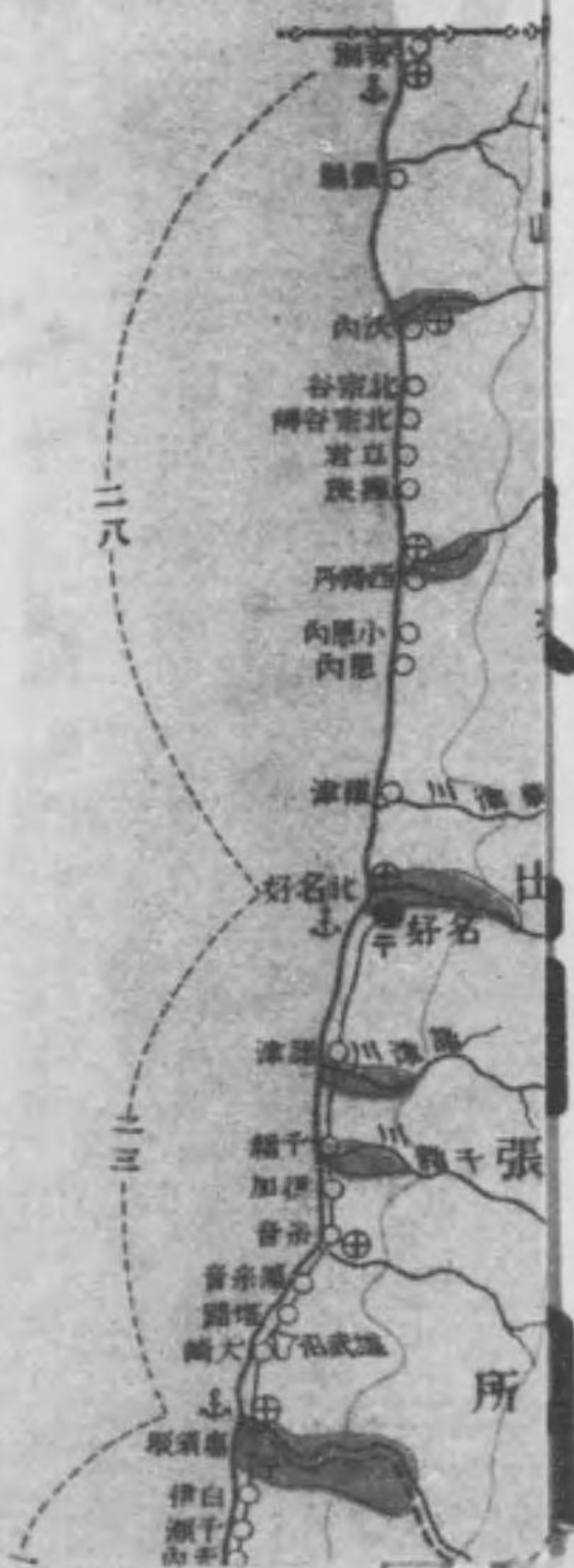
第十二章

○樺太廳

第十三章

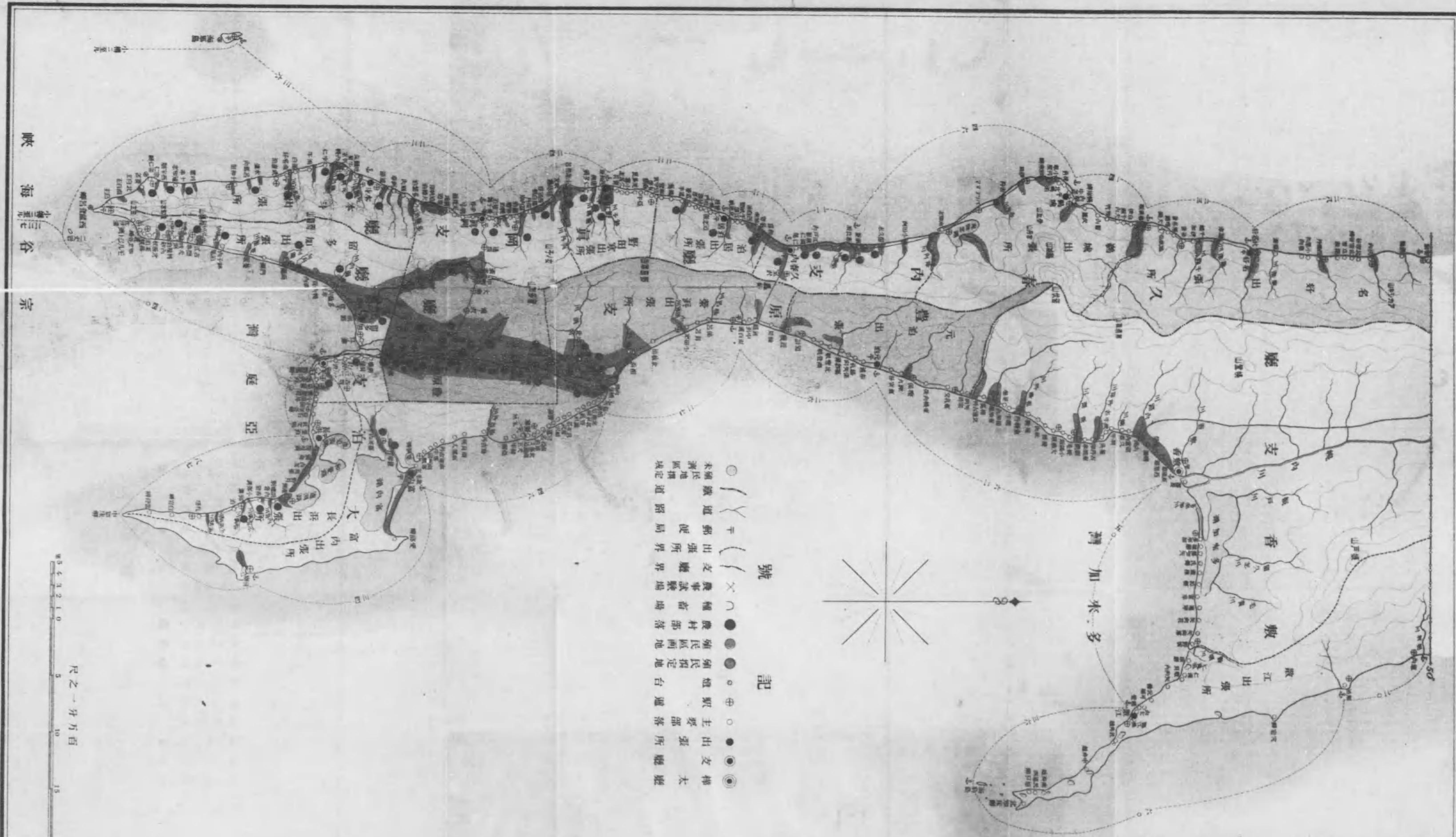
○樺太地方裁判所及豊原區裁判所○札幌監獄樺太分監

挿入寫真目次終



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

豐田縣圖



- 記 號
- 樺太支隊
 - 支隊
 - 出張所
 - 主要部落
 - 郵便局
 - 支隊事務所
 - 農事試驗場
 - 農村部落
 - 殖民地開墾地
 - 殖民地指定地
 - 燈塔
 - 運送所
 - 主要部落
 - 出張所
 - 支隊
 - 樺太支隊

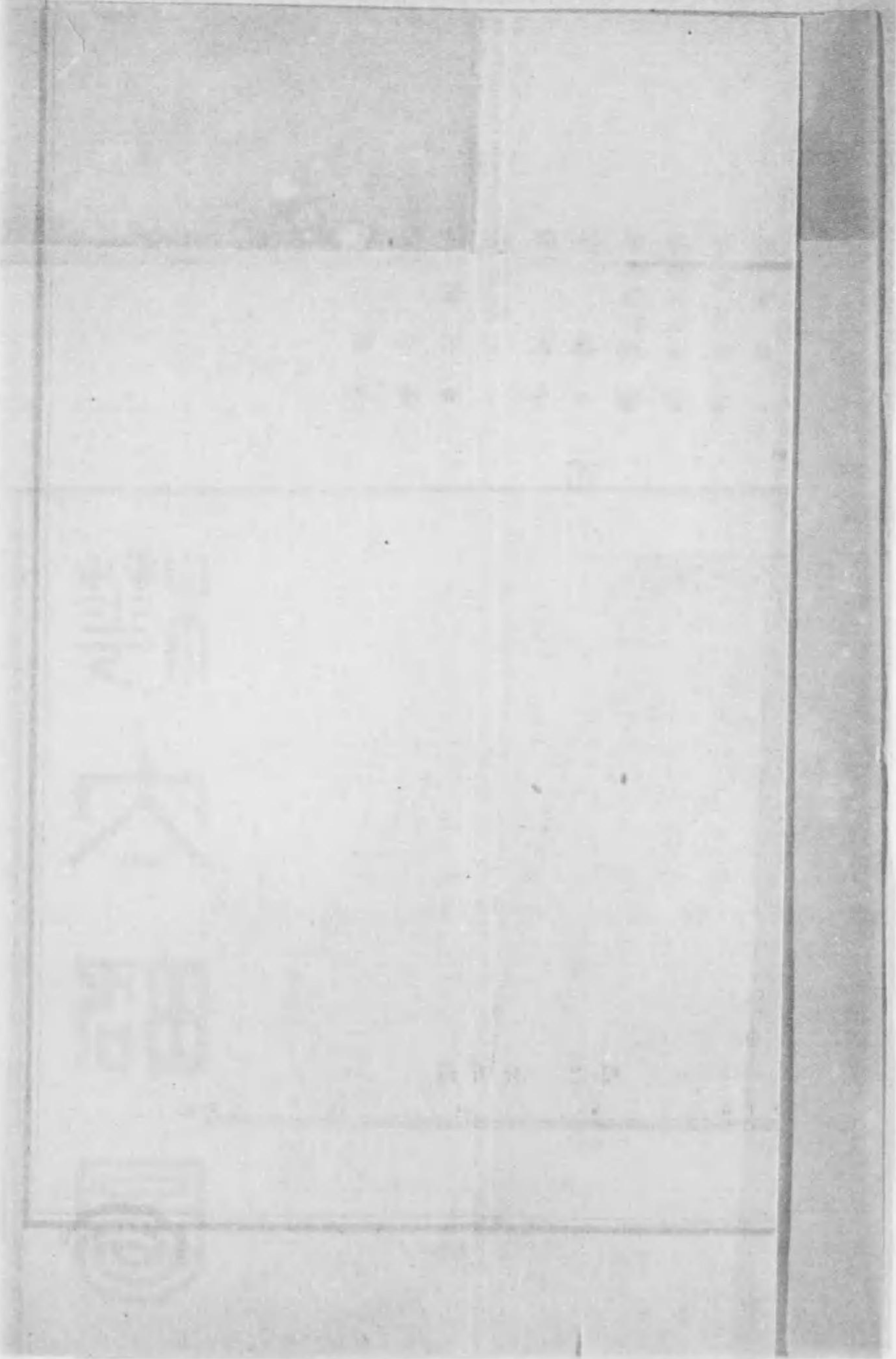
尺之一分五厘

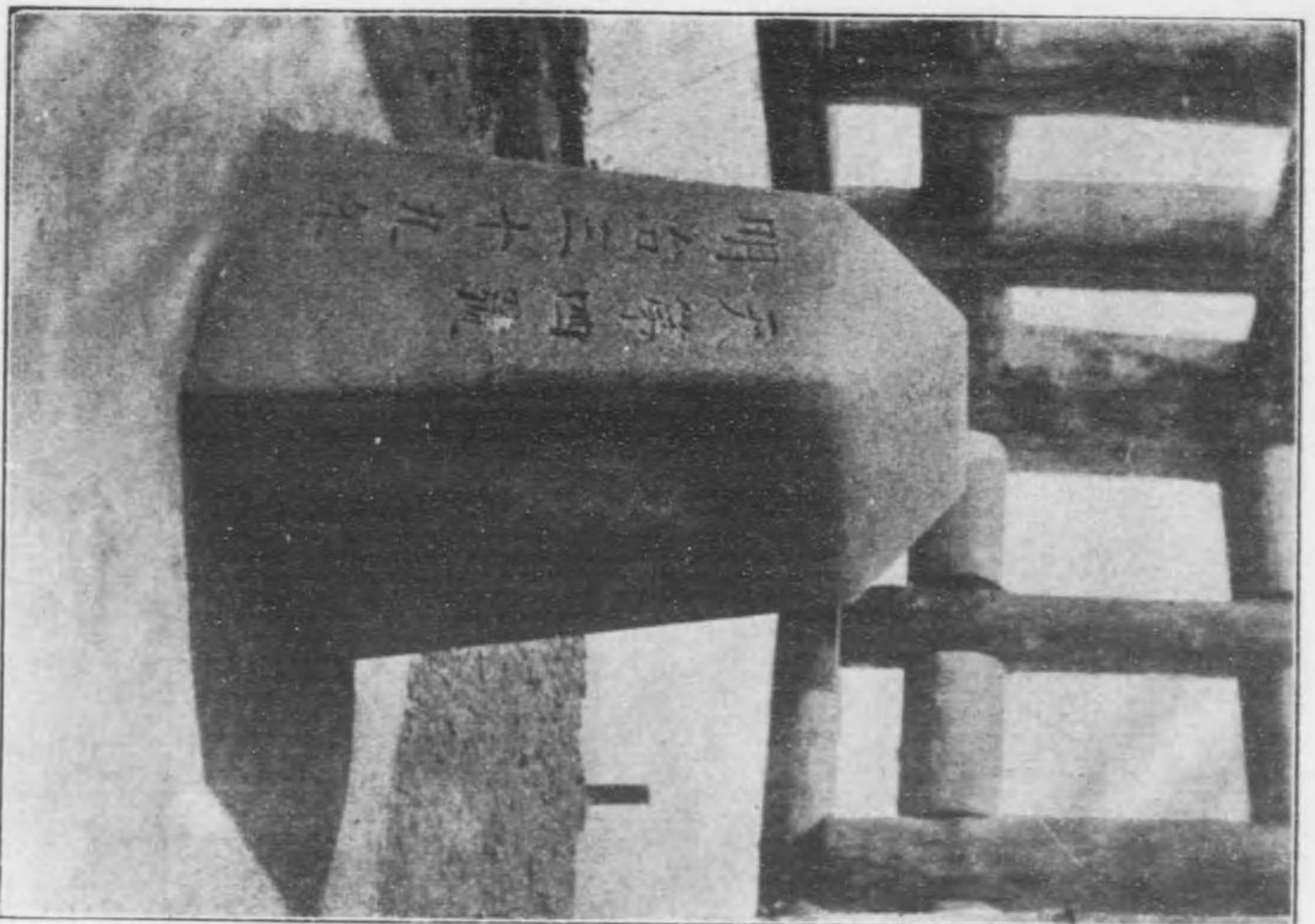
露光量違いの為重複撮影

挿入寫真目次

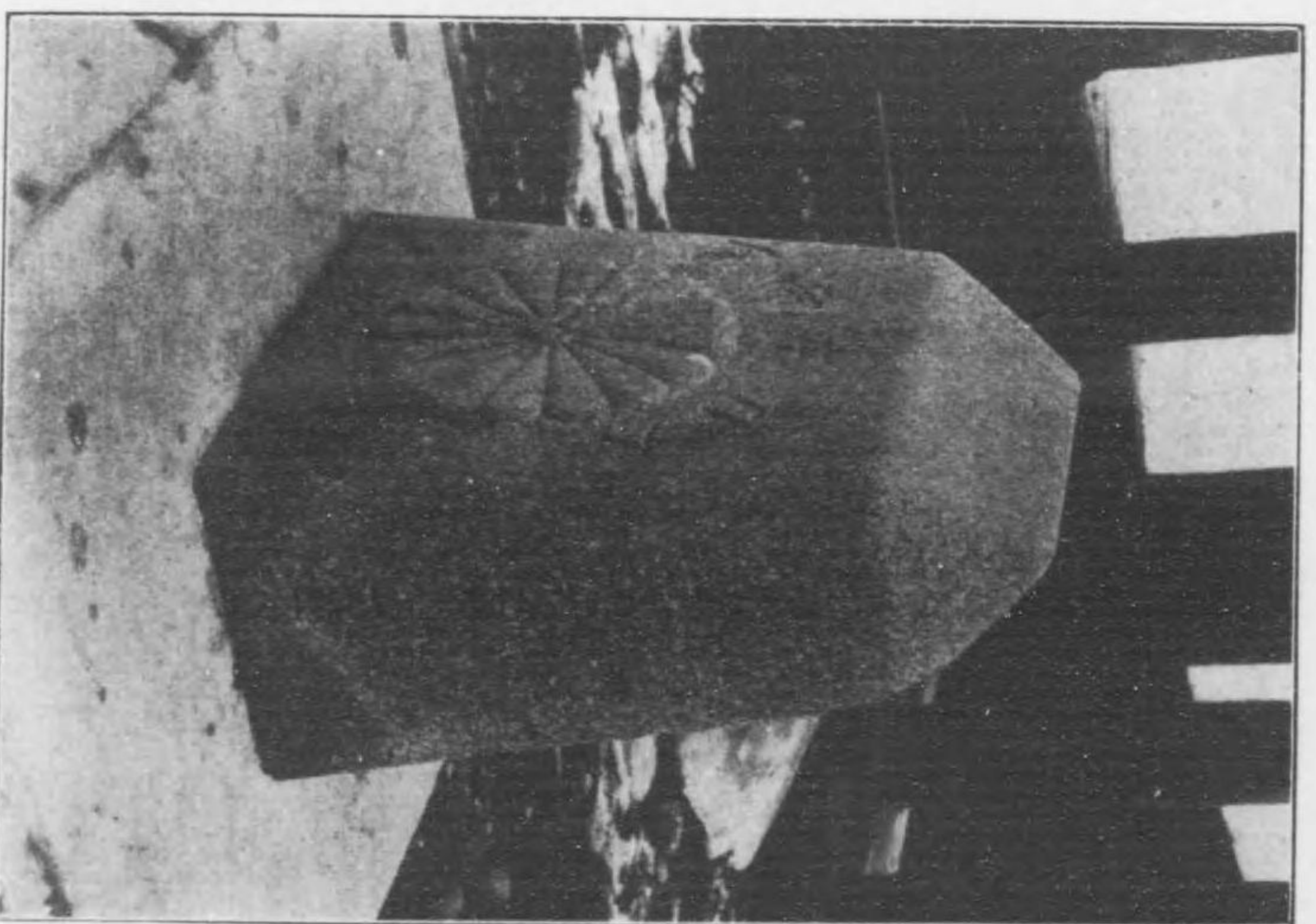


國 境

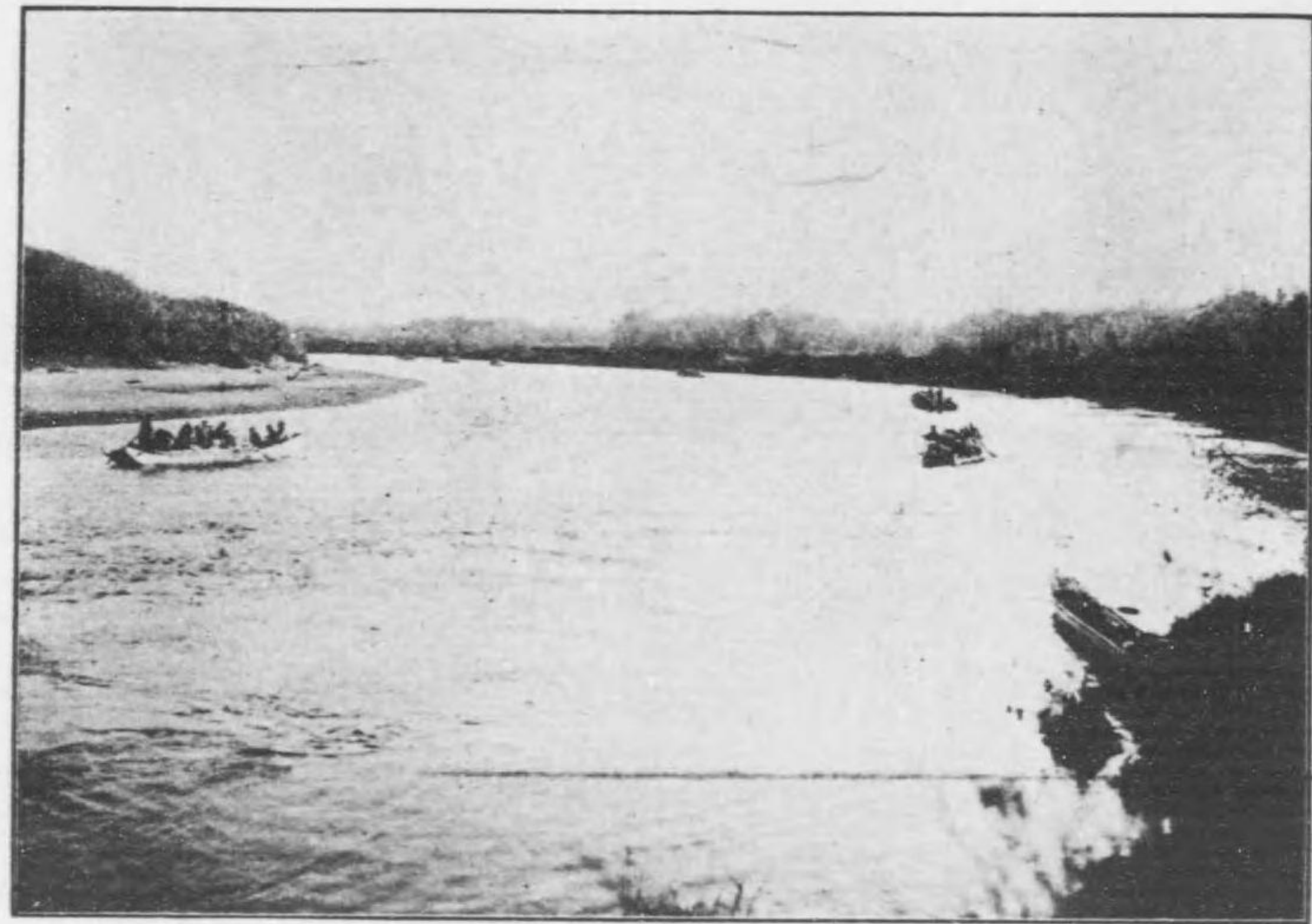




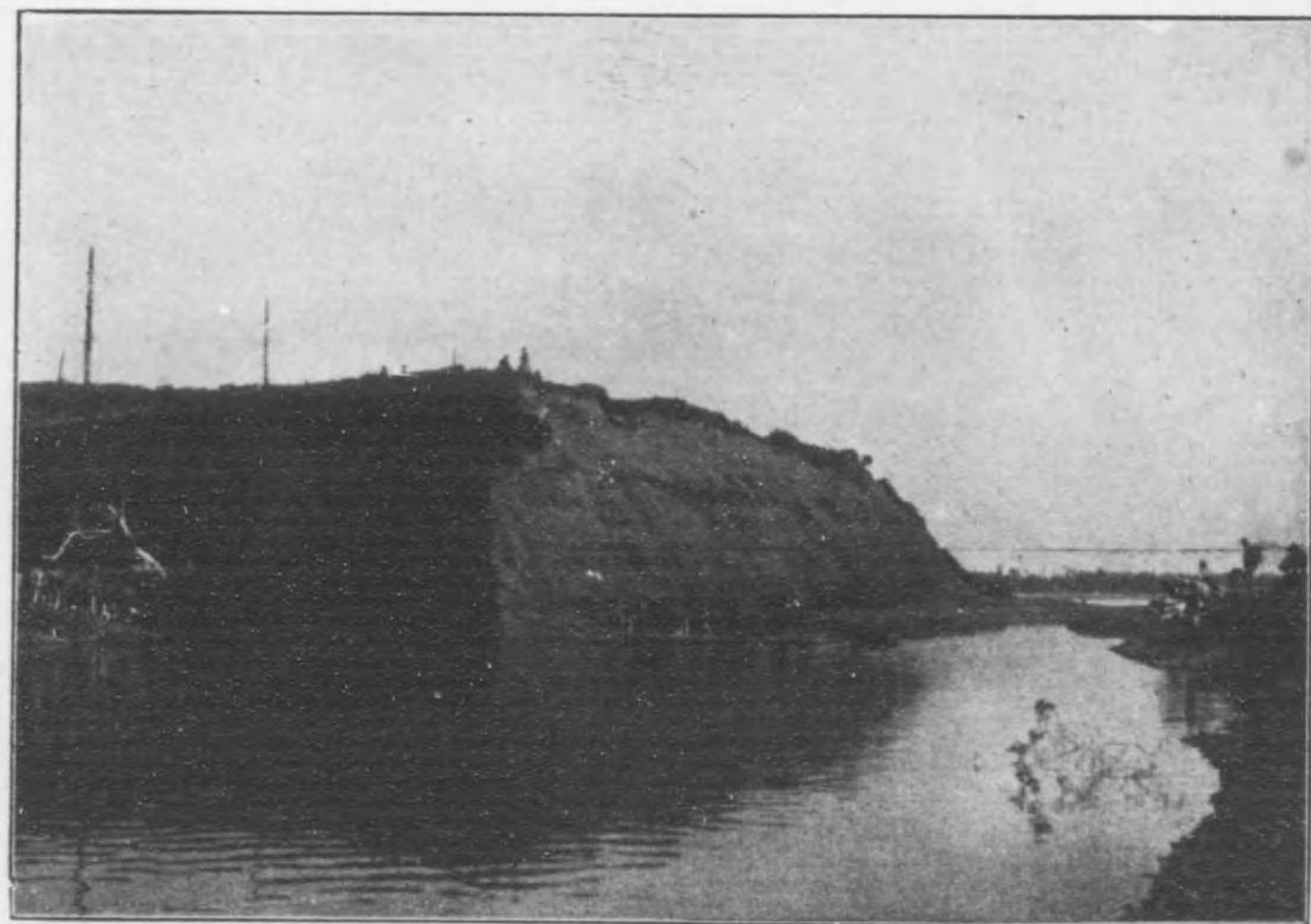
(面北) 標 境 國



(面南) 標 境 國



幌内川ノ景



内路川ノ景

樺太要覽

第一章 總說

第一節 沿革

本島ノ我カ領有ニ歸シテヨリ茲ニ七星霜、拓殖ノ業漸ク其ノ緒ニ就カントス、今其ノ梗概ヲ叙スルニ先タチ聊カ往時ニ遡リテ之カ由來ヲ討ネントス。

抑モ本島最古ノ事績ニ至テハ、毫モ文獻ノ徵スヘキモノナク、史乘之ヲ尋ヌルニ由ナキモ自然ノ地理的關係ト、近世ニ於ケル史實トニ依リテ之ヲ稽フルニ、本島ノ先占者ハ北海道ヨリ移住シタル「アイヌ」族ナルコト、殆ト疑ヲ容レサルカ如シ、而シテ北部樺太ニ在リテハ、當時清國領タリシ山丹地方ヨリ移住シタル山丹族、即チ今ノ「ギリヤーク」「オロツコ」等ノ祖先カ先占者ニアラサリシカトノ説ナキニモ非ス。

サレト其ノ孰レナルニモセヨ、彼等ハ單ニ移住シタリト云フニ止マリ、所謂水草ヲ逐フテ遊牧田漁ヲ事トシタルニ過キサリシノミ。

第一項 幕政時代

斯ノ如ク本島最古ノ事績ハ、之ヲ審カニスルコト能ハサレトモ、本島ノ邦領トシテ確認セララル、ニ至リシハ、實ニ慶安四年以降ニ於ケル松前氏ノ探檢施設ニ始マル。即チ同年其ノ家臣蠣崎傳右衛門ヲシテ本島視察ノ途ニ上ラシメ、更ニ明和年間ニハ和田某ヲ、天明五年ニハ新井田隆助ヲシテ、相踵テ沿岸漁業ノ狀況ヲ視察セシム。斯クテ寛政二年ニ至テハ、土人ノ漁業ニ従事スル者尠ナカラサルノミナラス、奥羽地方ヨリ渡來シテ同シク漁撈ヲ爲ス者漸ヲ逐フテ加ハレリ。是ニ於テ藩吏ヲ派シテ、クシユンナイ(久春内)シラヌシ(白主)ノ二箇所ニ勤番所ヲ設ケ、之カ保護取締ノ任ニ當ラシメ、管轄實行ノ端斯ノ如クニシテ漸ク啓ク。而カモ當時國防警備ノ施設トシテハ、未タ何等ノ具備スルモノナク、勤番ノ藩吏サヘ僅ニ漁期中ノミ在勤スルニ過キサリキ。

然ルニ徳川幕府ニ於テモ、漸ク北方開拓ノ忽ニスヘカラサルヲ覺リ、天明五年勘定奉行松平秀持及其ノ臣山口鐵五郎等ヲ簡派シテ、蝦夷地全部ノ探檢ニ従事セシメテヨリ、引續キ、寛政元年ニハ最上徳内、和田兵太夫等ヲ、享和元年ニハ中村小一郎、高橋治太夫等ヲ、文化五年ニハ松田傳十郎、間宮林藏等ヲシテ、各本島ヲ巡檢セシメ、其ノ進言獻策ニ依リテ、徐ニ之カ經營ノ實ヲ舉クルニ至レリ。之ヨリ先キ、寛政十一年、北境ノ警備漸ク急ヲ告クルヤ、松前藩ノ力克ク之ヲ防クニ足ラス。幕府仍チ之ヲ直轄地トナシ、文化四年更ニ松前奉行ノ管理ニ附シ、南部、津輕兩藩ニ令シテ戍兵ヲ出シ、

蝦夷各地ヲ警固セシム。樺太ノ守護ニ當レルハ松田傳十郎ニシテ、即チ兵二百ヲ率キテ、シラヌシニ駐屯ス。而シテ樺太ヲ改メテ北蝦夷ト稱シ、北蝦夷會所ヲ設ケテ漁民ヲ保護シ、以テ漁業ノ獎勵ニ力メタリ。

當時シラヌシ、クシユンコタン(大泊)、クシユンナイニ運上屋、勤番所及ヒ砲臺等ノ設備ヲ爲シ、且ツシラヌシニハ山丹交易所アリ、沿岸漁場ノ數又二十七ヲ算シタリキ。

斯クテ文政四年ニ至リ、蝦夷地ハ一旦松前藩ニ還附セラレタリシモ、安政二年徳川齊昭、堀織部正等ノ獻言ニ基キ、再ヒ全領地ヲ舉ケテ之ヲ幕府ノ直轄トナシタリ。

當時本島ニハ、奉行ノ下ニ支配組頭、組頭支配調役、並調役、出役、下役元締等ヲ置キ、全土ヲ口場所、中場所、奥場所ノ三區ニ分チ、調役ハ之ヲクシユンコタン、シラヌシ、西トンナイ(眞岡)クシユンナイ、ワール(輪荒)ノ五要地ニ配置シ、會津、仙臺、秋田、庄内ノ四藩ヲシテ交代ニカ警固ノ任ニ當ラシメ、且ツ歴代ノ奉行屢々渡航シテ、親シク本島ヲ視察シ、下僚モ亦年々島内ヲ巡視シテ土人ヲ撫恤シ、更ニ漁場ヲ開設スルニ努メシモ、當時既ニ露國トノ折衝頻繁ヲ極メ、幕府ノ威信殆ト地ニ委シ、治績見ルニ足ルヘキモノナシ。

第二項 開拓使時代

明治元年六月函館ニ開拓使ヲ置キ、權判事岡本監輔ヲシテ樺太事務ヲ管掌セシム。八月監輔樺太ニ

航シテ事務所ヲ楠溪(大泊)ニ設ケ、之ヲ公議所ト稱シ、小實(池邊濱)白濱(東白浦)久春内、榮濱ニ鎮撫ヲ置キ、茲ニ始メテ劃然タル行政施設ヲ爲スニ至レリ。三年三月樺太開拓使ヲ特設シ、開拓使次官黒田清隆之ヲ掌理ス。須臾ニシテ又之ヲ北海道開拓使ニ合併シ、樺太支廳ヲ置キ、鎮撫ヲ廢シテ出張所ニ改メタリ。而シテ當時ノ經營タルヤ、漁場ヲ官營トシテ漁業ヲ奨励シ、農工ヲ移住セシメテ耕耘採礦ノ開發ヲ圖リ、道路ヲ開鑿シテ驛傳ヲ設ケ、衆庶ノ衛生ヲ保持シテ病院ヲ開設スル等、施設大ニ見ルヘキモノアリキ。

第三項 露國ノ南侵

明治八年ニ至リ、露國トノ間ニ千島樺太交換條約成リ、暫ク本島ヲ露國ノ手ニ委スルニ至レリ。蓋シ露國ノ東漸ノ由來ヲ討ヌルニ、實ニ十六世紀ノ中葉イワン四世ノ時、西比利亞ノ酋長エチケル其ノ全土ヲ擧ケテ之ニ服從シ、亞テウラルノ「コサツク」エルマツクノ東方高加索地方ヲ平定シテ、之ヲ貢獻シタルニ基因ス。爾來露國ハ銳意東方ニ其ノ領土ヲ擴張セント欲シ、急遽東進、忽チニシテハバロフスクノ經營トナリ、黒龍江畔ノ開拓トナリ、而シテ東察加ノ掩有トナル。斯クテ東海活躍ノ基礎ヲ定ムルヤ、一方北米大陸ノ北西ニ其ノ驥足ヲ伸ハスト共ニ、又南方千島ニ直下シテ、以テ我カ北門ヲ窺フニ至レリ。

北方ノ危態夫レ斯クノ如ク急ナリ。而カモ我カ松前藩ノ北方統治ハ、唯名ノミニ止マリテ其ノ實ヲ

缺ケリ。是ヲ以テ東察加ヲ根據トセル「コサツク」ハ、常ニ千島列島ト樺太トノ間ヲ往復航行シテ、蝦夷各地ノ動靜ヲ窺ヒ、黒龍江口ヲ地盤トセル露人ハ、漸次北部樺太ヨリ侵入シテ、只管諸般ノ設備ヲ爲スニ至レリ。斯クテ寛政四年ラツクスマン修好ヲ請フテ來リシモ成ラス、越エテ文化元年レサノフ再ヒ修好貿易ヲ求メテ長崎ニ來リシカ、是レ亦幕府ノ拒ム所トナルヤ、露國ハクシユンコタン及ルータカ(留多加)ニ侵寇シ、土人ヲ虐ケ番屋ヲ燒キ米鹽ヲ掠ムル等、一再ニシテ止マラサリキ。嘉永六年露國ハ水師提督ブウチャチンヲ派遣シテ一ハ交易ヲ求メ一ハ定境ノ事ヲ議セシム。

初メブウチャチンハ亞庭灣沿岸一部ヲ除クノ外、樺太ノ全土及擇捉以北ノ諸島ヲ以テ露領ナリト主張ス。當時我國ノ談判委員ハ大目付筒井肥後守及勘定奉行川路聖謨ニシテ、談判荏苒三年ノ長キニ至リシカ、遂ニ得撫以北ヲ露領ト認メ、本島ニ關シテハ何等決定スル所ナクシテ終結セリ。然ルニ安政六年、露國ノ使節ムラブイヨウハアイグン條約ノ例ヲ試ミントシテ渡來シ、極メテ強硬ナル態度ヲ以テ、本島全部ノ所領ヲ主張シタリシカ、遂ニ我ノ容ル、所トナラスシテ空シク還レリ。此時ニ於ケル我カ談判委員ハ遠藤但馬守及酒井右京亮ノ兩人ナリキ。

越エテ文久三年我邦ハ修好ノ爲メニ國使ヲ歐洲列國ニ派遣スルニ際シ、特ニ露國ニ向テハ樺太境界ノ事ヲモ提議セシム。時ノ外國奉行竹内野守、同松平石見守之カ使節タリ。而シテ露國ハ北緯四十八度線ヲ以テ境界トセント主張シ、我ハ五十度線ヲ以テセントシ、兩々固持シテ相容レス、翌年ヲ期

シテ兩國ノ使節ヲ樺太ニ會セシメ、親シク山河ノ形勢ニ從テ、之ヲ協定センコトヲ約セシモ、當時幕末ノ擾亂其ノ極ニ達シ、外事ヲ顧ミルノ暇ナク、遂ニ之カ履行ヲ見ルコト能ハスシテ止ミタリ。

慶應二年十月更ニ小出大和守及石川駿河守ヲ露國ニ派シ、外務亞細亞局長スワレモーホフニ會見シテ曩ニ締約シタル五十度線劃定ノ實行ヲ迫ラシメタルモ議合ハス、本島ハ唯從前ノ如ク漫然日露兩屬トシテ之カ假條約ヲ締結シタルニ止マリキ。而シテ明治五年露國代理公使ビツォフノ來任スルヤ、樺太ニ關シテ協定ヲ試ムル所アリシモ、其ノ議亦熟セス、明治七年海軍中將榎本武揚ヲ露國ニ簡派シ、クシユンナイヲ以テ彼我ノ境界トセンコトヲ提議セシメタルモ、成ラス、折衝ノ結果、遂ニ翌年ニ於テ千島列島ヲ我カ領有ニ歸シ、樺太全土ハ擧ケテ之ヲ露國ニ讓與スルノ條約ヲ締結スルニ至レリ。

第四項 日露交戦後

明治三十七年、滿洲ノ事ニ關シ、露國トノ國交斷絶シテ兩々干戈相見ユルニ至ルヤ、我カ樺太軍ハ翌三十八年七月本島全土ヲ占領シ、直ニ軍政署ヲ設ケテ軍政ヲ布キ、次テ之ヲ撤廢シテ民政署ヲ設ケタルモ、幾クモナクポーツマス媾和條約成ルニ及ヒ、本島北緯五十度以南ノ地ハ、全ク我カ領有ニ復シ、四十年三月民政署ヲ廢スルト共ニ、樺太廳ヲ設置シ以テ今日ニ至ル。而シテ國境劃定ノ作業モ亦、日露兩國委員ノ協力ニ依リ、三十九、四十ノ兩年ニ涉リテ終了ヲ告ケ、長ヘニ北門平和ノ保障ヲ築成シタリ。

第二節 地理

第一項 位置及廣袤

樺太島ハオホーツク海ノ西隅ニ方リテ、長ク南北ニ横ハリ、間宮海峽(最狭部ハ僅ニ四海里ニ滿タス)ヲ隔テ、近ク沿海州ト相對シ、其ノ南端西能登呂岬ハ、宗谷海峽約二十三海里ヲ隔テ、遙ニ北海道ノ宗谷岬ト相呼應セリ。其廣袤ハ、北緯四十五度五十四分ニ位スル西能登呂岬ヨリ、北緯五十四度二十分ニ位スル最北端ノエリサベス岬ニ至ル、南北ノ延長約二百四十里、東西ノ幅員七里乃至四十餘里ニシテ、其ノ全面積ヤ、四國九州ヲ合シタルモノヨリモ大ナリ。但シ現ニ我領土タル北緯五十度以南ノ地ハ、延長約百十六里、面積二千二百餘方里ニシテ、其ノ面積ハ全島ノ半ニ及ハス。

第二項 地形

本島ハ、其ノ輪廓南北ニ延ヒテ東西ニ狭ク、其ノ内部ニ於ケル水系及山系等ノ地相モ、亦自ラ南北ニ發育セリ。而シテ、其ノ中央稍廣キ平地ハ、本島ヲ縱斷シテ、東西ノ兩山地ヲ分チ、東西兩山地モ、亦南北ニ駢走セル幾多ノ山岳ニ依リテ成レリ。故ニ本島ハ其ノ地相上ヨリスルトキハ、中央凹地帶、東部山地帶、西部山地帶ノ三地帶ニ區別スルコトヲ得ヘシ。

西部山地帶ハ、本島ノ最北端、エリサベス岬ニ起リテ、南端西能登呂岬ニ至ル山地ニシテ、本島面

積ノ過半ヲ占ム。東部山地帯ハ、北方ツイミ河口附近ヨリ起リ、北知床岬ニ至リテ海ニ入り、更ニ南方柏濱附近ニ起リテ南走シ、中知床岬ニ終ル。斯ノ如ク、東部山地帯ハ、中央ニ於テ斷絶シテ多來加灣ヲ成シ、爲ニ本島ノ中央部ヲシテ、大ニ狹少ナラシム。中央凹地帯ハ、東西南山地帯ノ中間ニ介在スル低地ニシテ、ツイミ川、幌内川、内淵川、鈴谷川等ノ流域ニ於テ、本島主要ノ平原ヲ成セリ。

一、海岸 海岸線ハ、概シテ岬少ク、殊ニ西海岸ノ如キハ、殆ト子午線ニ平行シテ、本島ノ南端ヨリ北端ニ達シ、頗ル單調ナル海岸線ヲ成セリ。東海岸ノ北半モ亦殆ト一直線ヲ畫シ、唯其ノ南端、僅ニ北知床岬アリテ多來加灣ヲ包ミ、中知床岬及西能登呂岬アリテ亞庭灣ヲ擁スルノミ。海岸ハ、岩塊堆積、陸行容易ナラサルトコロ少カラス、其ノ全ク汀ヲ陸行シ難キ處ハ、東海岸ニ於テハ中知床岬附近、登帆附近(古來突岬ノ險ト稱ス)此輪附近、西海岸ニ於テハ、遠知志岬附近、宗仁岬附近、鶴巢岬附近等トス。

西海岸ノ岬角ハ概シテ鈍滑ナル圓形角ナリ。岬角ノ著シキモノハ氣主岬、小能登呂岬、鶴巢岬ノ三岬ニシテ開灣ノ著シキモノハ眞岡灣、久春内灣、鶴城灣等ナリ。

本島ノ南端西能登呂岬ト氣主岬トノ間約五十海里ハ、海岸殆ト正北ニ走リ、高サ百尺乃至五百尺ノ海成段丘、直ニ海ニ臨ミテ懸崖ヲナス。西能登呂岬ヲ距ル北方十里ニシテ宗仁岬アリ。其ノ北側ノ宗仁ハ向海風時ニノミ碇泊ニ適スルモ、其ノ附近ハ一帶ニ暗礁多シ。眞岡灣ハ、舊トネベルスキー灣

ト稱シ氣主岬ト、西能登呂岬トノ間約七十五海里ニ互ル長灣岸ニシテ、分レテ數小灣トナル、其ノ主ナルモノハ、阿幸、大穂泊、眞岡及幌泊等ナリ。此等ノ小灣ハ何レモ灣内廣カラサルモ波靜ニ、結水スルコト亦稀ナルカ故ニ小船船ノ碇泊ニ適セリ。

眞岡灣ト久春内灣トノ間ニ在ル小能登呂岬ヨリ、鶴巢岬ニ至ル間ハ、突出セル海岸ニシテ其ノ間ニ唐佛、野田寒ノ二小灣アリ。共ニ水上ニ礁脈ヲ有スルヲ以テ、南北風ヲ遮蔽スルコトヲ得ヘシ。

知登(舊地名カモイナイボ)ヨリ鶴巢岬ニ至ル約二海里間ハ、黑色安山岩ノ斷崖ニシテ、怒濤常ニ岸ヲ噛ミ、實ニ西海岸ニ於ケル難所タリ。鶴巢以北ハ、海岸漸ク東方ニ偏向シテ久春内灣ヲ成シ、久春内ハ其ノ最凹所ニ在リ。

鶴城岬ハ、峻峻ナル圓崖角ニシテ、高サ八百呎、其ノ背後ニ來知志、鶴城、古丹等ノ圓錐火山アリ。鶴城灣ハ、鶴城圓崖角ノ北ニアリテ幅約三海里、彎入一海里、北西及偏西ノ諸風ニ暴露スレトモ、南西風ハ其南岸ナル牛舌ニ於テ、西風ハ其ノ北岸ナル北字須ニ於テ、共ニ之ヲ避クルコトヲ得ヘシ。

幌岸灣ハ、鶴城灣ノ北ニ隣スル小灣ニシテ、南西時ニ於ケル小舟ノ好錨地タリ。幌岸以北ノ海岸ハ、約六十海里、殆ト子午線ニ平行シテ、著シキ凹凸ナク露領ビレオ岬ニ至ル。

亞庭灣ハ、西能登呂岬ト、中知床岬トニ擁セラレタル一大灣ニシテ、彎入四十五海里、其ノ幅員六十海里ニ及ヘル半圓形ノ灣ナリ。直角崖ヲ成セル對馬岬、其ノ中央ニ突出シ、灣内更ニ千歲灣(舊名

ロツセイ灣)ヲ形成ス。

西能登呂岬ノ東西ノ兩側ハ、海岸ニ急下シ、南方ハ岬角ニ向テ漸降ス。岬端ニ紅色煉瓦石造ノ燈臺ヲ設ク、白色ノ燭光能ク十八海里ニ達ス。此ノ岬ヲ距ル南東八海里ノ處ニ、高サ約二十呎直徑六十呎ノ裸岩アリ、俗ニ二丈岩ト稱ス。又其ノ北東ニ西能登呂灣(又モルジー灣トモ云フ)アリ、此ノ灣ハ能ク秋冬ノ流行颶ヲ障ヘ得ルモ南方及東方風ニハ全ク暴露ス、西能登呂岬ノ東側西能登呂灣ノ南ニ隣リテ小泊ト名ツクル小灣アリ、小舟ノ碇泊ニ適ス。

千歲灣ノ北岸ハ、鈴谷川、留多加川ノ河口ヲ控ヘ、水深頗ル淺シ。其ノ東岸ハ、高原直ニ海ニ臨ミ、灰色凝灰岩ノ斷崖ヲ顯ハセリ。大泊港ハ、千歲灣内ニ在リ對馬岬ノ北ニ位ス、人工ノ保障ナク、且ツ遠淺ナレトモ丘陵起伏シテ北風及東風ヲ遮リ、波浪靜穩、灣内ニ於ケル最良ノ碇泊地タリ。

東海岸ハ西海岸ニ比シテ、凹凸多ク且ツ其ノ凹凸ノ差著シ。即チ西海岸ノ最凹所タル久春内灣中ノ久春内ト、其ノ凸所タル鵜城圓崖角トノ經度ノ差ハ、僅ニ約十三分ニ過キサレトモ、東海岸ニ在リテハ、其ノ最凹所タル眞縫ト、最凸所タル北知床岬トノ距離ハ二度餘ニ上レリ。

東海岸ニ於ケル著シキ岬角ハ皆別岬、東小能登呂岬、野手戸岬、北知床岬及穴岩岬ニシテ、灣ノ著シキハ富内灣、眞縫灣、多來加灣等ナリ。

富内灣ハ愛郎岬ノ西ニ在ル一大灣ニシテ富内湖及恩洞沼ハ狹窄水道ヲ以テ此ノ灣ト相通ス。其ノ南

東隅ニ愛郎灣ト名ツクル小灣アリ、愛郎灣ハ富内灣ト共ニ愛郎岬ノ高角ニ依リテ、安全ニ東風ヲ避クヘキ東海岸唯一ノ避難所ナリ。

眞縫灣ハ、約百海里ノ灣岸ヲ有シ、其ノ最凹所タル眞縫ハ、西海岸久春内ト殆ト腹脊ノ形ヲナシ本島ノ最狹部ニ屬シ、其ノ幅員僅ニ七里ニ過キス。然レトモ、灣内好錨地ナキヲ遺憾トス。眞縫ノ北、輪荒ヨリ帆矢向ニ至ル約五里ノ間ハ、古來突岬ノ險ト稱スル難所ニシテ、山道ヲ取ルニアラサレハ陸行シ難シ。

多來加灣ハ、其ノ灣口ノ幅員約七十海里ニシテ灣入深カラス、灣頭ハ多來加湖畔及幌内河畔ノ廣漠タル平地ニシテ、西方僅ニ山脈ノ連互スルモノアルノミ、灣内別ニ好錨地ナク、唯ニ三百石内外ノ帆船ノ幌内河口及多來加湖口ニ入ルコトヲ得ルノミ。

二、山系 西部山地帯ノ脊骨トナレル幾多ノ連山ハ、所謂樺太山脈ニシテ、概ネ南北ニ延ヒタル平山頂ヲ有シ、幾條ノ深谷ヲ以テ南北ニ斷續ス。而シテ此ノ山脈ハ四十九度三十分附近ニ於テ、屹然崛起シテ幌登岳(一名ニクツノボリ)トナリ、海拔約四千餘尺ニ達セルモ、四十八度半以南ニ至リテハ、漸ク低下シ、斯クテ本島ノ最狹部タル眞縫、久春内附近ニテハ最モ低下セルモ、再ヒ起リテ富士形ノ名寄岳、野田寒岳、留多加山等トナリ、能登呂半島ニ至リテ、平山頂ノ遠知志山トナリ、遂ニ西能登呂岬ニ終ル。其ノ山脈ノ東西兩側ニハ、丘陵性ノ山地蜿蜒トシテ起伏シ、西海岸ノ各所及東海岸ノ登

帆ヨリ眞縫ニ至ル間ハ、低キ山地上ニ、火山岩ヨリ成レル高峯南北ニ并立シ、直ニ海ニ臨メルカ故ニ、船舶爲ニ風浪ヲ避クルノ便アリ。

東部山地帯ハ、多來加灣頭ヨリ柏濱ニ至ル間、海底ニ没スルヲ以テ、自カラ南北ニ二分セラル。即チ北部ハ奇峯重疊セル多來加山脈ヲ有シ、五十度附近ニ於テ海拔二千尺ニ達スル所アリ。南西ハ多來加湖ノ北ニテ全ク絶エ、南東ハ延ヒテ北知床半島ヲ成シ、一タヒ船越ニ於テ没シ、再ヒ一ノ丘陵ヲ起シテ遠ク南方ニ突出ス。船越ハ約十五町ノ地峽ニシテ其ノ間ニ湖沼ヲ挟ミ細狭ナル洲帶ヲ以テ僅ニ半島ヲ連綴ス。東部山地帯ノ南部ニ於ケルモノハ海拔約二千五百尺ノ鈴谷岳ヲ有スル鈴谷山脈其ノ脊骨トナリ、南ハ大泊高原トナリ、南東ハ富内低地ヲ以テ一タヒ斷絶シ、再ヒ知床山脈ヲ起シ海拔約千尺ノ高サニ達セリ。

三、平原 中央凹地帯ハ、幌内河口附近ヨリ相川附近マテ、海水ニ没シタル爲、分レテ南北ノ二帶トナル。北中央凹地帯ハツイミ川、幌内川ノ流域ニシテ、其ノ延長約七十餘里、(我領土ニ屬スル部分ニ在テハ約二十八里)、幅員約五里乃至八里餘トス。其ノ大部分ハ、所謂「ツンドラ」ト稱スル一種ノ低濕厚層ノ蘚苔成泥炭地ニシテ、地上ニハ厚キ蘚苔ノ類密生シ沼澤所々ニ散在セリ、而シテ此ノ「ツンドラ」地帯ニ密生セル蘚苔類ハ馴鹿ノ好飼料ナルヲ以テ「ギリヤーク」「オロチヨン」等ノ土人居住シテ之ヲ牧養セリ。

南中央凹地帯ハ相川附近ヨリ鈴谷河口附近ニ至ル約二十五里ニ互レル平野ニシテ、北中央凹地帯ニ於ケルカ如キ泥炭ノ厚層ナク、土地豊饒、本島中ノ最モ農牧ニ適スル地ニシテ既ニ幾多ノ農村散點セリ。此ノ平原ハ相川流域、内淵川流域、大谷川流域、鈴谷川流域、留多加川流域ノ五原野ヨリ成レリ。

此ノ兩凹地帯ノ外向ホ東西兩山地帯ヲ貫流スル河川又ハ湖沼附近ニモ、小平野少カラス、其ノ主ナルモノハ、北名好川、來知志湖、久春内川、野田寒川、列丹川、椎内川、南名好川、富内湖、馬群潭川、東知取川及内路川等ニ沿ヘル平野ナリトス。

四、水系 本島ハ廣濶ナル平野、其ノ中央ヲ縱斷セルヲ以テ、水脈ハ自然其ノ兩側ニ蜿蜒駢走シテ、各海岸ニ偏在セリ。

中央凹地帯ヲ流域トセル河流ニハ、廣大ナルモノアレトモ、其數甚タ少シ。然レトモ、東西兩海岸ニ向テ、急斜面ヲ流下スル水流ハ、孰レモ狹小ニシテ、其ノ數頗ル多シ。而シテ、山岳ニハ概シテ樹木多キヲ以テ、水量常ニ絶ヘサルモ、降雨ノ爲、水量激増スルコト少ナシ。唯河身ハ一般ニ人工的設備ヲ缺キ、自然ノ儘ニ放棄セルヲ以テ、融雪期ニ至レハ、時ニ氾濫シテ害ヲ及ホスコトナキニアラス、又低卑ナル泥炭地ヲ流ル、モノハ、概ネ多量ノ有機物ヲ含有シ、水色常ニ暗褐色ヲ呈スルモ、其ノ支流及山間ノ細流ニ在リテハ、清冽ナルモノ多シ。要スルニ本島ノ如ク、土地ノ面積ニ比シテ水流ニ富メルハ、稀ニ見ル所ナリトス。

本島ニ於ケル著大ノ河川ハツイミ川、幌内川ニシテ共ニ其ノ源ヲ北中央凹地帯ノ中部ニ發シ、一ハ北へ、一ハ南へ各三十有餘里ノ間、蜿蜒蟠流シ、北中央凹地帯ヲ縦貫シテ海ニ注ク。

幌内川ノ本流ハ源ヲ北中央凹地帯(露領)ニ發シ、西流シテ「ツンドラ」ノ中央ニ出テ、南流スルコト約三十餘里(直距)ニシテ、多來加灣ニ注ク、河口ヨリ約六里ノ上流ニ於テ、南東方ニ分流スルモノヲ多蘭川ト爲ス、多蘭川ハ本流河口ヨリ、北東約一里半ノ地ニ於テ海ニ注ク。幌内川ノ幅ハ、河口附近ニ於テ約百五十間、深サ平均四五尺ニ過キスト雖、其ノ淺瀬ヲ過クルトキハ、深サ十四尺乃至二十尺トナリ、夏季ニハ小帆船幅輻ス。河口ヲ距ルコト約半里ニシテ佐知(舊名シヤチガレ)ト云ヘル土人ノ一部落アリ、河幅此處ニ至テ廣ク、恰モ一大湖ノ如シ。サレト河ハ湖ルニ從テ、其幅漸ク狹ク、五十度附近ニ至テハ三十間内外ニ過キス。幌内川ニ入ル支流ノ大ナルモノハ、左岸ニ少クシテ右岸ニ多シ。左岸ニ在テハ五十度附近ニ於ケルムイギ川ヲ除クノ外ハ、悉ク「ツンドラ」ヨリ出ツル水流ニシテ、暗赤色ヲ呈ス。ムイギ川ハ、東北山脈ノ中央部ヨリ發シ、振戸山ノ北麓ヲ過キテ北西ニ流レ、五十度以南二里半ノ地ニ於テ、幌内川ニ注ク。右岸ニハ大ナル支流多シ、其ノ著名ナルモノヲ列擧スレハ、敷香川、シヨツドイ川、ホイエ川、チエルンガイ川、アトンガイ川、ケツトンガイ川、コノギ川、ハングサ川等ナリ。

是等ノ支流ハ、西部山地帯ノ中央ニ發源シ、深谷ヲ刻ミテ南流或ハ北流シ、該山地帯ノ東部ニ聳ユ

ル高峻ナル牆壁ノ間ヲ曲流シテ「ツンドラ」ニ出テ、比較的廣キ礫床ヲ作リテ水勢緩ク幌内川ニ入ル。幌内川ハ約三日間ニシテ潮行スルコトヲ得ヘキモ、其ノ他ハ急流ニシテ淺ク、處々ニ流木堆積シテ舟楫ニ便ナラス。

本島中我領土ニ於ケル著名ノ河川ハ、幌内川ノ外東海岸ニハ新間川、東知取川、馬群潭川、内淵川等アリ、多來加湖ニ注入スル振戸川、留久玉川及毛賣川アリ、千歲灣ニ注クモノニハ鈴谷川、留多加川アリ、西海岸ニハ惠須取川アリ。

鈴谷川及内淵川ノ支流大谷川ハ、南中央凹地帯ヲ迂回シ鈴谷川ハ南流シテ、貝塚附近ニ於テ千歲灣ニ注キ、大谷川ハ北流シテ多古惠川トナリ、落合ニ於テ内淵川ニ合ス。

惠須取川ハ、新間川ト其源ヲ同ウシ幽邃ナル豁谷ヲ經テ南流シ、赤澤川(源ヲ來知志山ニ發ス)及シケントマナイ川(源ヲ釜伏山ニ發ス)ヲ合シテ、水勢漸ク緩慢トナリ海ニ注ク。河口ノ幅員十餘間ナレトモ、上流約四里ニ至レハ六間内外トナル、水深ハ六尺乃至十五尺ナリ。

内淵川ハ、其源ヲ野田寒岳ノ北東麓ニ發シ、西部山地帯ヲ南東ニ流レテ、數多ノ支流ヲ合セ、川南ニ至リテ、内淵平原ニ出テ、落合ニ於テ多古惠川ヲ合シ、北走シテオホーツク海ニ注ク。河口附近ハ幅廣クシテ、能ク小船ヲ繫留スルニ足ル。上流約十里マテハ、尙端舟ヲ通スルモ、其ノ上流ニ至リテハ、水勢急ニシテ水淺ク、舟楫ノ便全ク絶ユ。

群馬潭川ノ水源ハ、來知志川ノ水源ト相對シ、南流シテ幾多ノ支流ヲ合シ、海岸ニ壁立セル山脈ヲ貫キテ海ニ入ル。其ノ下流ニ於ケル平地ハ、稍廣大ナリト雖、概ネ湿地ニシテ、海岸山脈ノ背後ニ延長ス、東知取川ハ源ヲ西部山地帯ニ發シ、南流シテ、二三ノ支流ヲ合シ、更ニ南東ニ流レテオホーツク海ニ注ク、水勢急ニシテ淺シ。

新開川ノ水源ハ、惠須取川ト相接近シ、南東ニ流レテ海ニ注ク。下流ハ稍大ナル階段的平地ヲ有シ、水淺ク、急流ニシテ、約二三里間小艇ヲ浮フルニ足ルノミ。野頃川ハ、其ノ源ヲ北緯四十九度三十分附近ノ東部山地帯ニ發シ、南西ニ流レテ、廣大ナル「ツンドラ」ニ出テ、蛇行迂回シテ、多來加灣ニ注ク。河口ニ野頃湖アリ。

多來加灣ニ注入スル河川ハ、其ノ數多シト雖、振戸川及留久玉川ヲ除キテハ、皆其ノ源ヲ「ツンドラ」ニ發セリ、振戸、留久玉二川ハ、何レモ振戸山ノ南側ヨリ發シ南流シテ「ツンドラ」ニ出テ、多來加灣ニ注ク、共ニ舟楫ノ便ナシ。

五、湖沼 本島ニハ、湖沼ノ數甚タ多キモ、之ヲ種別スルトキハ、大要二ト爲スコトヲ得。即チ(一)ハ内地ニ瀦溜スルモノ(二)ハ海岸ノ平地ニ在リテ、細狹ナル凹洲ヲ以テ海ニ面スル一方ヲ限ラル、モノトス。而シテ其ノ廣大ナルモノハ、概ネ後者ニ屬ス。

其ノ第一種ニ屬スルモノハ、主トシテ中央凹地帯ニ散在シ、殊ニ幌内川ノ兩側「ツンドラ」中ニハ無數ニ散在シ、魚族ノ繁殖セルモノ亦多シト雖、著大ナルモノヲ見ス。又第二種ニ屬スルモノニシテ其ノ著シキモノヲ舉クレハ、多來加灣、來知志湖、富内湖、池邊瀆湖、遠淵湖、和愛湖ノ六湖トス。

多來加灣ハ多來加灣ノ海岸ニ平行シテ、東西ニ廣ク、南北ニ狭キ一大湖ナリ。其ノ面積約四平方里ニシテ北ニ豁然タル「ツンドラ」ヲ控ヘ振戸、留久玉、毛賣等ノ諸川ハ、皆之ニ注入ス。而シテ南ハ幅僅ニ一町乃至七町、長サ東西約八里ノ長キ洲帶ヲ以テ、多來加灣ヲ隔ツ。其ノ多來加灣ニ通スル所ノ水路ハ小帆船、河口ヨリ約三十町ヲ潮行スルコトヲ得ヘク、殊ニ其ノ水流極メテ緩ナルヲ以テ、此ノ間隨所ニ繫泊スルニ便ナリ。

來知志湖ハ來知志、鶴城等ノ火山叢ノ南方ニ在リ。南西ハ一條ノ洲帶ヲ以テ、外海ヨリ限ラレ、湖口ハ小帆船ヲ出入セシムルニ足ル。富内湖、池邊瀆湖、和愛湖、遠淵湖ハ鈴谷山脈ト中知床山脈トノ中間平地ニ在リ。富内湖ハ面積略ホ多來加灣ニ等シ。而シテ北方ニ長キ洲帶ヲ以テオホーツク海ヲ隔テ、南ハ池邊瀆、和愛ノ二湖ト相距ル遠カラス、故ニ灣内ヨリ富内ニ到ル通路トナレリ。遠淵湖ハ遠淵ニ於テ亞庭灣ト相通シ、十二呎港ノ名アリ。僅ニ小船ヲ繫泊セシムルニ過キス、灣口ノ水深ハ十一呎乃至十八呎ナリ。

北知床半島及其ノ頸部ニ湖沼ノ多キコトハ、恰モ中知床半島ト鈴谷山脈トノ間ニ於ケルカ如シ。多來加灣ヨリオホーツク海ニ到ル通路ハ、東西二條ノ洲帶ヲ以テ、北知床半島ヲ連結シタル處ニシテ、

其ノ洲帶ノ中間ニ、湖水ヲ湛ヘタル船越ト稱スル頸部ヲ横斷スルヲ常トス。西海岸ニ於テ、湖沼ノ多キハ惠須取川ノ北ナル塔路附近ニシテ數箇ノ小湖海岸ニ散在ス。其ノ稍大ナルモノヲ雄武沼及塔路沼トス。

六、島嶼及段丘 島嶼ハ、僅ニ海馬島及海豹島ノ二アルノミ。海馬島(舊名トドモシリ)又ハマネロシ)ハ、西海岸ヲ離ル、コト三十海里ニシテ、舊火山跡ノ頂嶺少シク海面上ニ表ハレタル、周圍五里餘ノ一小島ナリ。島中平地少ク、海岸ハ懸崖壁立シ、怒濤其ノ崖下ヲ洗フ。然レトモ泊皿、宇須、磯浦、鷗澤等ノ灣入アリ、且ツ山岳高キヲ以テ、風向ノ如何ヲ問ハス、島ヲ廻リテ風波ヲ避クルニ便ナリ。本島ハ海驢ノ棲息地トシテ有名ナリ。海豹島(舊名チユレニ又ロツベン)ハ、東海岸北知床岬ノ南方指呼ノ間ニ在リ、周圍半里ニ足ラサル叢爾タル一小島ナルモ、臘胸獸ノ棲息地トシテ著名ナリ。階段的地貌ハ、本島到ル處ニ之ヲ見ルコトヲ得。海岸ニハ海岸段丘及海底段丘アリ。河岸ニハ河岸段丘アリ、海岸ノ臺地及河岸ノ平地ハ、階段の性質ヲ有ス。其ノ最モ壯大ナルハ、幌内河畔數里ニ互レル「ツンドラ」ニシテ遠ク幾多ノ階段ヲ成シテ山地ニ達ス。海底段丘ハ、亞庭灣内及西海岸ニ於テ著シク發達シ、其ノ縁端ハ石段ヲ成シテ、防波ノ作用ヲナス。爲ニ、其ノ内方一帶ハ波靜ニシテ、能ク小舟ノ航行ニ適セリ。

第三項 海流

海流ニ關シテハ、未タ充分ナル驗測ヲ爲シタルモノナキヲ以テ、其ノ精細ナル狀況ヲ記述スルコト能ハスト雖、今日マテ内外人ノ研究シタル結果ヲ綜合スレハ、本島殊ニ邦領樺太ニ在リテハ、海流ノ恩惠ヲ蒙ルコト尠カラサルヲ知ル。即チ本島ノ地形上大ナル岬角ハ、南東方及西方又ハ南方ニ突出セルカ爲、オホーツク海ヨリ南流スル寒流ハ、之カ爲ニ遮ラレ、本島南部ノ沿岸ニ於テ、其ノ暴威ヲ逞フスルコト能ハス。之ニ反シ、日本海ヨリ北流スル暖流ハ、本島南部ノ海岸ヲ洗フヲ以テ、漁業上大ナル幸福ヲ與フルノミナラス、沿岸一帶ノ氣候ヲ溫和ナラシメ、結氷ヲ防キ、南西海岸ノ如キハ、冬季航海杜絶ノ憂ヲ免ル。而シテ暖流ハ所謂對馬海流ノ名稱ヲ有スル黒潮ノ支流ニシテ、其ノ一ハ北海道ノ西岸ヲ經テ、宗谷海峽ニ入り、直ニ東偏シテ北見海岸ヲ洗ヒ、西能登呂岬ノ東方ニ於テ、亞庭灣ニ流入シ、其ノ一支流ハ北東ニ流レ、中知床岬ヲ遠リ、東海岸ニ沿ヒテ北流ス、他ノ一ハ利尻島、禮文島ノ西側ヲ洗ヒ海馬島ヲ包擁シテ、氣主岬附近ヨリ、本島海岸ニ沿ヒテ北ニ流ル。而シテ亞庭灣ニ流入スルモノハ、西能登呂岬ノ南東二丈岩ノ東方ニ於テ、深ク大泊附近ニ直進シ、後チ池邊濱ニ向ヒ、寒流ノ爲ニ其ノ勢ヲ殺カレ、甚タ微弱トナルニ似タリ。又東海岸ニ向フ一分派ハ、中知床岬ヲ遠リ尙ホ北進シテ、多來加灣ニ達スルモノ、如シ、然レトモ此ノ派ノ進路ハ未タ確實ナラスシテ、或ハ中知床半島ノ東側ニ於テ、二派ニ分レ、一ハ遠ク陸岸ヨリ離レテ北流シ、一ハ愛郎岬ヨリ陸岸ニ沿ヒテ北流シ、東白浦、馬群潭ノ海濱ヲ洗フテ、多來加灣ニ入ルモノ、如シ。

寒流ハ、オホーツク海ノ奥ヨリ來ルモノハ、本島ノ北東岸ヲ洗フテ南下シ、北知床岬ニ遮ラレテ、稍方向ヲ轉シ、南進スルニ從ヒ、漸次西方ニ偏シ、中知床岬ノ東側ニ衝突シテ、陸岸ヲ離レ、一部ハ南流シテ、北海道北見ノ枝幸方面へ、一部ハ中知床岬ノ沖合ヨリ、西ニ折レテ、西能登呂岬方面へ突進スレトモ、本島ノ沿岸ニハ接近セサルモノ、如シ。又寒流ノオホーツク海ノ北西部ヨリ起リテ、間宮海峡ヲ通過シ、本島ノ北西岸ヲ洗フモノハ、風潮、季節等ニヨリテ、其ノ流勢一定セスト雖、概ネ大陸ニ沿フテ流レ本島西海岸ニ及ホス影響甚タ少シ。

以上ハ樺太全島ノ地勢并ニ邦領樺太ニ於ケル、山河湖沼ノ概略ニ過キス。按スルニ、本島ハ其ノ地形細長ニシテ、面積亦甚タ廣カラサルモ、其ノ南半海流ノ影響ニ依リテ、氣候自カラ調和セラレ、諸種ノ魚介ヲ産シ、其ノ縦貫セル三大地帯中、東西ノ山地帯ハ、森林、礦物ニ富ミ、中央凹地帯ノ沃地ハ、農牧ニ適スルノミナラス、天然ノ一大縦貫交通路トナリ、兩側山地帯ノ利源開發ニ至大ノ便宜ヲ與フ。唯海岸凹凸極メテ少ク、安全ナル港灣ナキヲ憾ムノミ。

第三節 氣象

第一項 總說

本島ハ地形狹長ニシテ平地ニ乏シク、南北緯度ノ差四度餘ニ互リ、東ハオホーツク海ニ臨ミ、西ハ韃靼海灣ヲ隔テ、大陸ニ對シ、沿岸ハ寒暖二種ノ海流ニ洗ハル、ヲ以テ、氣候ニ著シキ差違アリ。

一年ノ平均氣溫ハ、四度乃至氷點下一度ノ間ニ在リテ、南西ヨリ北東ニ向ヒテ遞減シ、夏季ハ比較的溫暖ナルモ、冬季ハ著シク低温ナルカ故ニ、寒暖兩期ニ於ケル平均氣溫ノ差ハ、南西沿海地ニ於テモ三十度ニ垂ントシ、内部及北東部ハ三十四五度ニ及フ。又盛夏ノ候ニ在リテハ、内部ハ氣溫最高三十度以上ニ昇ルコトアリト雖、嚴寒ノ候ニ至レハ、南西沿海地ヲ除クノ外、概ネ氷點下三十度以下ニ降リ、内部ニ於テハ往々氷點下四十度以下ニ降ルコトアリ。之ヲ北海道内部ニ比スレハ、一般ニ夏季ハ涼冷ニシテ、内部及北東部ハ、冬季著シク寒冷ナリトス。殊ニ冬季ニ在リテハ、北風多クシテ風力強ク、降雪積ンテ根雪トナリ、西海岸南部ヲ除ケハ、海水モ亦凍結シテ、日平均氣溫ハ、概ネ氷點以下ニ降り、最高氣溫スラ、氷點以上ニ昇ルコト甚タ罕レナリ。積雪ハ沿海地ニ在リテハ、概ネ一二尺ニ過キサレトモ、内部及北東部ハ多量ニシテ、五六尺ニ及フ、然レトモ、多大ノ降雪ハ暴風ニ伴ヒ、吹雪ヲ起スカ故ニ、深サ一様ナラス。天氣ハ主山脈ノ左右ニ依リ、全ク其ノ趣ヲ異ニシ、西海岸ハ、概ネ陰曇ニシテ、降雪殆ント絶ヘサルモ、東海岸殊ニ多來加灣ニ面スルノ地ハ、常ニ霽明ニシテ、降雪回数甚タ少ク、恰モ北越ト關東地方ニ於ケルカ如ク、其ノ隔絶著シキヲ見ル。夏季ハ之ニ反シテ南風卓越シテ吹キ、風力概ネ弱シ、氣溫ハ著シク高昇シ、日平均氣溫ハ往々二十度以上ニ昇リ、最高氣溫ハ北東部ニ於テモ、三十度以上ニ達スルコトアリ、間々卓越風ノ衰頽ニ依リ、陰鬱ナル天氣打續キ、恰

モ内地ノ梅雨ニ讓ラサル狀況ヲ呈スルコトアリト雖、亦旬日ニ互リテ著シキ降水ヲ見サルコトアリ、晴雨孰レヲ問ハス、繼續スルノ傾キアリテ、其ノ變化全般ニ及ヒ、又冬季ニ於ケルカ如キ狀態ヲ有セス。サレト此季ハ、海霧ノ發生最モ盛ニシテ、西能登呂及中、北知床岬端附近ノ如キハ殊ニ多ク、其ノ濃密ナル日數ヲ以テスルモ、四十日内外ヲ算シ、好晴ナル天氣ヲ見ルコト幾ント稀ナリ。春秋兩季ハ、風位ノ轉換期ニシテ、天氣ノ變化甚シク、晚秋初冬ノ候ニ於テハ、大陸暴風ノ襲來殊ニ頻繁ニシテ、前者未タ通過シ終ラサルニ、後者相踵テ起リ、天氣概ネ不良ニシテ、靜穩ナルノ日甚タ少シトス。

要スルニ本島ノ氣候ハ、大陸ニ似テ、冬季甚タ寒キニ拘ラス、春暖ヲ迎フルコト著シク遲緩ニシテ、秋冷ヲ促カスコト急ナルカ故ニ、最低氣溫ノ氷點以下ニ降ラサルハ、六月下旬ヨリ九月中旬ノ間ニ在リテ、百日内外ニ過キス、此期間ヲ除ケハ概ネ霜雪ヲ見サルコトナシ、氣候既ニ斯ノ如クニシテ、溫暖ナル期間甚タ短キカ故ニ、夏季ニ至レハ百花一時ニ開キテ、遠巒幽溪到ル處馥郁タルモ、秋季ハ忽チニシテ紅葉シ、忽チニシテ落葉スルヲ常トス。

第二項 氣溫

各地測候所創立以來明治四十五年ニ至ル、毎月ノ平均氣溫(攝氏ノ度)ハ氷點以下ヲ示ス)ヲ示セハ左ノ如シ。

地名別	年觀測數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊	七(一)二(一)一〇(六)	五(一)七(一)	五(一)七(一)	一(一)一(一)	五(一)五(一)	九(一)八(一)	一(一)四(一)	一(一)六(一)七(一)	一(一)三(一)〇(一)	六(一)六(一)	一(一)二(一)	七(一)七(一)	二(一)五(一)
眞岡	五(一)〇(六)	九(一)一(一)	四(一)九(一)	二(一)二(一)	六(一)三(一)	一(一)一(一)三(一)	一(一)四(一)六(一)	一(一)七(一)一(一)	一(一)三(一)三(一)	六(一)八(一)	〇(一)八(一)	七(一)一(一)	三(一)一(一)
落合	五(一)一(一)七(一)三(一)	一(一)四(一)七(一)	八(一)〇(一)	〇(一)八(一)	五(一)八(一)	一(一)〇(一)四(一)	一(一)四(一)二(一)	一(一)六(一)二(一)	一(一)一(一)七(一)	五(一)三(一)	二(一)九(一)	一(一)一(一)	〇(一)九(一)
敷香	五(一)一(一)九(一)七(一)	二(一)六(一)一(一)	九(一)二(一)	〇(一)五(一)	三(一)七(一)	八(一)四(一)	一(一)二(一)七(一)	一(一)五(一)〇(一)	一(一)一(一)四(一)	四(一)三(一)	五(一)七(一)	一(一)五(一)三(一)	〇(一)九(一)
豐原	七(一)一(一)五(一)二(一)	一(一)三(一)五(一)	七(一)八(一)	一(一)〇(一)	六(一)二(一)	一(一)〇(一)七(一)	一(一)四(一)八(一)	一(一)六(一)九(一)	一(一)二(一)〇(一)	五(一)三(一)	三(一)〇(一)	一〇(一)一(一)	一(一)五(一)

本表ニ因リテ視レハ、各地トモ、月平均氣溫ノ氷點上ニ在ルハ、四月ヨリ十月ノ七ヶ月間ニシテ、十一月ヨリ三月ニ至ル五ヶ月間ハ氷點下ニ在リ、但シ敷香ハ十一月ヨリ四月ニ至ル六ヶ月間トス。最寒ナルハ一月、最暖ナルハ八月ニシテ、平均ニ近キハ四月ナリ。又一年中ノ變化ニ就テ視レハ、溫度ノ急昇スルハ融雪期ニシテ、其ノ劇降スルハ、降雪初期ナリ。即チ三月ト四月トノ差ハ、南西部ニ於テハ七度内外ニシテ、内部及北部ハ九度乃至十度ニ達シ、十月ト十一月トノ差ハ、南部ニ於テハ八度、北部ハ十度ニ達ス。而シテ溫度ノ昇リ初メニ於テハ、内部ハ沿海地ニ比シ、著シク急劇ナリトス、各地ヲ通シテ、冬季ハ其ノ差甚タ大ナレトモ、夏季ハ小ナリ、即チ最暖ナル眞岡ハ、最寒ナル敷香ニ較フレハ、冬季ニ於テハ八度餘ノ高溫ヲ示セトモ、夏季ハ其ノ差二度餘ニ過キス。而シテ又、内部ハ沿海地ニ比スレハ、冬季著シク寒冷ニシテ、夏季ハ高溫ナルカ故ニ、落合ハ大泊ニ比シ、約五度ノ低溫

トナリ夏季ハ殆ント差ナシ、豊原ハ落合ニ比スレハ、冬季ハ一度餘高ク、夏季モ亦稍高シトス。又西
 海岸ハ東海岸ニ較フレハ、冬季ニ於テハ二三度高ク、真岡ハ大泊ニ比スルモ一度内外高シトス。
 毎月ノ平均最高最低氣溫ヲ示セハ左ノ如シ。

地 名	大 泊		真 岡		落 合		敷		香		豊 原	
	平均最高	平均最低	平均最高	平均最低	平均最高	平均最低	平均最高	平均最低	平均最高	平均最低	平均最高	平均最低
一 月	七.五	一.六	七.四	一.三	八.九	二.六	一.四	一.四	二.六	一.一	九.〇	二.一
二 月	六.一	一.五	六.一	一.二	六.九	二.三	一.三	一.三	二.三	一.一	六.九	一.一
三 月	一.七	一.〇	一.六	一.七	一.五	一.五	一.五	一.五	一.五	一.一	一.一	一.一
四 月	四.九	二.二	五.四	一.一	五.八	三.五	三.一	三.一	四.〇	一.一	六.五	一.一
五 月	九.六	一.六	九.八	二.六	一.三	一.三	七.五	三.一	四.七	一.一	六.五	一.一
六 月	一.四	六.〇	一.四	七.七	一.六	五.八	一.一	一.五	〇.四	一.一	一.一	一.一
七 月	一.八	一.〇	一.七	一.四	一.九	九.七	一.五	一.五	五.六	一.一	一.一	一.一
八 月	二.〇	一.〇	二.一	一.四	二.二	一.六	一.六	一.六	九.六	一.一	二.〇	一.一
九 月	一.七	一.一	一.七	一.一	一.九	一.六	一.六	一.六	一.六	一.一	一.一	一.一
十 月	一.〇	二.二	一.〇	二.八	一.七	一.二	一.八	一.二	一.六	一.一	一.一	一.一
十 一 月	二.二	五.〇	二.三	三.八	一.八	一.一	一.五	一.一	一.五	一.一	一.一	一.一
十 二 月	四.二	一.一	四.五	九.九	五.三	一.八	一.八	一.八	二.〇	一.一	五.五	一.一
年	六.五	一.六	六.六	〇.二	六.九	一.一	五.一	一.一	五.五	一.一	七.三	一.一

平均最高氣溫ト雖、十二月ヨリ三月ニ至ル四ヶ月間ハ、氷點以下ニ在リ。北東部ハ十一月ヲ加ヘ五
 ヲ月ニ及ヘリ。平均最低氣溫ニ至リテハ、十一月ヨリ四月ニ至ル六ヶ月間ハ、氷點以下ニ在リテ、内
 部及北東部ハ十月ニ於テモ氷點ヲ降レリ。平均較差ハ、内部及北部ニ在リテハ、冬季殊ニ大ニシテ、
 春夏ノ交ニ小ナレトモ、西海岸南部ニ於テハ、初秋ノ候ニ大ニシテ、冬季反テ小ナリトス。
 毎月ノ最高最低氣溫ノ極數ヲ示セハ左ノ如シ。

地 名	大 泊		真 岡		落 合		敷		香		豊 原	
	高 極	低 極	高 極	低 極	高 極	低 極	高 極	低 極	高 極	低 極	高 極	低 極
一 月	一.六	三.七	一.四	二.四	一.五	四.五	一.三	一.三	三.九	一.一	一.一	四.〇
二 月	二.五	一.五	三.五	二.四	四.七	三.七	四.九	四.九	三.九	一.一	一.一	三.七
三 月	六.二	三.〇	六.〇	一.六	七.七	三.八	四.二	四.二	二.九	一.一	一.一	三.五
四 月	一.三	一.四	一.一	一.三	一.五	二.六	一.四	一.四	二.〇	一.一	一.一	三.〇
五 月	一.九	三.九	二.六	一.四	二.四	五.三	二.六	二.六	一.四	一.一	一.一	二.〇
六 月	二.三	一.四	二.三	一.一	二.七	一.五	二.四	二.四	一.八	一.一	一.一	一.六
七 月	二.七	一.七	二.三	三.六	三.一	一.七	三.〇	三.〇	一.八	一.一	一.一	一.四
八 月	二.七	五.一	二.七	五.三	三.〇	一.六	三.〇	三.〇	二.八	一.一	一.一	一.四
九 月	二.三	〇.六	二.五	一.七	二.八	一.五	二.五	二.五	一.一	一.一	一.一	一.四
十 月	一.七	七.九	一.八	六.五	二.五	一.八	一.九	一.三	一.〇	一.一	一.一	一.七

十一月	十二月	年
二二二 (一)	四四五 (一)	二七九 (一)
一九一	二二三	三三七
一四六 (一)	四三三 (一)	二七二 (一)
一四九	一七四	二四六
一五九 (一)	三二二 (一)	三二二 (一)
二四一	三四六	四五六
二二七 (一)	一四	三三〇
二六八	三四九	三九八
一四六 (一)	四九	三二〇 (一)
二六九	三二七	四二〇

二六

最高氣温ノ極數ハ、敷香ニ於テハ嚴寒一月ニハ、氷點ニ昇ラサレトモ、其ノ他ノ地ニ於テハ氷點ニ達シ、内部及北東部ニ於テハ、七八兩月ハ三十度ヲ超ヘ、敷香ハ嘗テ三十三度ニ昇リタルコトアリ。最低氣温ノ極數ハ、西海岸南部ヲ除ケハ、氷點下ニ降ラサルハ、七八兩月ニ過キス、冬季ハ氷點下三十度以下ニ降り、豊原ハ氷點下四十二度、落合ハ氷點下四十五度六ヲ測リタルコトアリ。極數ノ中數ニ於テモ、落合ハ、七八月ニ於テハ二十九度ニ上リ、一月ニ於テハ氷點下四十度ニ達ス、然レトモ、真岡ハ、八月ニ於テ二十五度、一月ニ於テ氷點下二十一度ニ止レリ。

第三項 氣壓

毎月ノ平均氣壓(耗)ヲ示セハ左ノ如シ。

地名別	年觀測	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊		七六二	七五九	七五九	七五八	七五八	七五七	七五七	七五八	七五九	七六〇	七五九	七五九	七五九
眞岡		五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五	五七五
落合		五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九	五七九

地名別	年觀測	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
敷香		五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六	五七六

平均氣壓ハ、秋冬ニ高ク、春夏ニ低シ。月別ニ視レハ、一月最モ高ク、十月之ニ次キ、六月最モ低ク、七月之ニ次ク。而シテ十一月ノ候ニ於テモ、亦甚タ高カラサルハ、暴風季節ニ屬スルカ故ニ、屢優勢ナル低氣壓ノ襲來ヲ蒙ルニ由ル。又最低氣壓ノ中數ヲ視レハ、其ノ七百四十耗以下ニ降ルハ、十一月及十二月ノ二ヶ月ニ過キサレトモ、最高氣壓ノ中數ニ於テハ、其ノ七百七十耗以上ニ昇ルハ、十月乃至四月ノ七ヶ月ニ及ヘリ。極數ニ於テハ明治四十一年十二月十八日ニ於ケル、敷香ノ七百二十八耗三ヲ低シトシ、之ニ次クハ明治四十三年一月三十一日ニ於ケル、大泊ノ七百二十八耗六ニシテ、明治四十二年一月十二日ニ於ケル、敷香ノ七百八十二耗一ヲ高シトス。

第四項 風

毎月ノ平均風向及最多風向ヲ示セハ左ノ如シ。

地名別	年觀測	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊		北東	北東	北西	南東	南東	南東	南東	南東	南東	北西	北西	北西	北東
眞岡		北東	北東	北西	南東	南東	南東	南東	南東	南東	北西	北西	北西	北東
落合		北東	北東	北西	南東	南東	南東	南東	南東	南東	北西	北西	北西	北東
敷香		北東	北東	北西	南東	南東	南東	南東	南東	南東	北西	北西	北西	北東

最多風向

地名別	觀測年數											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大泊	七北	七東北	七東	七南々西	七南々西	七南	七南	七東北東	七西	七北々西	七東北東	七北
眞岡	五東南	五東南	五東南	五東南	五南々西	五南	五南	五東南	五東北東	五西	五北々西	五東北東
落合	五南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南	五西南
敷香	五北々西	五北	五北	五南	五南	五南	五南	五南	五南	五北	五北	五北

平均風向ニ就テ視ルニ、各地皆風癖ヲ有シ、一定セスト雖、概括スレハ、四月乃至九月ノ六ヶ月間ハ、南風ニシテ、其ノ他ノ六ヶ月間ハ北風トナレリ、其ノ北風ヨリ南風ニ變スルハ、各地トモ、其ノ期ヲ一ニスレトモ、南風ヨリ北風ニ轉スルニハ、多少ノ遲速アリ。而シテ、東海岸北部ニ於テハ、其ノ南北孰レノ風ヲ問ハス、東ニ偏スルハ、五ヶ月間ニシテ、七ヶ月間ハ西ニ偏スレトモ、西海岸南部ニ於テハ、概ネ東ニ偏シ、其ノ西ニ偏スルハ、僅ニ二ヶ月間ナリトス。之ニ反シ、内部ハ、年中孰レノ月ニ於テモ、西ニ偏シ、六月及七月ノ二ヶ月ヲ除ケハ、其ノ他ノ十ヶ月間ハ南風ナリトス。最多風向ヲ觀レハ、判然タル區別アルハ、敷香ニシテ、四月乃至九月ハ南風、十月乃至三月ハ北風ナリ。而カモ、南風ノ期間ハ、大泊ニ比シテ、一ヶ月長シトス。秋季ニ於テ、東海岸北部ノ比較的溫暖ナル一因ハ、亦之ニ職由スルナラン。

毎月ノ平均風速度ヲ舉クレハ左ノ如シ。

地名別	觀測年數											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大泊	七六一	七六一	七四	七五九	七六二	七五二	七四六	七四八	七五六	七六〇	七五	七六二
眞岡	五八九	五九三	五九七	五七一	五七一	五三	五三	五〇	五九	八六	一一三	七九
落合	五三二	四〇	五三	五一	六〇	四八	四二	三九	三八	四三	四〇	三五
敷香	五四九	四八	六〇	四九	五二	四七	四八	四五	五一	五四	五七	六〇

平均風速度ハ、西海岸南部ニ最モ大ニシテ、内部ニ小ナリ。而シテ、沿海地ニ於テハ、秋冬ノ交ニ大ニシテ、夏季ニ小ナレトモ、内部ニ於テハ、春季ニ大ニシテ、冬季ニ小ナリ。月別ニ觀レハ南部沿海地ニ於テハ、其ノ最大ハ十一月ニシテ最小ハ七月ナレトモ、東海岸北部ニ於テハ、其ノ最大ハ十二月及三月ニシテ、最小ハ八月ナリ。内部ニ於テハ、其ノ最大ハ五月ニシテ、最小ハ一月ナリ。想フニ嚴冬ノ候ニ於テ、内部ノ氣温ノ著シク低降スルハ、風速度ノ小ナルコトモ、亦其ノ一因ナラン。

毎月ノ最大風速度(米)及暴風日數(風速度一秒時間十米以上)ヲ示セハ左ノ如シ。

最大風速度

地名別	觀測年數											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大泊	七三二〇	三六〇	三八五	二六一	三〇七	二二一	二一八	二五〇	二四九	三三〇	三一	九三三
眞岡	五三八〇	三八二	三五	二七一	二八六	二二二	二二	三二六	四一	三三	五三	七三
落合	五三八〇	三八二	三五	二七一	二八六	二二二	二二	三二六	四一	三三	五三	七三
敷香	五三八〇	三八二	三五	二七一	二八六	二二二	二二	三二六	四一	三三	五三	七三

地名	暴風日數											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
敷香	五	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一
落合	五	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一
真岡	五	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一
大泊	五	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一

暴風日數

地名	最大風速度ノ三十米以上ニ達スルコトハ、南西沿海地ニ於テハ、十月乃至三月ノ六ヶ月間ニ互リ、											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
敷香	五	九	一〇	一六	一三	八	八	七	一三	一四	一三	一三
落合	五	五	〇	一三	一三	八	五	五	五	八	七	六
真岡	五	二	二	二五	一八	一四	一〇	一〇	一六	一九	二六	二八
大泊	七	一六	一六	二〇	一七	一八	二二	二七	一三	一九	二二	二二

最大風速度ノ三十米以上ニ達スルコトハ、南西沿海地ニ於テハ、十月乃至三月ノ六ヶ月間ニ互リ、間々五月ニ於テモ、斯ノ如キ大速度ヲ現ハスコトナキニアラス。真岡ニ於テハ、一二月ニ於テ最大一時間平均三十八米ヲ測リタルヲ視レハ、其ノ如何ニ猛烈ナルカヲ知ルヘシ。東海岸北部ニ於テモ、冬季三ヶ月間ハ三十米ヲ超ユルコトアリ。内部ニ於テモ三月ニハ三十三米ニ達シタルコトアリ。暴風日數ニ就テ視レハ、南部沿海地ニ於テハ十一月及十二月最モ多ク、三月之ニ次キ、北東部ニ於テハ、三月最モ多ク十月及十一月之ニ次ク、此ノ三ヶ月間ノ總日數ハ、南西部ニ於テハ、七八十日ニ上リ、北東部ニ於テモ、四五十日ニ達ス。即チ本島南部ハ臺灣水道及千島南部ニ次キ、本邦中暴風殊ニ多キ地方ナリ。由來本島ニ襲來スル暴風ハ、其ノ南洋ヨリ來ルモノ甚タ稀ニシテ、概ネ大陸ニ發生スルモノナルカ故ニ、其ノ季節モ亦内地ニ比スレハ、約二ヶ月後ナリ。而シテ此ノ種暴風ハ發顯當初ニ於テハ概ネ優勢ナラサレトモ、北上スルニ從ヒテ發達シ、本島附近ニ於テ著シク深厚トナルヲ常トス、之ヲ以テ、此ノ期ニ於テ、一タヒ之カ襲來ヲ蒙ランカ、西風強吹概ネ兩三日ニ互リ往々四五日ニ及フコトアリ。然レトモ、内部ハ之カ影響ヲ蒙ルコト比較的薄ク、暴風日數ハ、寧ロ春季ニ多シトス。サレト、夏季ハ一般ニ少ナク、七月及八月ニ於テハ、最多月ニ比シ約其ノ三割ニ過キス。

方ナリ。由來本島ニ襲來スル暴風ハ、其ノ南洋ヨリ來ルモノ甚タ稀ニシテ、概ネ大陸ニ發生スルモノナルカ故ニ、其ノ季節モ亦内地ニ比スレハ、約二ヶ月後ナリ。而シテ此ノ種暴風ハ發顯當初ニ於テハ概ネ優勢ナラサレトモ、北上スルニ從ヒテ發達シ、本島附近ニ於テ著シク深厚トナルヲ常トス、之ヲ以テ、此ノ期ニ於テ、一タヒ之カ襲來ヲ蒙ランカ、西風強吹概ネ兩三日ニ互リ往々四五日ニ及フコトアリ。然レトモ、内部ハ之カ影響ヲ蒙ルコト比較的薄ク、暴風日數ハ、寧ロ春季ニ多シトス。サレト、夏季ハ一般ニ少ナク、七月及八月ニ於テハ、最多月ニ比シ約其ノ三割ニ過キス。

第五項 濕度

毎月ノ平均濕度(%)及最小濕度(%)ヲ示セハ左ノ如シ。

平均濕度

地名	平均濕度											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
敷香	五	七	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
落合	五	七	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
真岡	五	七	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
大泊	五	七	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八

最小濕度

地名別	觀測年數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊	七	四	三	二	二	三	四	三	三	三	三	三	四
眞岡	五	四	三	三	二	二	三	三	三	三	三	三	四
落合	五	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三
敷香	五	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	四

平均湿度ハ、夏季ニ高ク、春秋ニ低シ。各地ヲ通シテ月平均ハ九十二達スルコトアリト雖、七十二下ルコトナシ。總シテ、本島ハ海霧ノ發生多キカ故ニ、湿度ハ一般ニ甚タ高ク、一年ノ平均八十二達セサルノ地ナシ。東海岸北部ノ如キハ、平均八十四ニ上リ、最乾ナル月ニ於テモ七十九ニ止レリ。本邦中北海道東岸ニ次キテ最多濕ノ地トス。然レトモ春季最モ能ク乾燥スルノ時ニ在リテハ、三十以下ニ降ルコト敢テ珍シカラス、西海岸南部及内部ニ在リテハ往々十一ニ降ルコトアリ。

第六項 降水量

毎月ノ降水量(耗)及最大降水日量(耗)ヲ示セハ左ノ如シ。

降水量(耗)

地名別	觀測年數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊	七	二	一	三	五	七	八	六	九	九	八	三	五
眞岡	五	四	二	四	六	七	一	一	一	一	一	一	一
落合	五	三	四	六	七	七	一	九	六	一	一	一	一
敷香	五	三	三	六	六	七	一	九	六	一	一	一	一

最大降水日量

地名別	觀測年數												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊	七	二	一	三	五	七	八	六	九	九	八	三	五
眞岡	五	四	二	四	六	七	一	一	一	一	一	一	一
落合	五	三	四	六	七	七	一	九	六	一	一	一	一
敷香	五	三	三	六	六	七	一	九	六	一	一	一	一

降水量ハ、一般ニ夏季ニ多ク、冬季ニ少シ。月量ニ於テハ、多キモ、百五十耗ヲ出テス、少キハ、十耗ニ充タス。内部ハ沿海地ニ比スレハ、多キ方ナレトモ、尙年量九十耗ニ過キス。本邦ニ於テハ、最寡地ニシテ、略ホ北見沿岸ニ均シトス。最大日量ニ就テ視レハ、其ノ五十耗ヲ超ユルコトハ、少カラサレトモ、百耗ニ上ルコトナシ。

毎月ノ降水日數(降水量〇、一耗以上)ヲ示セハ左ノ如シ。

降水日數

地名	月別	觀測年數
大泊	一月	三二
大泊	二月	三三
大泊	三月	一五
大泊	四月	一三
大泊	五月	三三
大泊	六月	一二
大泊	七月	一四
大泊	八月	一四
大泊	九月	一四
大泊	十月	一五
大泊	十一月	一七
大泊	十二月	一六
大泊	年	一六七
真岡	一月	二二
真岡	二月	一七
真岡	三月	一八
真岡	四月	一四
真岡	五月	一三
真岡	六月	一五
真岡	七月	一四
真岡	八月	一四
真岡	九月	一五
真岡	十月	一七
真岡	十一月	二三
真岡	十二月	二二
真岡	年	二四〇
合	一月	二七
合	二月	三三
合	三月	一八
合	四月	一四
合	五月	三四
合	六月	一四
合	七月	一七
合	八月	一五
合	九月	一七
合	十月	一六
合	十一月	二三
合	十二月	二二
合	年	二〇九
香	一月	一〇
香	二月	一六
香	三月	一五
香	四月	一二
香	五月	二三
香	六月	一五
香	七月	一六
香	八月	一四
香	九月	一五
香	十月	一三
香	十一月	二二
香	十二月	一〇
香	年	一五二

降水日數ハ、南部ニ於テハ、秋冬ノ交ニ多ク、夏季ニ少キモ、北東部ニ於テハ、夏季ニ多ク、冬季

最少シ。而シテ、西海岸南部ニ於テハ、略ホ日本海南岸ニ均シク、一年ノ總日數ハ二百日ヲ超ユレ

トモ、東海岸北部ハ關東地方ト大差ナク、百五十日内外ニ過キス。

第七項 日照時

毎月ノ日照時數及百分率(可照時數ニ對スルモノ)ヲ示セハ左ノ如シ。

日照時數

地名	月別	觀測年數
大泊	一月	一三〇
大泊	二月	一五二
大泊	三月	一六九
大泊	四月	一八九
大泊	五月	一八九
大泊	六月	一八二
大泊	七月	一七二
大泊	八月	一七二
大泊	九月	一八九
大泊	十月	一七〇
大泊	十一月	一〇七
大泊	十二月	八九
大泊	年	一九六
真岡	一月	一四四
真岡	二月	一六二
真岡	三月	一七二
真岡	四月	一七二
真岡	五月	一七二
真岡	六月	一七二
真岡	七月	一七二
真岡	八月	一七二
真岡	九月	一七二
真岡	十月	一七二
真岡	十一月	一七二
真岡	十二月	一七二
真岡	年	二〇八
合	一月	一五五
合	二月	一七三
合	三月	一八二
合	四月	一八二
合	五月	一八二
合	六月	一八二
合	七月	一八二
合	八月	一八二
合	九月	一八二
合	十月	一八二
合	十一月	一八二
合	十二月	一八二
合	年	二一七
香	一月	一五
香	二月	二五
香	三月	三三
香	四月	四二
香	五月	五一
香	六月	五九
香	七月	六八
香	八月	七八
香	九月	八六
香	十月	九四
香	十一月	一〇二
香	十二月	一一〇
香	年	一七一

日照時數百分率

地名	月別	觀測年數
大泊	一月	四七
大泊	二月	五三
大泊	三月	五二
大泊	四月	四七
大泊	五月	三九
大泊	六月	三九
大泊	七月	三四
大泊	八月	四〇
大泊	九月	五一
大泊	十月	五一
大泊	十一月	三九
大泊	十二月	三三
大泊	年	四三
真岡	一月	二〇
真岡	二月	二六
真岡	三月	二八
真岡	四月	二四
真岡	五月	三六
真岡	六月	三五
真岡	七月	二六
真岡	八月	三五
真岡	九月	四二
真岡	十月	四二
真岡	十一月	二七
真岡	十二月	二六
真岡	年	三三
合	一月	五
合	二月	五
合	三月	五
合	四月	五
合	五月	五
合	六月	五
合	七月	五
合	八月	五
合	九月	五
合	十月	五
合	十一月	五
合	十二月	五
合	年	五
香	一月	五
香	二月	五
香	三月	五
香	四月	五
香	五月	五
香	六月	五
香	七月	五
香	八月	五
香	九月	五
香	十月	五
香	十一月	五
香	十二月	五
香	年	五

日照時數ハ、南西部ニ於テハ、初秋ノ候ニ多ク、初冬ノ候ニ少キモ、北東部ニ於テハ、初春ノ候ニ多ク、初夏ノ候ニ少シ。月別ニ視レハ多照ナルハ、敷香ノ三月ニシテ、二百時間ヲ超ユレトモ、真岡ノ十二月ハ、殊ニ寡照ニシテ、僅々二十時間ニ充タス。一年中ノ總時數ニ就テ云ヘハ、真岡ハ本邦中

第八項 霜雪

霜雪季節ヲ示セハ左ノ如シ。

霜雪季節

地名	觀測年數	霜		雪		根	
		初	終	初	終	平均初日	平均終日
大泊	七	九月廿五日	五月廿六日	十月廿六日	五月廿六日	十一月九日	四月九日
眞岡	五	十月三日	五月廿五日	十月廿九日	五月廿二日	十一月三日	四月九日
落合	五	九月廿六日	六月三日	十月廿五日	五月廿四日	十一月三日	五月五日
敷香	七	九月廿日	五月廿日	十月廿六日	五月廿三日	十一月廿五日	四月廿五日
豐原	七	九月廿六日	六月三日	十月廿五日	五月廿三日	十一月廿五日	四月廿五日

結霜ハ、九月中旬内部ニ始マリ、下旬ニ至リテ全土ニ擴カリ、五月下旬ニ及ヘハ、沿海地ハ概ネ終ヲ告クレトモ、内部ハ特ニ晩ク、六月中旬ヨリ下旬ニ互ルコトアリ。故ニ内部ニ於テ、年中全ク霜ヲ見サルハ、僅ニ百日内外ニ過キサレトモ、沿海地ニ於テハ、其期間稍長ク、大泊ハ豊原ヨリ約三旬、眞岡ハ大泊ヨリ約二旬長シトス。

降雪ハ北部ニ早ク、概ネ十月中旬ニ現レトモ、三十九年ニハ敷香、内路附近ニ於テ十月一日既ニ十五糎(五寸)内外ノ積雪ヲ見タリ。サレト、斯ノ如キ早現ハ珍トス。南部ニ於テハ、豊原附近ノ高山ニハ同月初旬ニ於テ冠雪スルコトアレトモ、平地ノ初雪ハ概ネ十月下旬ニ在リ。終雪ハ各地トモ五月中下旬ノ交ニ在レトモ、四十一年ニハ南部一體六月三日ニ於テ降雪ヲ見タリ。斯ノ如キ晩雪ハ又稀ナル方ナリトス。而シテ各地トモ十一月下旬乃至十二月初旬ニハ、既ニ根雪トナリ、通常南西部ハ四月上旬、内部ハ五月上旬ニアラサレハ融雪セス。

降雪日數

地名	觀測年數	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
大泊	七	二三	二二	二三	一〇	三	〇				三	一八	二六	二六
眞岡	五	二六	三三	三三	九	三	〇				四	一九	二六	二六
落合	五	二二	一九	二二	一一	六	一				四	二〇	二七	二九
敷香	七	二二	二〇	一八	二三	六					五	一六	二四	二九

第九項 海霧

本島沿海ニ於ケル海霧ノ發生ハ、三月ヨリ十月ニ互ル。其ノ他ノ期間ニ於テモ、間々之ヲ認メサルニアラサルモ、甚タ稀ニシテ且淡薄ナリトス。其ノ最盛時ハ六月乃至八月ノ三ヶ月間ニ在リ。之カ發生ハ、疑モナク暖寒海流ノ交合ニ由リテ生スルカ故ニ、其ノ交流ノ最モ著シキ北中知床岬及西能登呂岬附近ハ殊ニ多ク、是等附近ヲ離ルレハ頓ニ減少スルモノ、如シ。海釣島及西能登呂岬ノ觀測ニ徴スレハ、夏季三ヶ月間ニ於ケル海霧總日數ハ五六十日ニ上リ、濃霧日數ノミヲ算スルモ、三四十日ニ及

ヘリ。本邦ニ於テ最モ多霧ナル根室及襟裳崎附近ニ比スレハ、約二十日内外少シト雖亦多キ方ナリ。大泊ハ之ニ比スレハ、其ノ半ニ過キス。敷香及真岡ハ亦大泊ヨリ少シ、其ノ濃淡頻度ハ海流ノ消長ニ關聯スルノミナラス、風位ノ如何ニ由リ、其ノ所在ヲ異ニシ、流動斷續常ナラス。之ヲ以テ、夏季南風ノ日ハ、概ネ多少ノ海霧ヲ生スルモ、海陸ノ向背ニ依リテ著シキ差異アリ、即チ大泊ノ如キ濃密ナル海霧ノ襲來時ニハ南々西風吹ケトモ、敷香ハ南東風ニシテ、真岡ハ南西風ナリ。其ノ發生ノ時刻ハ大泊及敷香ニ於テハ午前ノモノ大部ヲ占メ午後ノモノハ甚タ稀ナレトモ、真岡ハ午前ノモノヨリ午後ノモノ寧ロ多シトス。其ノ連續時數ニ至リテハ、往々斷續四五十時間以上ニ互ルコトアリト雖、總シテ十時間以上ニ及フモノハ總回數ノ一二割ニ過キス。大抵ハ五時間以内ナリ。而シテ此等濃霧ノ發生ハ、主ニ高氣壓部ノ移動シ來レル時ニ在リ。低氣壓ノ通過ニ伴ヒテ發生スルモノハ、僅ニ總回數ノ二割ニ過キス。大泊敷香ニ於テハ、天氣晴朗ナルトキニ起ルモノ多ク降雨ヲ伴生スルモノ少ナキモ、真岡ニ於テハ降雨ヲ併發スルモノ多シ。每月ノ濃霧日數ヲ示セハ左ノ如シ。

濃霧日數

地名	月別觀測年數											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大泊	七	一	一	三	四	七	八	七	三	三	一	一
真岡	五	一	一	一	五	六	五	二	一	一	一	一
敷香	五	一	一	一	五	七	六	二	一	一	一	一
海豹島	七	一	一	一	五	九	二	四	一	一	一	一
西能登呂	三	一	一	一	二	一	一	三	一	一	一	一
合計	三	一	一	三	四	七	八	七	三	三	一	一

第十項 結氷及流水

本島ノ沿岸ハ、冬季ニ於テ概ネ結氷シ、春季ニ互リテ流水ヲ見サルコトナシ。而シテ是等海水ノ凍結ハ、河口附近ニ起リ、風潮ニ依リテ流動ス。其ノ初期ニ在リテ、向海風盛ナレハ、稍其ノ期遅ク、之ニ反スレハ早キカ如シ。其ノ最盛時ニ於テモ、一度暴風ノ襲來スルコトアレハ、忽ニシテ破摧セラレ、流水トナルカ故ニ、敢テ不動ナルニモアラス。其ノ凍結水溫ハ、概ネ氷點下一度八ナリ。既往ノ觀測ニ徴スレハ、海水ノ同度ニ降下スレハ、久春内沖及オホーツク海沿岸ニ在リテハ一月一日、亞庭灣内ハ一月十五日、中知床岬及西能登呂岬附近ハ二月一日トス。然レトモ、大泊棧橋沖ニ於テハ、概ネ十二月末ニ於テ、同一低度ヲ示シ、嚴寒期ニハ、灣内氷點下二度ニ下ルコトアリ、真岡沿岸ニ於テモ、一月初旬ニ於テ既ニ凍結點ニ達ス。其ノ氷結ノ最モ早キハ東海岸ニシテ、最モ晚キハ西海岸ナリ。而シテ東海岸ハ、概シテ廣區域ニ互リテ、其ノ期間亦長キモ、西海岸ハ之ニ反シテ、小區域ニ止マリ、其ノ期間亦短シ。而シテ亞庭灣ハ、兩者ノ中間ニ在リ、今其ノ期間ヲ概括スレハ左ノ如シ。

東海岸 敷香沿岸 十二月下旬乃至三月下旬
 同 富内沿岸 十二月下旬乃至四月下旬
 亞庭灣 大泊沿岸 一月中旬乃至三月中旬
 西海岸 久春内沿岸 一月上旬乃至三月中旬
 同 真岡沿岸 一月下旬乃至二月下旬

東海岸 敷香沿岸ニ於テハ、十二月ニ入りテ、早クモ軟水ノ漂泛スルヲ見ルハ、其ノ常ニシテ、下旬ニ至レハ、最早展望一面ニ互リテ水結シ、其ノ厚サ七八寸ニ及ヒ、一月ニ入りテハ愈々堅結シ、其厚サ二三尺トナル。サレト此ノ海岸ハ南面セルノミナラス開豁ニシテ風防ナク、殊ニ此ノ期ニ於テハ北風卓越スルカ故ニ、動モスレハ、流離シ易ク、沖合ニ漂泛スルコト珍シカラス。而カモ風風ケハ、又歸來聚着ス、其ノ期間ハ、通常八九十日内外ニシテ、東海岸ニ於テハ殊ニ短キ方ナリトス。然ルニ東白浦附近ヲ中心トシ間串以南、富内附近ニ至ル東面一帯ノ地ハ、山ヲ負フテ海ニ望ミ、自然ノ風衝ヲ有スルカ故ニ、堅結期ニ入レハ、最早膠着シテ容易ニ分離セス、流來スルモノハ、又之ニ附着シ、益々其ノ區域ヲ擴大シ、偶北東ノ暴風ニ接シテハ、一層壓迫セラレテ、疊々累積シ愈々堅固トナリ、一望瞭々タル大水原ト成リ、沖合二三里ニ互ルト云フ、之ヲ以テ、強烈ナル西風ヲ吹キ起スニアラサレハ、容易ニ流出セス、春暖ヲ迎ヘテ、潰裂ヲ促スコト亦遲々タルカ故ニ其期間モ甚々長シトス。

亞庭灣 其ノ北西ニ當ル鈴谷川河口附近貝塚沿岸ニ始マリ、早キハ十一月月上旬、晚キハ同月中旬ニ至レハ既ニ軟水ヲ結ヒ、十二月ニ入りテハ、往々水上ヲ歩行スルマテニ凝結スルコトアリ。ソレヨリ徐々ニ灣内一圓ニ擴カルモノトス。其ノ初期ニ於テハ、浮泛流動定マラサルモ、一月中旬ニ至レハ、大泊沿岸ハ一帯ニ堅水ヲ結ヒ、其ノ厚サ一二尺内外ニ達シ、二月ニ入りテ、灣内遠ク凍結スルコトアリ。此ノ期間ニ於テハ、概ネ沖合約五六百間マテハ、人馬自由ニ往來シ得ヘキモ、ソレ以上ノ沖合ハ、結水甚々薄ク、輕風尙能ク之ヲ開裂シ、其ノ盛時ニ在リテモ、一度東ノ暴風起ラムカ、沿岸ノ結水個々ニ分裂流失シテ、更ニ前日ノ觀ヲ止メス。サレト、再ヒ水結スルコト迅速ニシテ、忽ニシテ水塊流來シ、一日ナラスシテ復タ聚着スルコト舊態ノ如シ、其ノ結水期間ハ概ネ五六十日内外ニシテ展望一面全ク凍水スルハ二三十日内外ナリトス。

西海岸 久春内沿岸ニ於テハ、十二月中旬既ニ軟水ヲ結ヒ、一月ニ入りテハ膠着シ、沖合約二里ニ及ヒ、間々展望一面ニ互ル。然レトモ、屢分離流失スルコトアリ。其ノ結水期間凡ソ七八十日内外ナリ。真岡灣ニ於テハ、一二月ノ交ニ於テ、海岸ヨリ一二百間、六七寸内外ノ堅水ヲ結フコトアリト雖、多クハ淺瀬附近ニ於テ水結スルノミ。灣外著シキ結水ヲ見ス。

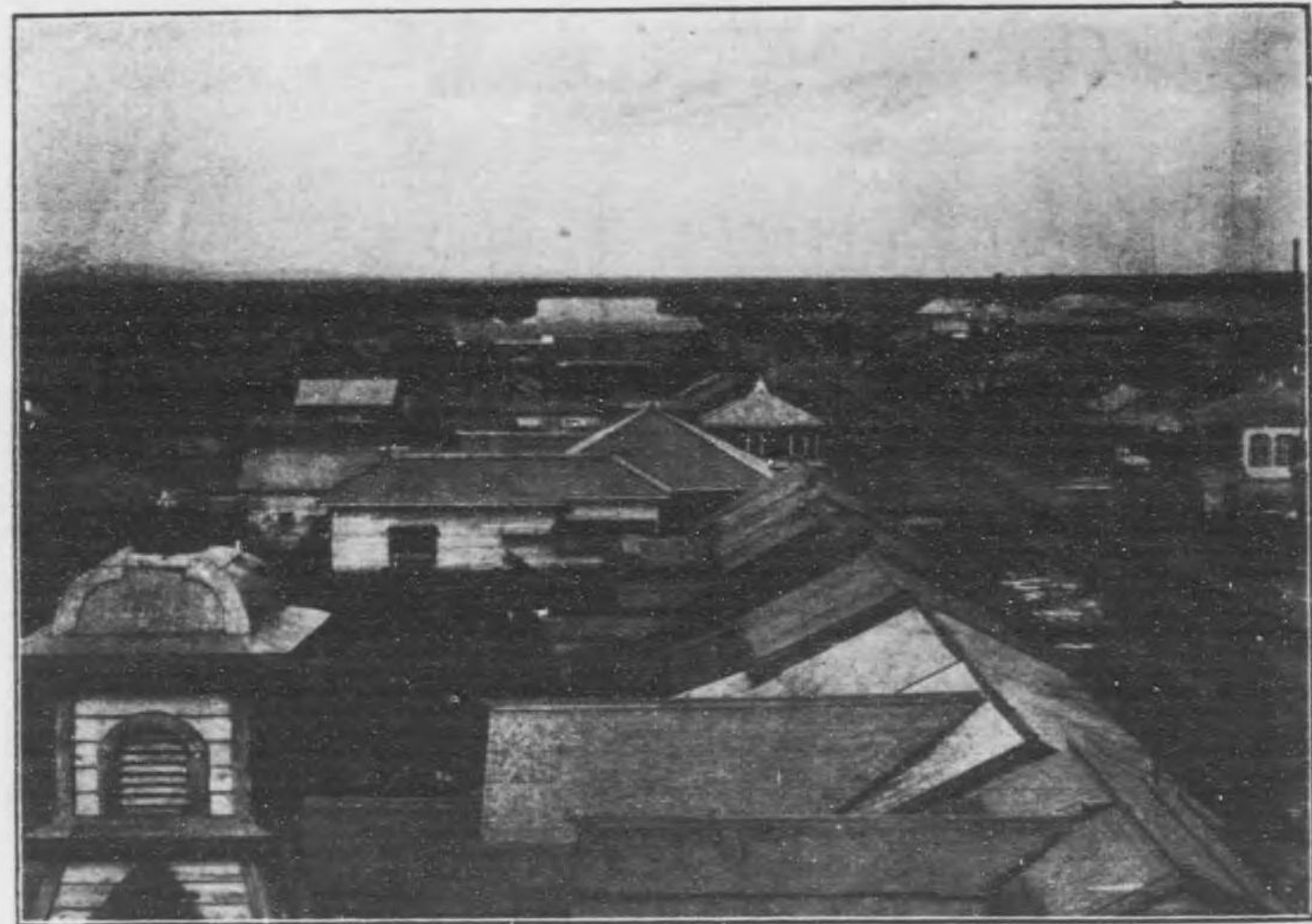
解水ハ結水ニ反シ、西海岸南部ニ最モ早ク、東海岸中部ニ最モ晚ク、通常ハ三月上旬乃至四月下旬ノ間ニ在リ。サレト、嘗テ四十二年ニハ、東海岸北部ニ於テモ、四月尙堅水結着シ流出セス、漸ク五

月上旬ニ至リテ、解氷ヲ見タルコトアリ。亞庭灣ニ於テハ、概ネ三月中旬乃至下旬ノ間ニ在レトモ、亦同年ニハ留多加流域ヨリ對馬崎連線ノ沿岸一體、結氷膠着シ、四月下旬ニ入リテ初メテ潰裂流失シタルコトアリ。蓋シ稀有ノコトニ屬ス。而カモ同年ニ於テハ、東海岸一帶ニハ五月中氷塊浮流シ、同月下旬ニハ、尙東白浦方面マテ封鎖シ、敷香沿岸ノ如キ、其ノ全ク流失シタルハ、六月上旬ナリキ。

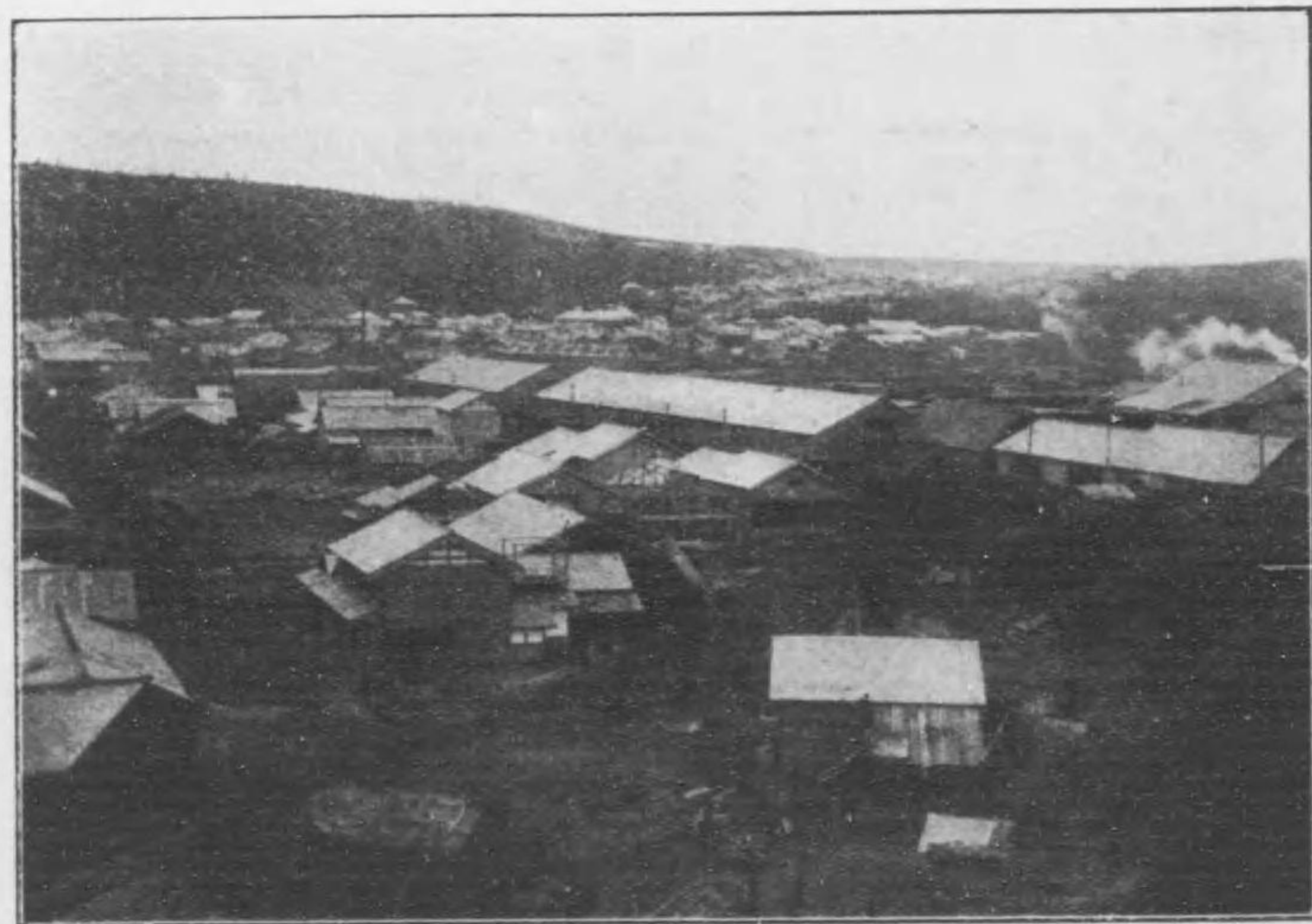
流水ハ、西海岸ニ於テハ、眞岡附近最モ著シク、其ノ期間ハ一月中旬乃至三月中旬ノ間ニ在リ。其ノ最大ナルモノハ、幅員二三里ニ互リテ、北ハ小能登呂岬ニ連リ、南ハ本斗ノ沖合ニ擴カリ、南北ニ流レ水面上ノ高サ、二三尺ニ及ヒタルモノアリ。此ノ方面ニ於ケル是等流水ハ概ネ北西風ニ乘シテ、襲來シ、沿岸ニ聚着スルモノニシテ、間々數日間停留シ、流出セサルコトアリト雖モ、通常ハ一兩日ニシテ、南東風ニ送ラレ退去スルモノトス。宗谷海峽ニ於テハ、概ネ一月中旬ヨリ三月中旬ノ間ニ在リ。海峽ノ西口ニ至レハ氷塊潰裂融解スルモノ、如シ。但シ西能登呂岬附近ノ海上ニ於テハ、間々四月上中旬ノ交ニ於テモ、風潮ニ依リ、流來スルコトナキニアラス。亞庭灣ニ於テハ、四月ニ入り、往々南風ニ誘ハレテ、流入スルコトアレトモ、著シキモノニアラス。東海岸ニ於テハ、五月中旬尙流水ヲ見ルコトアルノミナラス、海豹島ニ於テハ、六月中ニ於テ、往々廣大ナル流水ノ同島ヲ包圍スルヲ見ルコトアリ。

要スルニ、西海岸ニ在リテハ、眞岡沿岸マテハ結氷著シカラス。流水ハ間々廣大ナルモノアリト雖、

沿岸ニ聚來スルモノ多カラス。故ニ冬季ニ在リテモ、航海ヲ繼續スルコト難シトナサス、然レトモ、東海岸ニ於テハ、五月尙流水ニ閉塞セラル、ヲ以テ航海ノ困難モ亦免レサル所ナリ。其ノ亞庭灣ニ於テ、四月ニ入りテハ最早危險ナルモノヲ見サルハ、既ニ前ニ述フルカ如シ。



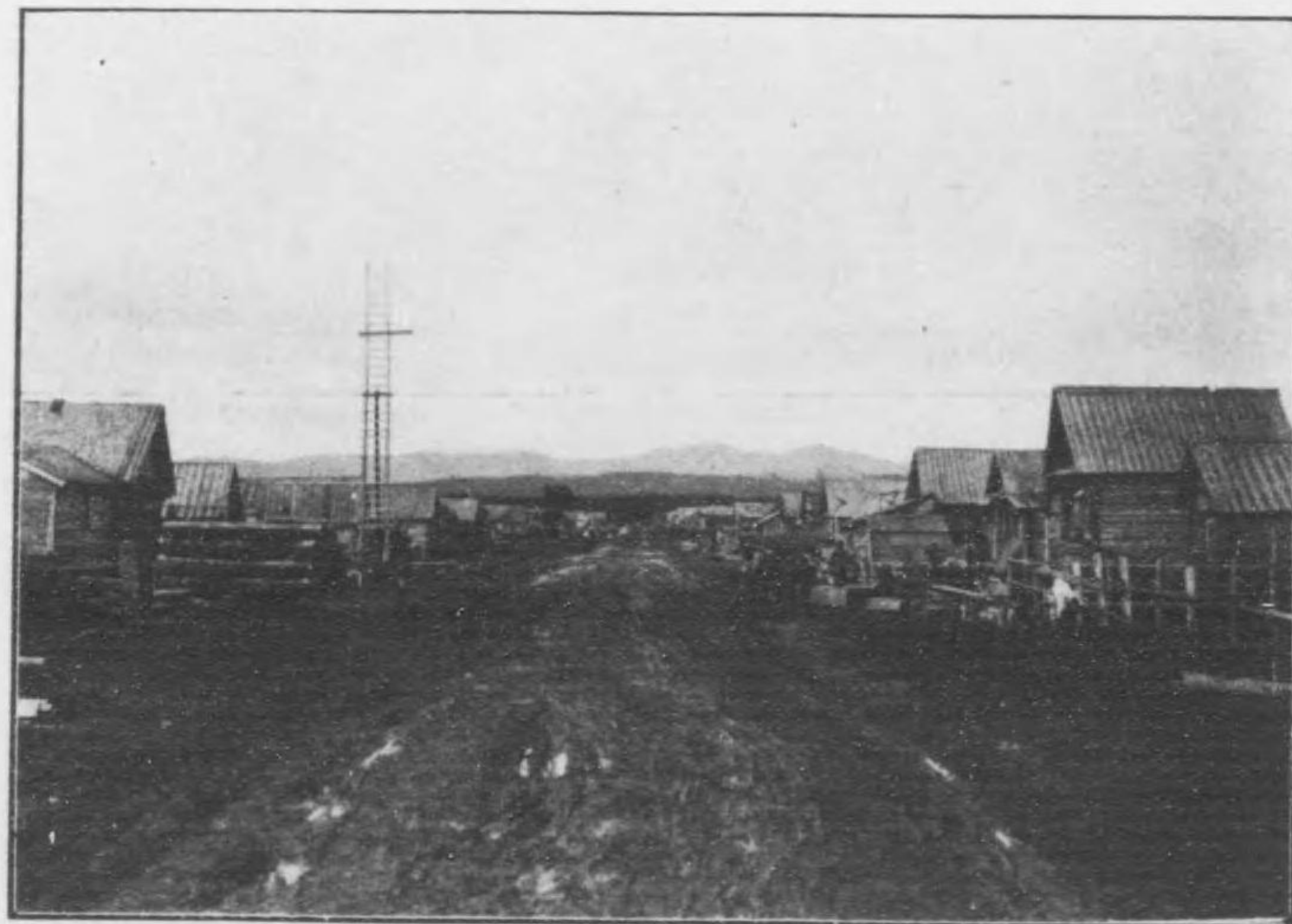
豊原市街



大泊市街



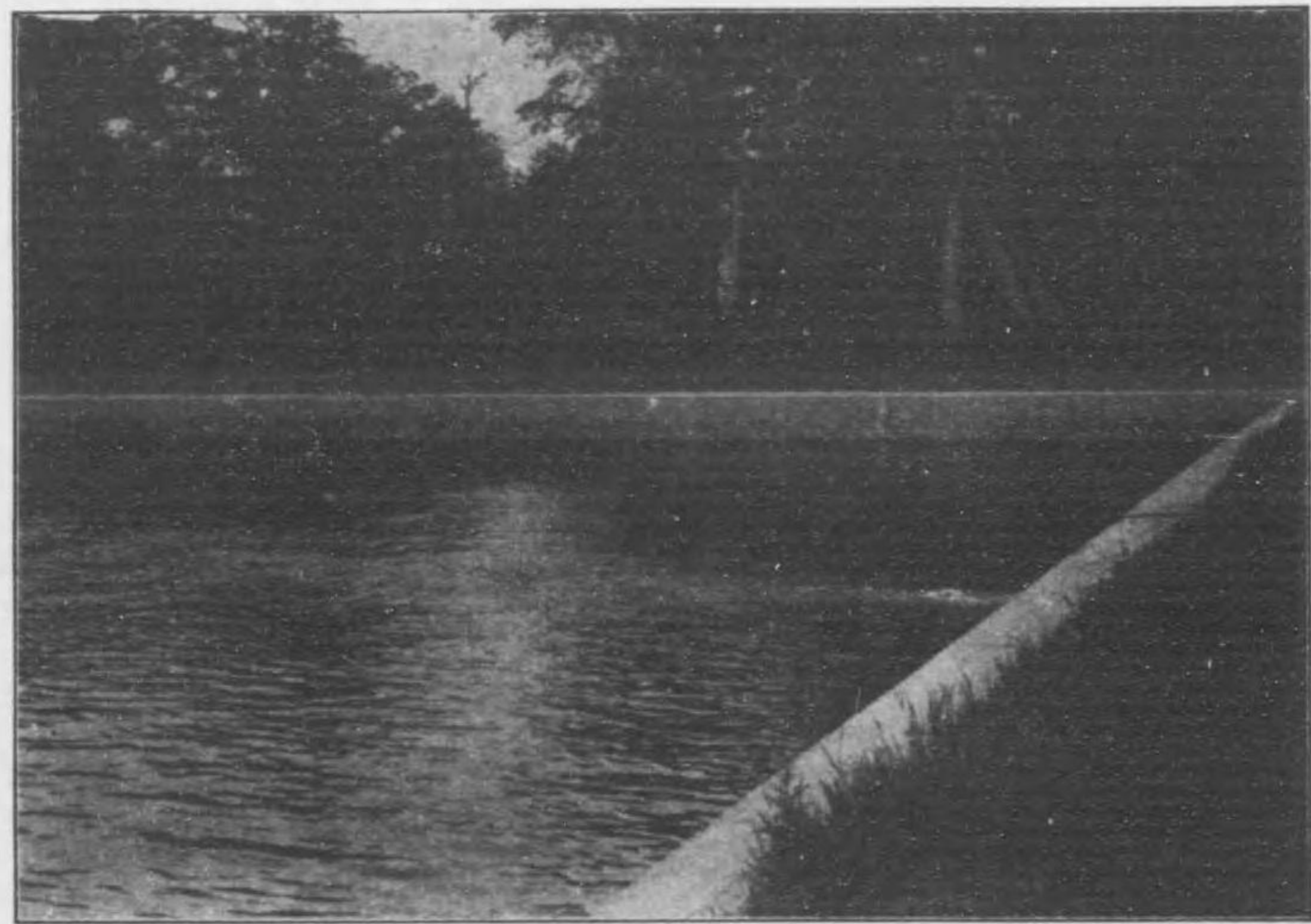
真 岡 市 街



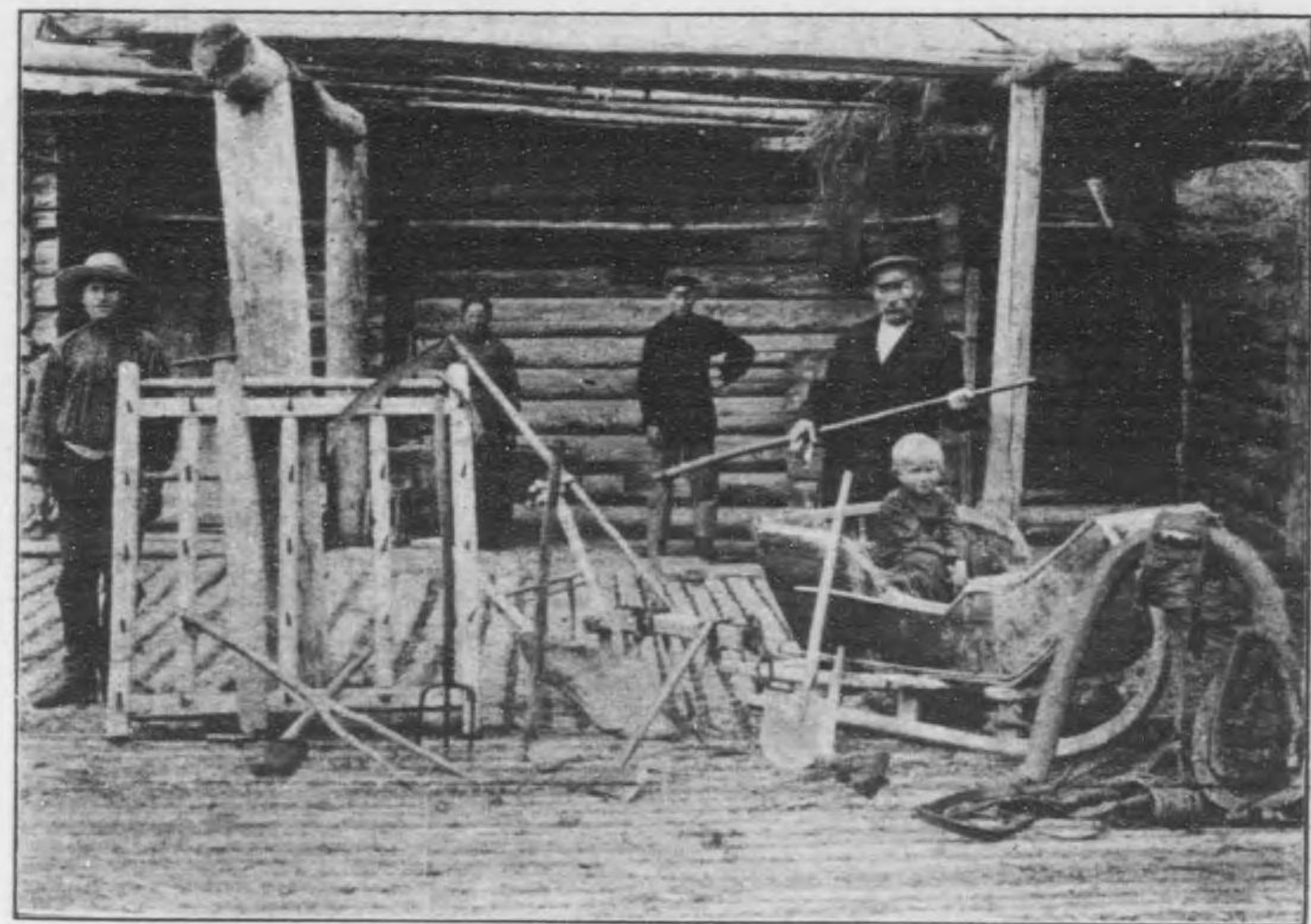
農 村 部 落



樺太廳醫院(豐原)



豐原水道貯水池



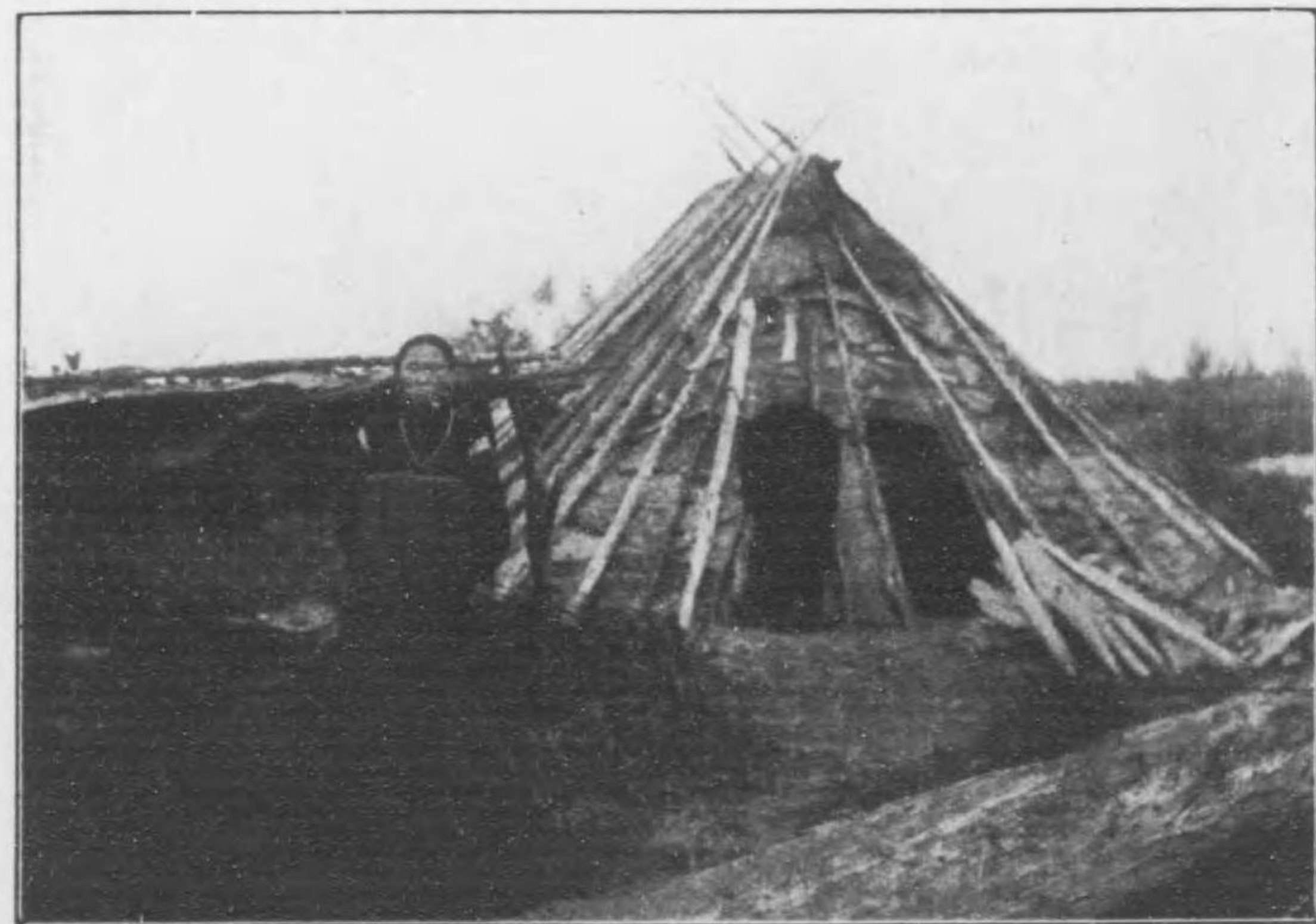
(一其) 庭 家 ノ 人 露 留 殘



(二其) 上 同



俗風ノ人クーヤリギ



俗風ノ人コツロオ

第二章 戸口及衛生

第一節 總說

本島ノ住民ハ其ノ數未タ多カラサルモ、大正元年末現在ノ調査ニ依レハ、戸數九千八百七十一、其ノ人口四萬二千百三十八ニシテ之ヲ前年末現在調査ニ比スレハ、戸數ニ於テ千〇十一、人口ニ於テ五千四百十四ヲ増加セリ。是等住民中土人、露國ノ如キハ二千餘人ニ過キスシテ漸次減少スルモノ、如シ。是等ノ細說ニ至リテハ更ニ節ヲ分チテ叙述スヘキモ、今大正元年末ニ於ケル戸口ノ總計ヲ示セハ左表ノ如シ。

戸口

(大正元年十二月末日現在)

類別	戸數	人		口計
		男	女	
本邦人	九、三九七	二二、七二五	一七、二二一	三九、八四六
外人	五一	九八	四四	一四二
土人	四二三	一、〇八〇	一、〇七〇	二、一五〇
計	九、八七一	二三、九〇三	一八、二三五	四二、一三八

備考 本邦人ノ内ニハ朝鮮人ヲ含ム

第二章 戸口及衛生

第二節 本邦人

明治維新以前ニ於ケル邦領時代ニ在リテハ、本邦人ハ少數ノ勤番吏員ヲ除キ、他ハ多クハ出稼者ニシテ、夏季漁業其ノ他ノ爲一時渡來シ、冬季ニ至レハ歸國シ、永住スル者トシテハ極メテ尠カリシカ、維新後開拓使ヲ置カル、ヤ、著シク永住者ノ數ヲ増加シ、明治七年九月ノ調査ニ依レハ、一時ノ出稼者ヲ除キ、其ノ數四百五十八人ノ多キニ達セシカ、同八年樺太千島交換以前ニハ、諸種ノ事情ニ因リ、邦人ハ漸次退去シタリ、而シテ其ノ後露領時代ニ在リテハ、年々數千ノ漁業者、漁期ニノミ渡來スルニ過キスシテ、平常居留シタルハ、唯領事館員ト僅少ノ人トノミナリキ。然ルニ明治三十八年以降ニ至リテハ、諸種ノ目的ヲ以テ渡來スル者續出シ、嚴寒ヲ侵シテ越年スル者年々累加シテ、終ニ四萬二千餘人ノ多キニ迫ヘリ。即チ三十八年末ニハ戶數四百六、人口一千九百九十二過キサリシモ、大正元年末ニハ戶數實ニ九千三百八十一、人口三萬九千八百一十一ノ多キニ達シ、之ヲ三十八年末ニ比スレハ、戶數ニ於テ二十三倍強、人口ニ於テ二十倍強ヲ増加セリ。今大正元年末現在戶口ヲ各支廳管轄別ニ舉クレハ左表ノ如シ。

戶口 (支廳別)

(大正元年十二月末日現在)

支廳別	戶口		地		人計
	戶數	男	女	計	
豐原	二、二〇三	五、二八九	四、一八九	九、四七八	
大泊	二、五〇五	六、一六三	四、六九八	一〇、八六一	
眞岡	三、八六五	九、三一八	六、九五八	一六、二七六	
名好	二九九	七〇九	四九三	一、二〇二	
敷香	五〇九	一、二二二	七八二	一、九九四	
合計	九、三八一	二二、六九一	一七、一二〇	三九、八一	

備考 此ノ計數ノ外朝鮮人戶數十六、人口三十五アリ

然レトモ、本島ニ於ケル産業ト氣候トノ關係ハ、今尙、漁業季節ニ於ケル備ヒ漁夫、或ハ土木工事等ノ爲ニ一時渡來セル勞働者等ノ、雁往燕來ニ因テ、夏季ト冬季ニ於ケル住民ノ數ニ、差異ヲ生セシムルハ蔽フヘカラサル事實ナリ。即チ大正元年六月末及同年十二月末ノ兩度ニ於ケル、調査ノ戶口數ヲ比較對照スルニ、戶數ニ在リテハ敢テ大差ナキカ如シト雖、人口ニ在リテハ六月末調査ノ數五萬九千七百六十六人ニ對シ、十二月末調査ノ數ハ三萬九千八百一十一人ノ少數ニシテ、前者ノ三分ノ一強ノ減少ヲ示セリ。然レトモ斯ノ如キ事實ハ、漸次移住民ノ土着心鞏固トナルニ從ヒ、漸ク減少スルノ傾向アルハ喜フヘキ現象ナリトス。又是等移住者ノ數ヲ男女別ニ依テ比較スルニ、三十八年末ニ在リテ

ハ、千六百三十三人ノ男子ニ對シ、女子ハ三百五十七人、即チ其ノ五分ノ一餘ニ過キサリシカ、逐年其ノ數ヲ遞増シ、大正元年末ニ於テハ實ニ其ノ四分ノ三餘ニ達セリ、今其ノ年別ニ依リテ、之カ比較ヲ表示スレハ左表ノ如シ。

累年人口 (八ヶ年)

年次	男	女	計
明治三十八年末	一、六三三	三五七	一、九九〇
同三十九年末	七、一七五	三、六三一	一〇、八〇六
同四十年末	一一、一六三	七、一一八	一八、二八一
同四十一年末	一三、六九二	一〇、四一五	二四、一〇七
同四十二年末	一三、四九八	一〇、三九九	二三、八九七
同四十三年末	一六、四四六	一二、二四二	二八、六八八
同四十四年末	一九、五二二	一四、八九四	三四、四一六
大正元年末	二二、六九一	一七、二二〇	三九、八一

本島移住民ノ職業別ニ就テハ、夏冬兩季ニ於ケル變動甚シキヲ以テ、之ヲ詳説シ難シト雖、一年ヲ通シテ其ノ大體ヲ觀察スレハ、數ノ上ニ於テ労働者階級ヲ主トシ、漁業、商業、農業等順次之ニ亞キ、又其ノ地方別ニ由リテ之ヲ觀レハ豊原支應管内ニ在テハ農業、大泊支應管内ニ於テハ商業、真岡支應

管内ニ在リテハ漁業ニ從事スル者、最モ多シトス。

本島住民ハ、全国各地ヨリ移住シ來レルモノナルモ、就中北海道ヲ始メ東北諸縣ヲ以テ最モ多シトシ、日本沿岸ノ府縣之ニ亞ク、左ニ本島住民ノ府縣別統計ヲ掲ク。

現住戸府縣別調査

(大正元年十二月末日現在)

支應	本縣					府縣				
	豊原	大泊	真岡	名好	敷香	豊原	大泊	真岡	名好	敷香
東京	四	三	三	三	二	四	五	一	一	三
京都	三	一	六	一	二	三	二	一	一	四
大阪	二	四	四	一	一	三	八	一	一	一
神奈川	九	九	一	一	二	二〇	三	一	一	一
兵庫	二	二	一	一	一	七	三	一	一	一
長崎	二	一	二	一	一	九	三	一	一	一
新潟	二	一	二	一	一	七	二	一	一	一
群馬	二	一〇	一	一	一	三	二	一	一	一
埼玉	二	一	二	一	一	四	一	一	一	一
千葉	八	五	七	一	一	二	一	一	一	一
茨城	三	五	九	一	一	六	八	一	一	一
栃木	三	三	二	一	一	六	二	一	一	一
奈良	三	九	二	一	一	九	三	一	一	一
和歌山	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
徳島	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
香川	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
高松	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
愛媛	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
高知	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
三重	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
秋田	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
山形	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
青森	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
岩手	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
福島	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
宮城	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
長野	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
岐阜	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
滋賀	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
山梨	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
静岡	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
愛知	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
三重	三	九	二	一	一	三	二	一	一	一
合計	一九九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九

愛媛	香川	徳島	和歌山	山口	廣島	岡山	島根	鳥取	富山	石川	福井																	
五	七	五	四	三	〇	三	〇	九	五	五	五																	
五	九	二	三	七	四	五	五	六	六	二	三																	
二	七	〇	五	六	三	三	四	八	三	一	七																	
一	一	一	一	一	一	一	二	二	五	八	四																	
一	一	一	二	一	五	一	五	一	六	三	二																	
三	三	七	四	七	五	三	四	六	九	三	四																	
現	前	年	同	期	在	合	計	北	海	道	沖	繩	鹿	兒	島	宮	崎	熊	本	佐	賀	大	分	福	岡	高	知	
一、九七	二、三〇〇	三、五〇四	二、七	二、九	三、九	八、三	一、〇九二	一、六六三	一、三	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二、二〇三	二、五〇五	三、八六五	二、九	二、九	三、九	八、三	一、〇九二	一、六六三	一、三	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二、七	二、九	三、九	二、九	二、九	三、九	八、三	一、〇九二	一、六六三	一、三	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三、九	四、三	五、七	三、九	三、九	四、三	一〇〇	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九	四、三	五、七	三、九
八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七	九、三	一〇、七	八、三七	八、三七

第三節 外國人

外國人ニシテ現ニ在住スル者ハ、露國人及支那人ナリ、其ノ大正元年末ニ於ケル戸數五十一、人口百四十二ナリ。

露國人ハ豊原支應管内ニ最多クシテ、支那人ハ眞岡支應管内ニ多シ。三十八年本島占領以前ニ於テハ、概ネ今ノ邦領ニ相當セルコルサコフ(大泊)郡ニ在住セシ露國人ハ、人口一萬ヲ下ラサリシカ、

占領中之ヲ露領ニ送還シ、或ハ平和克復後、其ノ希望ニ依リ、任意歸還セシメタルヲ以テ、其ノ數著シク減少シタリ、而シテ現住者ト雖、多クハ其ノ所有財産ノ處分結了セサルカ、又ハ歸國ノ資ナキ等ノ爲、已ムヲ得ス、一時殘留スルニ過キスシテ、永住ノ希望ヲ有スル者ハ殆ト之ナク、漸次歸還スルノ有様ナルヲ以テ、三十九年末現在ニ比シ其ノ戸數實ニ五十一、人口百十六ヲ減スルニ至レリ。斯ノ如キ状態ナルヲ以テ現住者中ニハ、稀ニ相當ノ資産ヲ有スル者ナキニアラサルモ、概シテ無資産ノ者多シ。又彼等ハ孰レモ流刑ノ農民若ハ其ノ家族ナルヲ以テ、性質素ヨリ善良ナラサルモ、今日ニ在リテハ敢テ粗暴ノ行動ヲ爲ス者ナク、本邦人トノ交際亦圓滑ナリ。而シテ其ノ生活状態ハ、村落ニ在ル者ハ或ハ依然トシテ疎放ナル農牧ヲ營ム者アリ、或ハ狩獵、運送等ノ業ニ従事スル者モアリ。市街地ニ在ル者ハ、食麵麩ヲ製造販賣シ、或ハ運送其ノ他ノ勞働ニ従事スル者アリテ、一樣ナラサルモ、一般ニ其ノ生計ノ程度卑シ。

支那人ハ大抵十數年前漁業備役ノ目的ヲ以テ、浦鹽斯德ヲ經テ、西海岸地方ニ來住セシモノニシテ、概ネ無教育、無資産ノ徒、幾ント獨立ノ業務ヲ營ム者ナク、多クハ他ニ雇備セラレテ勞役ニ従事スル者ノミナリ。

第四節 土人

本島ニ在住スル土人ノ種類ハ、「アイヌ」、「ギリヤーク」、「オロツコ」、「サンダー」、「キールン」及「ヨツコ」ノ六種ニ區分セラル、モ、「サンダー」及「キールン」ハ其ノ數極メテ少ク、其ノ生活状態ヲ調査スルコト困難ナリ。殊ニ「ヨツコ」ノ如キハ近年其ノ隻影ヲ認メ得サルニ至レリ。而シテ土人ハ通シテ生存競争ノ結果、漸次減少ノ傾向アルハ免ルヘカラス、大正元年末現在戸數ハ計四百二十九、人口計二千五百五十人ニシテ、其ノ在住支應別及男女別ヲ舉クレハ左ノ如シ。

支廳	アイヌ		ギリヤーク		オロツコ		サンダー		キールン		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
豊原	一六六	一九二							一六六	一九二	三五八
大泊	五〇	四五							五〇	四五	九五
眞岡	四四	四七							四四	四七	八六一
敷香	八八	九三							八八	九三	一八一
名好	六六	五三							六六	五三	一一九
合計	八二四	八〇〇	一六四	七二	六五	一三七	一九二	二〇五	三九七	二	二,〇八〇
											一,〇七〇
											一一一五〇

「アイヌ」人ノ大半ハ、樺太千島交換條約以後ニ在リテモ、尙留マリテ露國ノ統御ニ服シタレトモ、其ノ際北海道ニ移住シタルモノニシテ、本島復歸後、再ヒ渡島セルモノモ亦尠カラス。其ノ居住地方ハ、東海岸、西海岸、中央内淵川支流沿岸等ニシテ、就中其ノ多數ナルハ、西海岸ニ在リテハ多蘭泊、知

來、唐佛、糸子舞、小茂白、東海岸ニ在リテハ、富内、内路、小田寒、東白浦、中央部ニ在リテハ大谷等ナリトス。是等ノ部落ハ概ネ河川ノ沿岸ニ散在シ、家屋ハ稀ニ露國式丸太造ノモノアレトモ、多クハ皆所謂「アイヌ」式ノ矮屋ニシテ、狹隘不潔ナリ、又「アイヌ」ハ文字ナク曆日ナク夏季ハ河畔ニ在テ蛙、鱒ヲ漁シ、冬季ハ山野ヲ跋涉シテ獸獵ヲ爲セリ。偶多少ノ教育ヲ受ケ、日常必要ナル日本語、露西亞語ニ通シ、資産ヲ有スルモノナキニアラサルモ、概シテ智慮淺薄ニシテ、生活ノ程度モ亦甚タ低シ。

「ギリヤーク」人 獨リ本島ニ居住セルノミナラス、黒龍江下流々域及ヒオホーツク海沿岸ノ大陸ニモ亦散在セリ。現今我カ領内ニ於ケル彼等ノ部落ハ東海岸幌内川沿岸、及ヒ西海岸惠須取川沿岸、西棚丹ナリト雖、彼等ノ生業ハ、温暖ノ季節ニハ河畔ニ出テ、漁シ、寒冷ノ季節ニハ山間ニ入りテ獸獵ニ従事ス。而シテ彼等ハ性質遲鈍ニシテ教育ナク、衣食住ノ程度ハ「アイヌ」人ニ比シ更ニ劣等ナリ、唯彼等ハ巧ミニ馴鹿櫓ヲ使用シ勞働ニ堪ユ、露領時代ニ在リテハ彼等ヲシテ冬季郵便物ヲ遞送セシメタリト云フ。

「オロツコ」人 亦本島ノミナラス、露領沿海州ニモ居住セリ。現住地方ハ東海岸幌内川沿岸地方ニシテ、殆ト「ギリヤーク」人ト同一方面ナリ、彼等ハ馴鹿ノ牧養ヲ職トシ、一戸百頭以上ヲ所有スル者アリ、四時之ヲ放牧シ、其ノ行ク所ニ從テ轉々居ヲ移シ、或ハ櫓ヲ輓カシメ、或ハ貨物ヲ運搬セ

シム。又彼等ノ生業ハ「ギリヤーク」人ト同シ、而シテ彼等ハ野生ノ馴鹿ノ肉ヲ食用トシ、毛皮ヲ以テ衣服、靴等ニ調用ス。其生活状態ニ至テハ亦「ギリヤーク」人ト略ホ相似タリ。

「サンダー」、「キールン」人等ハ國境附近ニ在住シ、其ノ生活状態ハ前二種ト大差ナシ。

第五節 市街及部落

三十八年以來、市街地トシテ區劃ヲ測設セシハ、豊原、大泊、真岡、野田寒、泊居、久春内、北名好、敷香ノ八箇所ニシテ、漁村及農村部落トシテ東西海岸及内部ニ於テ、二百十八箇所ナリ、市街地中、最モ急速ノ發達ヲ爲セシハ豊原、大泊、真岡ノ三ニシテ、泊居、野田寒之ニ次キ、久春内、榮濱、敷香ハ未タ部落ノ域ヲ脱セスト雖、久春内、敷香ハ支部ノ所在地ニシテ漸次年ヲ逐フテ元泊、本斗、長濱ノ如ク市街ノ形ヲナスニ至ラントス、左ニ主ナル市街ノ戸口表ヲ擧ク。

市街地名	戸數	人口		計
		男	女	
大泊	一、四七六	三、三六六	二、八四六	六、二一二
豊原	一、一一六	二、五三二	二、〇九四	四、六二六
真岡	九六五	二、三四六	一、六二八	三、九七四
泊居	六六四	一、五一一	一、二一五	二、七二六

市街地名	戸數	人口		計
		男	女	
野田寒	五〇四	一、二八〇	一、〇二八	二、三〇八
久春内	四〇二	八九一	六七〇	一、五六一
長濱	一九九	四六六	三八一	八四七
榮濱	二〇〇	五三五	三八八	九二三
敷香	一四六	三七九	二五四	六三三
元泊	一六七	三七四	二九七	六七一
本斗	六二六	一、四二一	一、一三〇	二、五五一

豊原市街ハ、元ウラジミロフカト稱シ、露領時代ニ於テハ、殖民監督官ノ駐在地ナリシモ、其ノ戸數一百ニ滿タサリキ。三十九年始メテ市街ノ區劃ヲ測設シテ以來漸次發達ノ運ヲ遂フニ至レリ、地ハ大泊市街ノ北方約十里、鈴谷原野ノ中央ニ位シ、附近ハ本島中、最モ廣大ナル殖民地ニシテ、既ニ多クノ農民移住開墾ニ從事ス。東海岸榮濱ニ通スル鐵道及道路ト、西海岸真岡ニ通スル道路トハ、此地ヨリ分岐シ、自ラ形勝ノ位置ヲ占ム、大正元年末戸數一千百十六戸、人口四千六百七十五人ニシテ、樺太廳、同豊原支廳、樺太地方裁判所、豊原區裁判所、樺太廳醫院、豊原郵便局、鐵道事務所、札幌監獄樺太分監等アリ。

大泊市街ハ元コルサコフ(楠溪町)トボロアントマリ(榮町)トノ總稱ニシテ露領時代ニハコルサコフ郡廳、監獄等アリテ、南部樺太ノ首府ナリキ。港灣ハ遠淺ナルモ、亞庭灣内ニ於ケル好錨地ニシテ、

内外船舶ノ出入多シ。又内部ニ至ル鐵道道路ノ基點ニシテ、物資ノ吞吐口ナリ。

五六

三十八年本島領有以來、數多ノ官廳ヲ置キ、急速ノ發達ヲ爲セシカ、四十一年樺太廳、其ノ他ノ豊原移轉以來、住民稍減少シタリト雖、尙四十三年末戸數千十三、人口四千三ヲ有シ、樺太廳大泊支廳、廳醫院大泊分院、樺太廳測候所、大泊郵便局、函館稅關大泊支署等アリ。

眞岡市街ハ西海岸ノ要地ニシテ、附近漁場多ク、漁業期節ニハ、頗ル繁盛ヲ極ム。殊ニ當港ハ冬期ニテモ、船舶ノ出入安全ナルカ故ニ、本島内地間ノ連絡港トシテ、最モ主要ノ位置ニ在リ。大正元年末戸數九百六十五、人口三千九百七十四ニシテ樺太廳眞岡支廳、廳醫院眞岡分院、測候所支所、眞岡郵便局、眞岡區裁判所等アリ。

全管内ニ於ケル、部落ノ配置ヲ概述スレハ、豊原支廳管内ニアリテハ、鈴谷、内淵兩川流域ノ殖民地アルヲ以テ、此等ノ地ハ既ニ二三里ヲ隔テ數十戸ツ、ノ農村部落アリ、就中大ナルモノハ、並川、追分、軍川、小沼、大谷等トシ、東海岸ニ在リテハ、元泊、榮濱、東白浦ノ三箇所ハ部落ヲ爲シ、元泊及榮濱ハ支廳出張所ノ所在地タリ、榮濱ハ拓殖鐵道ノ一端ニ位スルヲ以テ其ノ鐵道ノ貫通ニ伴ヒ漸次發達ニ向フヘシ。

大泊支廳管内ニアリテハ、留多加川流域及亞庭灣内數箇所ニ、農村部落アルノ外、概ネ漁場及漁村部落ノミニシテ、殊ニ大泊附近ノ部落ハ、戸數多ク、留多加、長濱、富内ニハ支廳出張所アリ。

眞岡支廳管内ハ、本島中、最モ漁村部落密接シ、又大漁場多キモ、近年南名好、内幌、本斗附近、眞岡附近、野田寒附近ハ農耕地トシテ、有望ナルヲ認メラレ、漸次農村部落、増加ノ傾向アリ。部落中稍大ナルモノハ、吐鯤保、本斗、阿幸、手井、富内岸、蘭泊、野田寒、唐佛、追手、名寄、萌菱等ニシテ、本斗及野田寒ニハ支廳出張所アリ。

敷香支廳管内ニ在リテハ、鮭、鱒漁場及鯉其ノ他ノ雜漁者少カラス、而シテ定住者ノ數亦年々ニ増加ヲ見ル、現今稍部落ヲ形成セルハ、散江ニシテ支廳出張所アリ。

久春内支廳管内ニ在リテハ部落中大ナルモノハ泊居ヲ主トシ北名好、鶴城等之ニ亞キ、泊居及鶴城ニハ支廳出張所アリ。

第六節 衛生

第一項 總說

本島ニ於ケル衛生上ノ施設ハ、今尙不完全ナルヲ免レスト雖、幸ニ一般ノ衛生狀態ハ、頗ル佳良ニシテ、一ノ風土病ナク、傳染病ノ如キ、三十八年以來毎年少數ノ腸窒扶斯、實扶埤里亞ノ發生アルノミナリシカ、大正元年ニ入りテ猩紅熱ノ少數一地方ニ發生スルヲ見タルモ須臾ニシテ全滅セリ、赤痢ハ四十年豊原附近ニ發生シ、一時蔓延ノ狀アリシカ、豫防、其ノ功ヲ奏シ、廣ク病毒ヲ蔓延セシムル

ニ至ラスシテ、之ヲ撲滅スルコトヲ得タリ。天然痘ハ、四十二年東海岸國境附近ニ、發生セシコトアリシモ、患者ハ未種痘ノ土人ニシテ、且ツ罹病者僅ニ二名ニ止マレリ、今四十年以後ニ於ケル島内傳染病患者數ヲ擧クレハ左表ノ如シ。

法定傳染病

(六ヶ年)

各支廳管内別

年別	明治十四年			同十四一年			同十四二年			計
	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞	
豐原支廳管内	四二	四	一	一	一	一	一	一	一	四二
大泊支廳管内	三六	一	一	一	一	一	一	一	一	三六
眞岡支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
名好支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數香支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	四二	四	一	一	一	一	一	一	一	四二

年別	同十四三年			同十四四年			大正元年		
	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞	赤痢	腸窒扶斯	實扶埤里亞
豐原支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一
大泊支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一
眞岡支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一
名好支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數香支廳管内	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一

住民ノ家屋ハ部落ニ在リテハ曾テ露人ノ手ニ成リシ丸太造ヲ襲用スル者多ケレトモ市街地ニ在リテハ、概ネ内地ト同様ナリ。就中其ノ構造設備等頗ル不完全ナルモノナキニアラサルモ、幸ニ酷寒ノ季ト雖、之カ爲、疾病ニ罹リタルモノナク、唯日常不攝生ナル、漁夫農夫等ノ間ニ於テ脚氣病患者ヲ出シタル事アルモ其ノ數多カラス、之ヲ要スルニ一般ノ衛生状態ハ頗ル佳良ナリト謂フヘシ。娼妓ノ健康診断ハ内地ト異ルコトナシ。藝妓、酌婦等ニ對シテハ、軍政時代以來、毎月三回健康診

六〇
斷ヲ施行スルコト、シ、支廳長指定醫師ノ健康診斷書ヲ提出セシメ、以テ花柳病ノ傳播ヲ豫防セリ、
之カ爲、今日ニ至ルマテハ甚シキ病毒ノ傳播ヲ認ムルニ至ラス。

保健及醫務ニ關スル法令ニ就テハ、四十三年以來、種痘法、傳染病豫防法、明治三十三年法律第十
五號、及藥品營業并藥品取扱規則等ヲ施行シ、以テ公衆衛生ノ進歩ヲ圖レリ。

第二項 醫務機關

醫務機關ノ設備ニ就テハ三十八年民政署ニ於テ、南部病院ヲ大泊ニ、眞岡病院ヲ眞岡ニ、豊原診療
院ヲ豊原ニ設置シ、以テ一般患者ノ診療ニ應ジ、併セテ藝妓、娼妓、酌婦ニ對スル健康診斷ヲ施行セ
シメタリシカ、四十年四月、樺太廳醫院官制ノ施行ニ依リ、南部病院ヲ樺太廳醫院ト改メ、眞岡病院、
豊原診療院ヲ其ノ分院トシタリ。然ルニ眞岡ニテハ、開業醫師充實シタルヲ以テ、同年九月、同分院
ヲ廢止セリ。四十一年八月、樺太廳ヲ豊原ニ移轉スルト同時ニ、豊原分院ヲ、樺太廳醫院トナシ、大
泊ニ在ルモノヲ其ノ分院トナシ、四十二年十一月ニ至リテ、再ヒ眞岡ニ醫院分院ヲ設置スルニ至レリ。

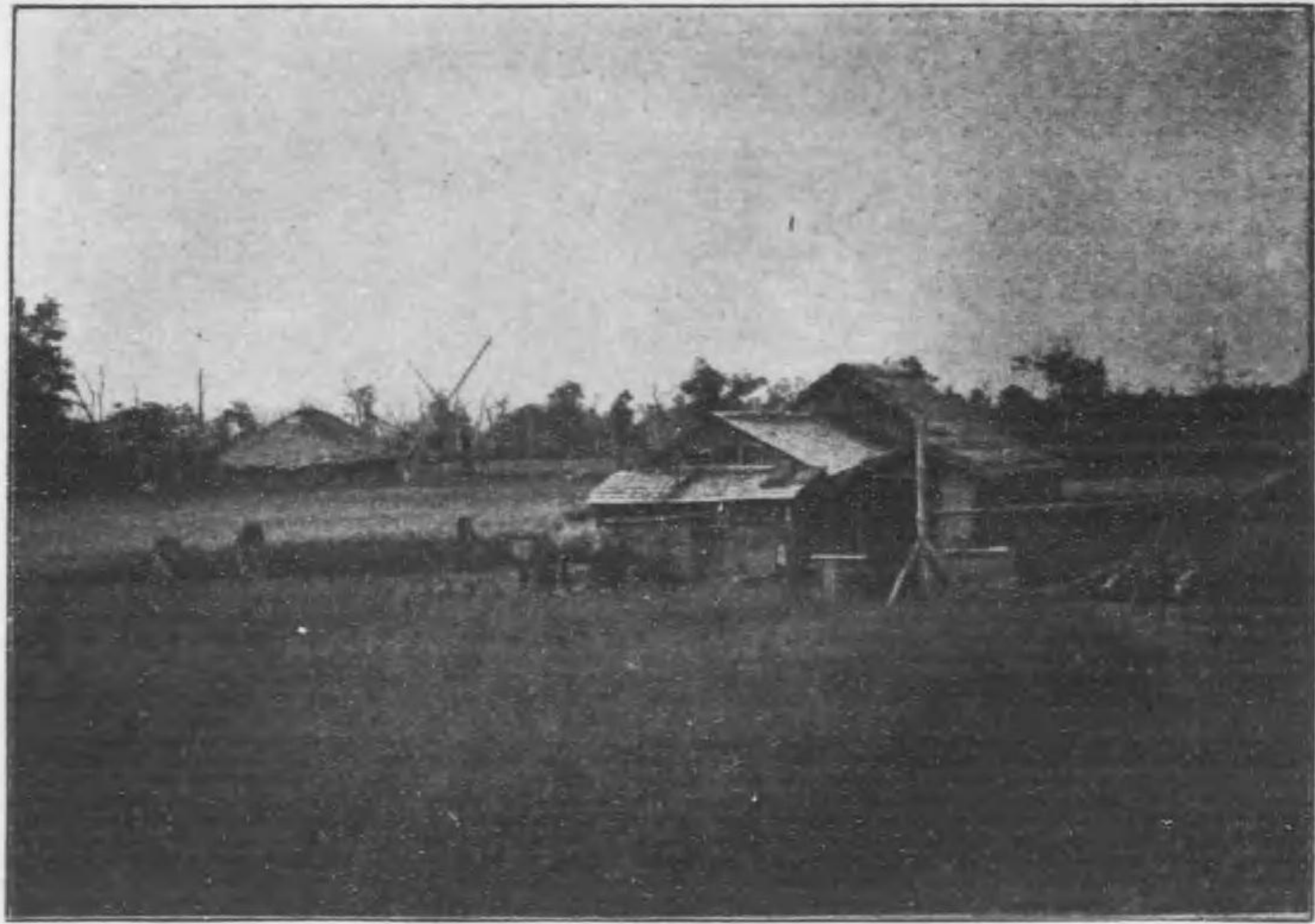
樺太廳醫院ハ醫長二名ヲ置キ其ノ一名ヲ以テ院長ノ職ニ補シ、奏任及判任ノ醫員十二名、藥劑師三
名其ノ他若干ノ書記、看護婦ヲ以テ組織ス。其ノ他島内樞要ノ地點ニ於テハ、四十年十月以來、敷香、
落合、留多加、久春内及名好等ニ囑託醫ヲ配置セシカ、四十一年六月、更ニ醫師補助規則及公醫規則
ヲ制定シ、大ニ衛生事業ノ完備ヲ圖レリ、即チ官ニ於テ指定シタル場所ニ開業シタル者ニハ、一定ノ

補助金ヲ與ヘ、之ヲ公醫ト稱シテ學校衛生、健康診斷、防疫及檢案救療其ノ他一般公衆ノ診療ニ從事
セシムルコト、ナレリ。目下公醫ヲ配置セル箇所ハ全島ヲ通シテ二十一箇所アリ、公醫ノ外開業醫師
十九名、限地開業醫師二十五名、齒科醫師五名、產婆十九名、鍼灸術營業十六名アリテ、島内各地ニ
開業セリ。尙四十五年四月看護婦并產婆養成所規程ヲ設ケ之ヲ樺太廳醫院内ニ設置シ、各其ノ修業年
限ヲ一ケ年ト定メ、之ヲ養成シ以テ其ノ普及ヲ圖レリ。

第三項 衛生上ノ施設

一、飲料水 豊原、大泊、眞岡ノ三市街地ニ於ケル飲料水ノ供給ニ就テハ、適宜井戸若ハ水道ヲ設ケ、
日常ノ給水ニハ不便ナシ、今之ヲ細說スレハ、豊原ハ四十年以來市街地ノ東南山林中ノ水源ヨリ水
道ヲ引設シ市街地内ニ水槽百三十箇所ヲ布設シテ、全部ニ給水セリ。眞岡ニ於テハ、四十二年七月、
市街ノ東方林地溪流ヨリ、水道ヲ設ケ、市街地ニ水槽二十五箇所ヲ布設シテ、全市ノ大半ニ供給ス
ルニ至レリ。大泊ハ概シテ堀井戸ヲ用ヒ、水質良好ナルモ唯榮町一圓ハ、土地濕潤ノ低地ニシテ井
水飲料ニ適セサル箇所多シ。北名好ハ四十四年九月、市街地南方山地ノ水源ヨリ、水道ヲ設ケタル
ヲ以テ、給水ノ便ヲ得タリ。敷香ハ、地表腐植質ノ堆積ニシテ、良水ニ乏シク、井水ハ之ヲ濾過シ
テ飲料ニ供セリ。

二、下水道 ハ市街道路ノ兩側ニ設ケ、土地使用者ヲシテ其ノ宅地内ニ、土管或ハ木樋ヲ埋メシメ汚



移住當初ノ農家



移住後數年ヲ經タル農家

水ヲ排出セシムル計畫ニシテ、各地何レモ改修、新設ノ途ニ在リ。

三、便所及汚物掃除 市街宅地ノ貸付ニ伴ヒ、新ニ建設スル家屋ニ對シテハ、便所ノ構造ハ一定ノ制限ニ依ラシメ市街地ニ在リテハ、各戸稍完全ナル設備ヲ見ルニ至レリ。

市街地ニ於ケル汚物掃除ニ就テハ、軍政時代以來引續キ汚物掃除規則ヲ布キ、土地使用者ヲシテ其ノ地域内ノ汚物ヲ除掃シ、清潔ヲ保持スルノ義務ヲ負ハシメ、又汚物掃除營業取締規則ヲ設ケ該營業者ヲシテ、一定ノ料金ヲ以テ汚物ノ掃除ヲ引請ケシムルコト、セリ。

四、墓地及埋火葬 墓地ハ、豊原、大泊、真岡ニ各一箇所ヲ指定シタリ、火葬場ハ豊原、大泊、真岡ニ各一箇所アリ、尙其ノ他ノ箇所ハ、地方ノ狀況ニ隨ヒ、所轄支廳ニ於テ、假ニ其ノ位置ヲ指定シ來レリ。最初居住民ノ多クハ火葬後遺骨ヲ郷里ニ送リタレト、漸次土着心ノ增高ト共ニ、本島ニ埋葬セントスル者漸ク多キヲ加ヘ來レリ。

五、屠獸場 ハ軍政時代ニ在リテハ官ニ於テ設置シタリシモ、四十年四月、屠獸場及屠獸營業取締規則ヲ設ケ之ヲ民營ニ移セリ、目下、豊原、大泊、真岡、留多加ニ各一箇所アリ。



鈴谷平原未墾ノ草生地



開墾地排水溝

第三章 殖民

第一節 總說

本島ニ於ケル殖民事業ハ、既ニ文化以降、多少ノ施設經營ナキニ非サリシモ、所謂殖民地トシテノ事蹟ニ至テハ、素ヨリ見ルニ足ルモノナカリキ。然レトモ明治維新後、北海道ニ開拓使ノ置カル、ヤ、又本島ノ開發ニ努メ、先ツ明治二年函館ヨリ人夫二百名ヲ移住セシメ、更ニ農工業ニ從事スル者、三百名ヲ募リテ、之ニ賄料及手當金ヲ給シ、專ラ土木開墾ノ事業ニ從事セシメシカ、同年九月、永住者ニハ三年間一日一人ニ付玄米五合、手當一ヶ月三分、衣服料一ヶ年金五兩ヲ支給スルコト、シ、同年十月更ニ畑地并ニ漁場共有地ヲ割渡シ、永住者ハ終身無稅、寄留出稼者ハ三ヶ年間無稅、四年目ヨリ收穫高ノ三分五厘ヲ納メシムルコト、ナシ、殊ニ開墾目的ノ移住民ニ對シテハ、一人ニ付三百坪ノ地ヲ下付シ、次年検査ノ際、耕作ヲ勵ムモノニハ、更ニ土地ヲ増給スル等、種々獎勵方法ヲ定メテ、其ノ實蹟ヲ擧ケンコトニ勗メタリシモ、功程抄取ラス、同七年迄ニ開墾セシ地積ハ、僅ニ二十一町步ニシテ、農作物ノ收穫モ亦意ノ如クナラサリキ。而モ開拓使カ本島ノ開發ニ苦心セルノ深キ、或ハ人馬繼立所ヲ設ケ、或ハ宗谷本島間ノ渡航船ヲ増加シ、或ハ道路ヲ開墾シ、漁場ヲ官營トナス等、直接ニ間接ニ、移住者ヲ保護獎勵シタリシコト尠カラサリシモ、移住者ノ多クハ或ハ風土ニ慣レスシテ病ニ罹リ、

或ハ死亡スル者多ク、露人トノ紛擾亦常ニ絶エザリシカ故ニ、殆ント永住スルモノナク、種々ノ口實ヲ設ケテ歸郷スルモノ多カリキ。茲ニ於テ、歸國者ニハ從來給與シタル米ノ返納ヲ命ジ、歸省者ニハ保證人ヲ立テシムル等、專ラ其ノ引止策ニカメタルモ、在住者ノ生計漸次困難ナルニ迫ヒ、到底土着定住セシムルノ見込ナキヲ以テ、遂ニ七年九月之ヲ北海道ニ送還スルニ至レリ。斯クノ如クニシテ、本島ニ於ケル移民ハ、八年ノ交換條約ヲ俟タスシテ、悉ク其ノ退去ヲ見ルニ至レリ。要スルニ開拓使時代ニ於ケル殖民事業ハ、其ノ保護獎勵方法ノ頗ル備レルニ拘ラス、遂ニ失敗ニ歸セシハ、移民ノ選擇ヲ誤リシト、交通不便ナリシニ因ルハ勿論ナリト雖、國際談判ノ荏苒決セスシテ、露人ノ勢力漸ク増加シ來リ、各移民其ノ業ニ安ニスルコト能ハザリシモノ實ニ其ノ一原因ヲ爲セルモノ、如シ。

明治八年條約ノ結果本島全部露領トナルヤ、露國ハ本島ヲ以テ、流刑囚徒ノ監獄場トナシ、罪囚ヲ此ノ地ニ收容シ、其ノ改悔セシモノヲ放免シ、開拓ニ從事セシムルノ政策ヲ執レリ。即チ毎年本國オデツサ港ヨリ、數百名ノ囚人ヲ送り、一年乃至三年ノ後、或制度ノ下ニ監獄外ノ居住、結婚等ヲ許シ、更ニ一定ノ時期ヲ經テ、地方官ノ證明ニヨリ、農商其ノ他ノ事業ニ從事スルコトヲ得セシメ、而カモ刑期滿了後六ケ年品行方正ナルトキハ、所轄長官ノ上申ニ據リテ、之レヲ農民ニ編入シ以テ一定ノ條件ヲ附シ、遂ニ自由民タルノ權利ヲ恢復セシムル方法ヲ設クル等種々獎勵法ヲ設ケテ、大ニ本島ノ開拓ニ盡瘁セリ。而カモ、彼等ハ素ヨリ刑餘ノ民ナルヲ以テ、着實持久ノ性ヲ缺キ、勤勉業務ニ從事シ

テ永住ノ計ヲ爲スモノナク、從テ開拓ノ事業進捗セス。且一旦刑期滿チテ本島以外ニ居住スルコトヲ得ルニ至レハ、西比利亞若ハ歐露ニ還ラント欲スル者比々殆ント然ラサルハナシ、サレハ十數年來會テ著シキ人口ノ増加ヲ見ス、其ノ産業モ些ノ發達ヲ加ルニ至ラスシテ終リス。

本島ノ再ヒ我領有ニ歸スルヤ、直ニ専門ノ學者技術者ニ委囑シテ、實地ヲ踏査セシメ、或ハ露領時代ノ經營方法ヲ調査シ、或ハ北海道ニ於ケル事蹟等ニ鑑ミ、遂ニ自作小農者ヲシテ、有畜組織ニ依リ農業ヲ經營セシムルノ最モ適當ナルコトヲ認メ、諸種ノ法規モ亦此ノ方針ヲ以テ制定シ、且特ニ土地處分ノ規程ヲ定メ、更ニ保護獎勵ヲ設ケテ、三十九年以來農民ノ移住ヲ獎勵シタリ。

爾來歲ヲ閱スルコト數年、事業着々進捗ニ向フト雖、由來殖民ノ事業ハ一朝一夕ニシテ其ノ功ヲ收ムヘキニアラス、殊ニ本島ハ氣候沍寒交通亦不便ニシテ殖民上不利ナル點多キヲ以テ、其ノ成功ヲ期スルニ時日ヲ要スルハ誠ニ止ムヲ得サル所ナリ。

然レトモ、近時諸般ノ施設漸ク整頓スルニ至リ、移民ハ永住ノ志ヲ立テ本島ヲ墳墓ノ地トナスニ至リタルヲ以テ、今後ニ於ケル拓殖ノ功程ハ一層ノ速力ヲ以テ進捗スルニ至ルヘキコトヲ疑ハス。

第二節 土地處分

本島領有後、諸種企業者ノ渡航スルモノ夥シク、三十八年ヨリ、主要部落ニ漸次市街區劃ヲ施シテ

其ノ使用ヲ認許シ、農牧業ヲ目的トスル殖民地ハ、三十九年ニ至リ、一部分區劃ノ測設ヲ終リテ、貸付ヲ開始セシカ、四十年三月以後、漸次現行ノ諸法規ヲ施行スルニ至レリ。

現今、法規ノ主ナルモノハ、四十四年勅令第二百八十九號樺太官有財産管理規則、同年勅令第二百九十號樺太國有未開地特別處分令、同四十五年樺太廳令第一號樺太國有未開地特別處分令施行規則等ナリ。

今、土地處分ノ狀況ヲ、土地處分例規及土地處分概況ノ二項ニ分チテ記述セン。

一、現行土地處分例規

現行土地處分ニ關スル法規ハ、樺太國有未開地特別處分令ヲ根據トスルモノニシテ、其ノ概要左ノ如シ。

一、處分スヘキ區域 隨意契約ニ依リ貸付又ハ賣拂フヘキ土地ハ、樺太廳長官ノ告示シタル特定地ニ限ルモノニシテ、其ノ區域ハ(一)豊原、大泊、真岡、野田寒、泊居、久春内、名好、敷香等ノ市街區劃地、(二)鈴谷、内淵、留多加原野、東西兩海岸及亞庭灣内、各地ニ於ケル殖民地區劃地及部落宅地、(三)豊真山道并ニ真縫山沿道ノ未開地及北知床岬以北、國境ニ至ル沿岸ヲ除キタル以外ノ、全島沿岸ニ於ケル未開地、及既墾荒蕪地ニシテ、土地ノ整理上支障ナシト認ムル箇所等ナリ。

二、處分ノ種類 土地處分ノ種類ヲ分チテ、貸付、讓與、賣拂及交換トス、其ノ處分中最モ重要ナル

モノヲ貸付、讓與及賣拂トス、今之ヲ地目別ニスレハ、左ノ如シ。

(一)畑地、(二)牧場地、(三)市街宅地、(四)部落其ノ他、(五)公用地、(六)公共ノ利益トナルヘキ事業用地、(七)其ノ他ノ事業用地、(八)社寺若ハ教會ノ用地、(九)素地ノ儘使用スヘキ物件置場等ノ用地。

而シテ、耕作牧畜及之ニ直接附隨ノ事業ニ供スル土地ハ、無償ニテ之ヲ貸付シ、成功ノ上、之ヲ讓與スルコト、シ、公用若ハ營利ヲ目的トセサル公共ノ利益トナルヘキ事業ニ供スル土地ハ、之ヲ賣拂若ハ讓與シ、又ハ無償ニテ貸付ス。又事業目的ニ依リ、必要ト認ムル土地ハ、直チニ賣拂處分ヲモ爲シ、市街宅地ハ有償貸付シ、事業成功後之ヲ賣拂フ。而シテ、素地ノ儘使用セントスル土地ハ、有償無償何レニテモ之ヲ貸付ス。現行有償貸付地ニ於ケル料金ノ標準ハ左ノ如シ。

市街宅地	一等地	一坪ニ付一ヶ年金十 錢
同	二等地	同 金五 錢
同	三等地	同 金二錢五厘
同	四等地	同 金一錢五厘
市街地附近ノ未開地ハ、	一坪ニ付一ヶ年金八厘	
市街地附近ニアラサル未開地ハ、	一坪ニ付一ヶ年金三厘	
市街地附近ノ既墾荒蕪地ハ、	一坪ニ付一ヶ年金二厘	

三、土地貸付 農業目的ノモノハ、殖民區劃地一戸分并ニ農村宅地ノ貸付ヲ受ケ、開墾成功ノ後ハ、更ニ願書ヲ提出シ、土地ノ讓與ヲ受クルモノトス。市街宅地ハ、有償貸付後、賣拂ヲ受クルコトヲ得ヘク、部落宅地ハ有償貸付トス。

土地ノ貸付ヲ受ケントスルモノハ、其ノ願書ニ住所、氏名、職業、土地ノ表示、使用ノ目的、起業ノ方法ヲ記載シ、戶籍謄本（十萬坪以上ノ貸付願ニハ、官公署ノ證明アル財産調査書、法人ニ在リテハ定款、組合ニ在リテハ契約書）ヲ添ヘ、所轄支廳長ヲ經テ、之ヲ出願セシム。

四、貸付地積 貸付地積ハ勅令ヲ以テ定メラレシカ、廳令ヲ以テ更ニ之カ制限ヲ規定セリ。

一、市街宅地及部落宅地ハ、千五百坪以内

二、耕作ヲ目的トスル土地ハ、五萬坪以内

三、牧畜ヲ目的トスル土地ハ、五十萬坪以内

四、其ノ他ノ土地ハ一萬坪以内

右地積ハ、貸付ノ最大限度ヲ規定シタルニ過キスシテ、一般貸付許可ノ標準ハ、一戸ニ耕作ヲ目的トスル土地ハ、農耕殖民地一區劃、即チ五町步乃至七町步、部落宅地ハ通例九百坪、市街宅地ハ、豊原市街ハ七十八坪乃至百五十六坪、真岡市街ハ八十一坪、大泊市街ハ大約七十八坪ナリ。

五、貸付期間 無償貸付ハ十ヶ年有償貸付ハ十五ヶ年トシ、造林又ハ泥炭地ノ開墾ニ限り、特ニ二十

ヶ年ノ期間ニテ貸付スルコトヲ得ルモノトス。尤モ右ハ期間ノ最長限ヲ規定シタルモノニシテ、現今許可ノ標準ハ、泥炭地又ハ濕地等、土地ノ狀況ニ依リ、殊ニ起業上困難ト認めラルモノ、外、耕作及牧畜ヲ目的トスル未開地ニ在リテハ、五ヶ年以内ヲ限リトス。

六、借地權ノ異動 借地人ハ、相當ノ事由アルトキハ、長官ノ認可ヲ受ケ、借地權ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得、借地人死亡ノ場合ニ於テハ、相續人ヨリ名義更正認可願ヲ提出スルモノトス。

七、貸付地ニ對スル制裁 樺太國有未開地特別處分令第七條ニ依リ、貸付シタル土地、即チ耕作及牧畜ノ目的ヲ以テ無償貸付シタル土地ハ、豫定ノ事業方法ニ依リ、隨時其ノ成否ヲ検査シ、豫定ノ如ク成功セサル者ニハ、貸付契約ヲ解除シ、其ノ貸付全部ノ返還ヲ命スルモノトス。建物建設ノ目的ニテ貸付ヲ受ケタル者、貸付ノ際、定メタル期間内ニ、工事落成セサルトキモ亦同様ナリトス。

貸付契約解除ノ場合ハ、貸付地内ニ於テ、樹木ヲ伐採セシ者ハ、樺太廳長官ノ選定シタル評價人ノ定メタル價格ニ依リ、其ノ相當代價ヲ辨償セシム。借地人自己ノ都合ニ依リ、貸付地ヲ返還スル場合モ亦同様ナリトス。

豫定ノ事業方法ニ違背シタルトキ及有償貸付ノ場合ニ於テ、貸付料金ノ納付ヲ遲滞シタルトキモ亦其ノ貸付許可ヲ取消シ、土地ヲ返還セシムルコトアリ。

以上貸付契約解除ノ場合ニ於テ、借地内ニ借地人ノ所有物件存在スルトキハ、一定ノ期間ヲ指定シ

之ヲ除去ヲ命スルモノトス。

八、貸付地ノ讓與 樺太國有未開地特別處分令第七條ニ依リ、無償ニテ耕作又ハ牧畜ノ用ニ供スル爲、土地貸付ノ許可ヲ受ケシ者ハ、其ノ許可ヲ受ケタル後一ケ年以内ニ其ノ土地又ハ其ノ附近ニ居住シ、行政廳ノ許可ナクシテ、一ケ月以上引續キ、若ハ一ケ年ノ間ニ六ケ月以上、其ノ居住地ヲ離ル、コトナカリシモノニシテ、耕作目的ノモノニ在リテハ、其ノ事業ノ半以上成功シ、且必要ト認ムル牛馬ヲ所有シタル時、又牧畜目的ノモノニ在リテハ、其ノ事業ノ全部成功シタル時、之ヲ讓與スルモノトス。

九、貸付地ノ賣拂 樺太國有未開地特別處分令第一條及第六條ニ依リ、有償貸付ヲ受ケタル土地ハ、貸付料金ヲ完納シ、貸付地ヲ豫定目的及方法通り完成シ、其ノ檢査ニ合格シタルトキハ借地人ニ賣拂フ。現今賣拂フヘキ區域ハ、豊原、大泊、眞岡、野田寒、泊居、久春内、北名好、敷香ノ各市街宅地ニシテ、其ノ賣拂代金ハ、一等地四十錢、二等地二十錢、三等地十錢、四等地六錢ナリ。

二、土地處分概況

三十八年以降、大正元年ニ至ル七年間、各年末ニ於ケル貸付處分ハ、總計地積五千七百七十萬一千二百五十九坪ニシテ、其ノ大正元年末ニ於ケル貸付地ヲ地目別ニ示セハ左表ノ如シ。

地目別貸付 (大正元年)

支應	豊原支應					大泊支應					眞
	畑	牧	市街宅地	部落宅地	其他	畑	牧	市街宅地	部落宅地	其他	
地目	計					計					畑
區分	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數	坪數
四十四年現在	一九,五七,二五九	一一,〇五,八六〇	五,九八,四一六	五,一〇,一〇〇	二,八七,一〇〇	三,七五,六一七	三,八六,三一一	一,四七,八三三	二,八七,七八	七,八八,五五五	二,八二,九六九
大正元年貸付	七,〇八,四〇八	二,八五,五三三	二,五九,一五五	二,九一,九一〇	一,〇七,〇〇〇	一〇,〇六,一〇一	七,五五,〇〇〇	一,四一,六三三	四,一〇,〇〇〇	四,〇五,七三六	三,四九,五五五
計	二六,六五,六六七	一三,九一,三九三	八,五七,五七一	八,〇一,〇一〇	三,九四,一〇〇	一四,八一,七一八	一一,四一,三一一	二,八九,四六六	六,九七,七八	一一,九四,二九一	六,三二,五二四
大正元年末迄返還其他ノ減	六,四三,五六三	一,一三〇,四〇〇	三,一〇,一〇〇	三,〇〇,〇〇〇	一,〇七,〇〇〇	七,七七,〇〇〇	五,〇〇,〇〇〇	一,〇〇,〇〇〇	三,〇〇,〇〇〇	二,一〇〇,〇〇〇	一,二〇〇,〇〇〇
現在貸付	二〇,二二,一〇四	一二,七八,〇〇〇	五,四七,四七一	五,〇一,〇一〇	二,八七,一〇〇	七,〇四,七一八	六,四一,三一一	一九,四六六	三,九七,七八	九,八四,五五五	五,一二,五二四

間ニ於テ、留多加、鈴谷ノ二原野、内淵原野、亞庭灣内ハ雨龍ヨリ西能登呂半島ニ至リ、西海岸真岡、久春内ヲ經テ小田洲ニ至ル間及牛苦ヨリ北名好ニ至ル各沿岸、西海岸小田洲、牛苦間、北名好、國境間、亞庭灣内、池邊濱ヨリ中知床岬ニ至リテ、東海岸敷香ニ至ル間ノ沿岸及留多加川上流沿岸等一帯ノ土地ヲ調査シタリ。此ノ外沿海各地河川上流等ニモ尙農牧適地多ケレトモ、此等ハ第二期ノ調査ヲ俟タントス。以上六ヶ年ニ互リ、調査シタル地積ヲ年別地目別トスレハ左ノ如シ。

殖民地選定地方別地積 (自三十八年至四十四年)

地方名	農耕適地	牧場適地	改良後農地	泥炭地	計
中央凹地帶	一五、八六一、〇六〇	一三、一四一、五六四		一七、四三五、〇〇〇	二五、六五七、六四〇
雨龍西能登呂間	三、六〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇		一〇、〇〇〇、〇〇〇	四、四〇〇、〇〇〇
西能登呂真岡間	一〇、九九五、〇〇〇	四、二七五、〇〇〇		一〇、〇〇〇、〇〇〇	一五、三六三、〇〇〇
真岡久春内間	一四、一六八、〇〇〇	一六、八二〇、〇〇〇	四、三八六、〇〇〇	五、二二〇、〇〇〇	三五、三六七八〇〇
久春内國境間	一九、〇二〇、〇〇〇	七、五八五、〇〇〇			二二、五四〇、〇〇〇
池邊濱榮濱間	八、一七一、〇〇〇	一〇、一〇〇、〇〇〇			一八、二七一、〇〇〇
相川敷香間	七、九五一、〇〇〇	六、〇八〇、〇〇〇			一四、〇三一、〇〇〇
留多加川上流沿岸	一三、五〇〇、〇〇〇				一三、五〇〇、〇〇〇
計	一八四、〇五二、三六〇	一七六、八七五、五六四	四、三八六、〇〇〇	二二、七四五、〇〇〇	三九〇、〇一〇、九四四

町歩換算	町歩換算	町歩換算	町歩換算	町歩換算	町歩換算
六、三五〇、七八二〇	五、九六〇、九一八、二四	一、四六二、〇〇〇、〇〇	七、五八一、六六二、〇〇	一、三〇〇、〇〇〇、三六四、〇四	

更ニ之ヲ地方地目別トスレハ左ノ如シ。

殖民地選定年別調査地積 (自三十八年至四十四年)

年次	農耕適地	牧場適地	改良後農地	泥炭地	計
明治三十八年	五、五八八、四九九	二、九四八、二二六		一、七四三、五〇〇	八、二〇五、六二五
明治三十九年	五、七四八、五六二	一〇、三七五、三四八		一、七三六、九九九	一七、七二〇、五〇四
明治四十年	一、四六二、一八〇	一六、八二〇、〇〇〇	四、三八六、〇〇〇		三三、六六七、八〇〇
明治四十一年	二、四一八、九五〇	二、五八六、〇〇〇		五、三二〇、〇〇〇	四二、〇八五、〇〇〇
明治四十二年	三、六八四、〇〇〇	一六、一八〇、〇〇〇			五二、五六四、〇〇〇
明治四十四年	二、七〇〇、〇〇〇				二、七〇〇、〇〇〇
計	一八四、〇五二、三六〇	一七六、八七五、五六四	四、三八六、〇〇〇	二二、七四五、〇〇〇	三九〇、〇一〇、九四四

即チ、總面積三億九千一萬坪餘(十三萬三町步)、内、農耕適地一億八千四百五萬坪餘(六萬一千三百五十町步)、牧場適地一億七千八百八十二萬坪(五萬九千六百九町步)、泥炭地二千二百七十四萬坪餘(七千五百八十一町步)、改良後農牧適地四百三十八萬坪餘(千四百六十二町步)ニシテ、改良ヲ加ヘテ始

メテ農牧ニ使用スルコトヲ得ヘキ土地及泥炭地ヲ除クモ、尙農牧利用土地十二萬町步餘ニ達セリ。而シテ以上ハ、本島殖民地、第一期ノ選定調査ノ結果ニシテ、比較的交通便利、地味良好ナル地方ノミヲ、選定シタルモノナレハ、尙此等ノ地域中、河川ノ上流地方及海岸附近ニ於ケル臺地等ニモ、將來地方ノ開發ト共ニ、農牧ニ利用セラルヘキ土地少ナカラサルヘシ。又敷香以北國境ニ至ル沿海及幌内川流域等ニモ、牧畜ニ適スル土地存在スヘキモ、此等ノ調査ハ暫ク第二期ニ譲レリ。若シ此ノ調査ニシテ、終結スルニ至ラハ、本島ノ農牧適地ハ、蓋シ三十萬町步ヲ下ラサルヘシ。

殖民選定地中、比較的平坦ナル豊饒ノ地ニ富ミ、面積ノ廣大ナルハ、留多加川、鈴谷川、内淵川等ノ流域ナル南中央凹地帯ニシテ、邦領中殖民地トシテ、最も重要ノ地位ニアリ。夙ニ露領時代ニ於テ、農牧ノ業經營セラレ、領有後、既ニ農民ノ移住耕作スルモノ多クシテ、將來利用セラルヘキモノ多カルヘシト雖、現ニ濕潤ナル土地少ナカラサレハ、開拓ノ進捗ト共ニ、排水其ノ他土地改良ノ施設ヲ爲サ、ルヘカラス。地味及所生植物ハ、河岸ノ地ハ概ネ沖積ヨリ成ル壤土ニシテ、「わかたも」、「やちたも」、「はんのき」、「やなき」等ノ潤葉樹ノ下ニ「よもぎ」、「なつば」、「あざみ」、「ぼうな」等ヲ生シ、地味最も肥沃ナリ。其ノ他草生濕地、針澗混濬樹林地、針葉樹林濕地等アリテ、所生植物ト土地ノ高低ニ依リ、地味一定セス。

南中央凹地帯ヲ除ク以外ノ地ハ、一箇所ニ大地積ヲ包容スルモノ多カラサルモ、直接農牧ニ利用セ

ラルヘキ土地少カラス。又改良施設ヲ要スル箇所、甚タ少ナク、地味及所生植物ハ概ネ南中央凹地帯ニ異ナラス。就中西海岸ニ於ケル真岡小能登呂附近本斗、南名好、野田寒、泊居、久春内等ノ各原野ハ、氣候他ノ地方ニ比シ優良ナルノミナラス、地味亦良好ナルヲ以テ、四十一年以來、移住耕作ニ從事スルモノ多シ。之ニ亞クハ亞庭灣内、東西沿岸ノ諸地方ナリトス。其ノ他ノ地方ニ至リテハ、地味ノ良好ナルモノアリト雖、交通機關ノ不備、其ノ他ヨリシテ開拓ニ不利ナルヲ以テ、勢ヒ開發ノ遲延ヲ免レス。

第四節 區劃測設

一、殖民地

選定調査ヲ終ヘタル殖民地ハ、土地ノ整理并ニ移住民ノ收容ニ便センカ爲メ、區劃ヲ測定ス。區劃ハ縱横ニ基線ヲ施シ、基線ニ準シテ并行線ヲ劃シ、一區劃三百間平方トシ、之ヲ四分又ハ六分シテ、一小劃百五十間四方(七町五反步)、又ハ百間ニ百五十間(五町步)ヲ標準トシ、普通農家一戸ノ收容地ニ充ツ。道路敷地ハ三百間毎ニ、幅六間ノモノヲ設ケ、風防林ハ、地形上必要ニ應ジテ、適當ニ存置ス。又在來部落ノ存在セシ所及地形上、將來一部落ヲ形成スヘキ地ニハ、部落宅地、公共用地、共同放牧地等ヲ豫定存置ス。然レトモ前記ノ區劃ハ地形ニ依リ自ラ多少ノ變更アルヲ免レス。

計	堤防敷地	河沼床	鐵道用地	區劃道路敷地	既成道路	計	泥炭地	鑛泉除地	原野界除地	外國人墓地	墓捨場	屠獸場	孵化場豫定地	共同薪炭林	他設備豫定地	林業豫定地	風防林	林業用豫定地
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000

種別	大正十五年		四十四年		四十四年		四十四年		四十四年		四十四年		四十四年		四十四年		四十四年		換算
	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	數	坪數	
神社敷地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
農事試驗場豫定地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
種畜場豫定地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
陸軍省用地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
監獄用地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
市街地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
部落宅地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
同豫定地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
土人部落地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
農耕適地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
牧場見込地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
公共用地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
村有見込地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1
部落共同放牧地	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1	100	1

殖民地區劃年別地積 (大正元年)

三十九年、始メテ事業ヲ開始シテ以來、大正元年迄ノ年別地積ヲ舉クレハ左ノ如シ。

合 計	
區劃	1,234,567
坪數	1,234,567

二、市街地

市街地區劃ノ測設ハ、三十八年本島領有後、直ニ大泊本町及榮町ノ區劃ヲ爲シタルヲ始メトシ、三十九年ニハ豊原、真岡、四十年ニハ久春内、四十一年ニハ野田寒、泊居、敷香、北名好ノ新設ヲ爲シ、爾來各市街ノ發達ニ伴ヒ年々多少ノ増劃ヲ爲シタリ。市街區劃ノ狀況ハ、各地多少ノ差異アリト雖、概ネ方六十間毎ニ六間乃至八間ノ道路ヲ設ケ、更ニ之ヲ二分シテ、四間乃至六間ノ通路ヲ取り、之ヲ十分或ハ二十分シテ小劃トシ、一戸ノ坪數ヲ百五十六坪又ハ七十八坪或ハ八十一坪トス。即チ大泊市街ノ内、楠溪町ハ、間口六間、奥行十三間ノ七十八坪、本町ハ、間口七間、奥行十八間ノ百二十六坪、豊原市街ハ、間口六間、奥行二十六間ノ百五十六坪ト、間口六間、奥行十三間ノ七十八坪ノモノトアリ。真岡市街ハ、概ネ間口六間、奥行十三間半ノ八十一坪ニシテ、其ノ他ノ各地、亦大同小異ナリ。今其ノ年別地積ヲ舉クレハ左ノ如シ。

市街宅地區劃年別地積

地名	三十八年末		三十九年末		四十年末		四十一年末		四十二年末		四十三年末		四十四年末		四十五年末	
	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數

計	豊原		大泊		真岡		野田		泊居		久春		敷香		北名好	
	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數	區劃數	坪數
三十八年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
三十九年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十一年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十二年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十三年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十四年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234
四十五年	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234	1	1,234

三、部落宅地

部落宅地ハ、之ヲ大別シテ農村及漁村ノ二種トス。農村部落宅地ハ、主トシテ殖民區劃地ニ於ケル、在來部落ノ存在セシ箇所及地方ノ發達ニ伴フ必要ニ依リ、測設セシモノニシテ、三十九年以來、之カ施設ヲ爲シタリ。漁村部落宅地ハ、舊ト漁業設備地ト稱セシモノ及新ニ海岸地方ニ於テ、漁業者用ノ宅地トシテ測設セシモノナリ。一戸分ノ地積ハ、概ネ農村部落ニ在リテハ、九百坪、漁村部落ニ在リテハ、三百坪乃至六百坪ナリ。其ノ四十三年末ニ於ケル、各支應別地積ヲ舉クレハ左ノ如シ。

部落宅地年別地積 (大正元年)

年次	豐原		大泊		真岡		香名		好現	
	部落區劃數	坪數	部落區劃數	坪數	部落區劃數	坪數	部落區劃數	坪數	部落區劃數	坪數
明治三十九年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十一年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十二年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十三年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十四年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
明治四十五年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
大正元年	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000	1	1,000
計	7	7,000	7	7,000	7	7,000	7	7,000	7	7,000

第五節 移住民ニ對スル施設

移住者ノ收容并ニ其ノ保護方法ニ就テハ、先ツ三十八年ヨリ三十九年ニ互リ、農業目的ヲ以テ、渡航シタル者ニハ、從來ノ既墾地及在來家屋ヲ貸付シテ、之ヲ收容シ、次テ土地建物貸付規則、其ノ他ノ諸規則ヲ發布シ、移住民收容ノ施設、漸ク其ノ緒ニ就クニ至レリ。爾來此等ノ法規ヲ改廢又ハ新定シ、諸種ノ保護方法ヲ施行シテ、毎年移住民ヲ收容シタリ。今其ノ收容并ニ保護、其ノ他ノ施設ニ就

テ概述セン。

一、移住民收容方法及戸數 移住民ノ收容ハ、殖民地トシテ選定區劃シタル土地ノ廣袤及其ノ他ノ施設ノ狀況ニ依リ、其ノ年内ニ收容スヘキ戸數ヲ定メ、之ヲ各府縣ニ通牒シ、或ハ移住案内等ノ冊子ヲ頒布シテ、移住ヲ獎勵シ、渡航シタル者ハ、豫定ノ計畫ニ依リ、各殖民地内ニ收容シ、諸種ノ保護特典ヲ與フ。其ノ三十九年以來、收容シタル毎年ノ戸數左ノ如シ。

三十九年	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年
三六五 ^戸	四三三 ^戸	一一六 ^戸	一〇一 ^戸	二三四 ^戸	八三五 ^戸	七九一 ^戸

此等、移住民ノ原籍ハ、北海道其ノ六割ヲ占メ、之ニ次クハ東北、北陸ノ各縣及愛知、鳥取、高知ノ各縣ニシテ、其ノ他ノ府縣、亦多少ノ移住民ヲ出サ、ルハナシ。

二、移住民ニ對スル保護及特典 其ノ主ナルモノ、左ノ如シ。

- 一、種子給與 氣候風土ノ異ナレル本島ニ在リテハ、内地府縣ヨリ携帶シタル種子ニテハ、其ノ結果満足ナラサルヲ以テ、三十九年以後、毎年新移住民ニハ、裸麥、小麥、燕麥、馬鈴薯等ノ種子ヲ、一町歩内外ニ播種スヘキ量ヲ給與シタリ。

二、家畜貸付 本島ハ、農作期間短キヲ以テ、勞力ヲ省略シ、又畜産ヲ以テ、收入ヲ増加スルノ必要アリ。依リテ農家ニハ、必ス家畜ヲ飼養セシムルコトヲ獎勵シ、三十九年ヨリ家畜貸付規則ヲ設ケ、貸付後、牛馬ハ五ケ年以内、豚ハ二ケ年以内ニ仔畜一頭ヲ納付スレハ、母畜ハ借受人ノ所有トナルコト、セリ。

其ノ大正元年末ニ於ケル貸付家畜ハ、牛二百八十頭、馬九百五頭、豚百三十六頭ナリ。

三、農具購入補助 廣キ面積ヲ耕作スルニハ、勢ヒ馬力、器械ヲ用ヒ、作業ノ進捗ヲ計ルノ必要アルヲ以テ、四十二年以降、洋犁、耙耨、除草器等ヲ購入シタルトキハ、一臺ニ付五圓乃至十圓ノ補助ヲ與フルコト、シ、其ノ他、唐箕、製粉器等ノ如キニモ、相當ノ補助金ヲ下付ス。大正元年中補助シタルハ、洋犁百七十臺、耙耨百三十三臺、除草器三十七臺、唐箕四十二臺等ナリ。

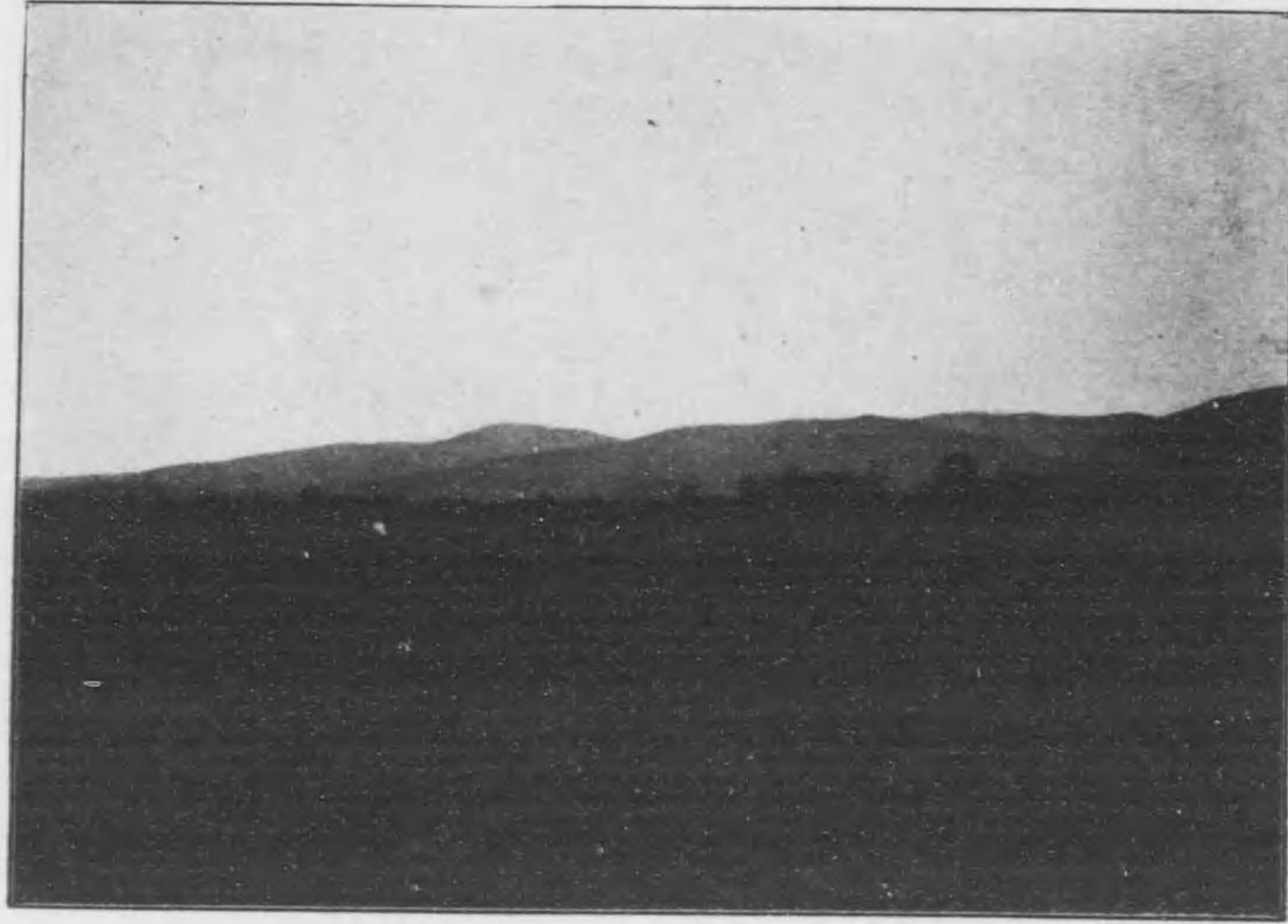
四、家屋建築費補助 從來、露人ノ居住セシ部落附近ノ殖民地ニ入りシ者ハ、在來家屋アリシヲ以テ、之ヲ貸付シタリ。然ルニ、此等在來家屋ノ存在スルハ中央凹地帯ノ一部分ノミニシテ、他ノ地方ニハ之アルコトナク、且漸次開拓ノ進捗ニ從ヒ、各地トモ、遠ク未開地ニ入ルコト、ナリシヲ以テ、四十三年ヨリ移住後、一ケ年以内ニ住宅ヲ建築セシ者ニハ、一戸ニ付金三十五圓以内ノ補助金ヲ與フルコト、セリ。大正元年内ニ之ヲ下付セシモノハ三百六十六戸ナリ。

五、家畜購入補助 家畜飼養獎勵ノ爲、島外ヨリ家畜ヲ移入シタルトキ及島内ニテ家畜ヲ購入シタルトキハ、一頭ニ付種畜ノ資質アルモノハ、馬、三百圓以内、牛、二百圓以内、豚、十圓以内、其ノ他ノ家畜ハ、島外移入ハ牛馬共一頭ニ付五十圓以内、島内購入ハ馬一頭ニ付三十圓以内ノ補助金ヲ下付ス、大正元年中ニ補助シタルハ、牛二十頭、馬二十一頭ナリ。

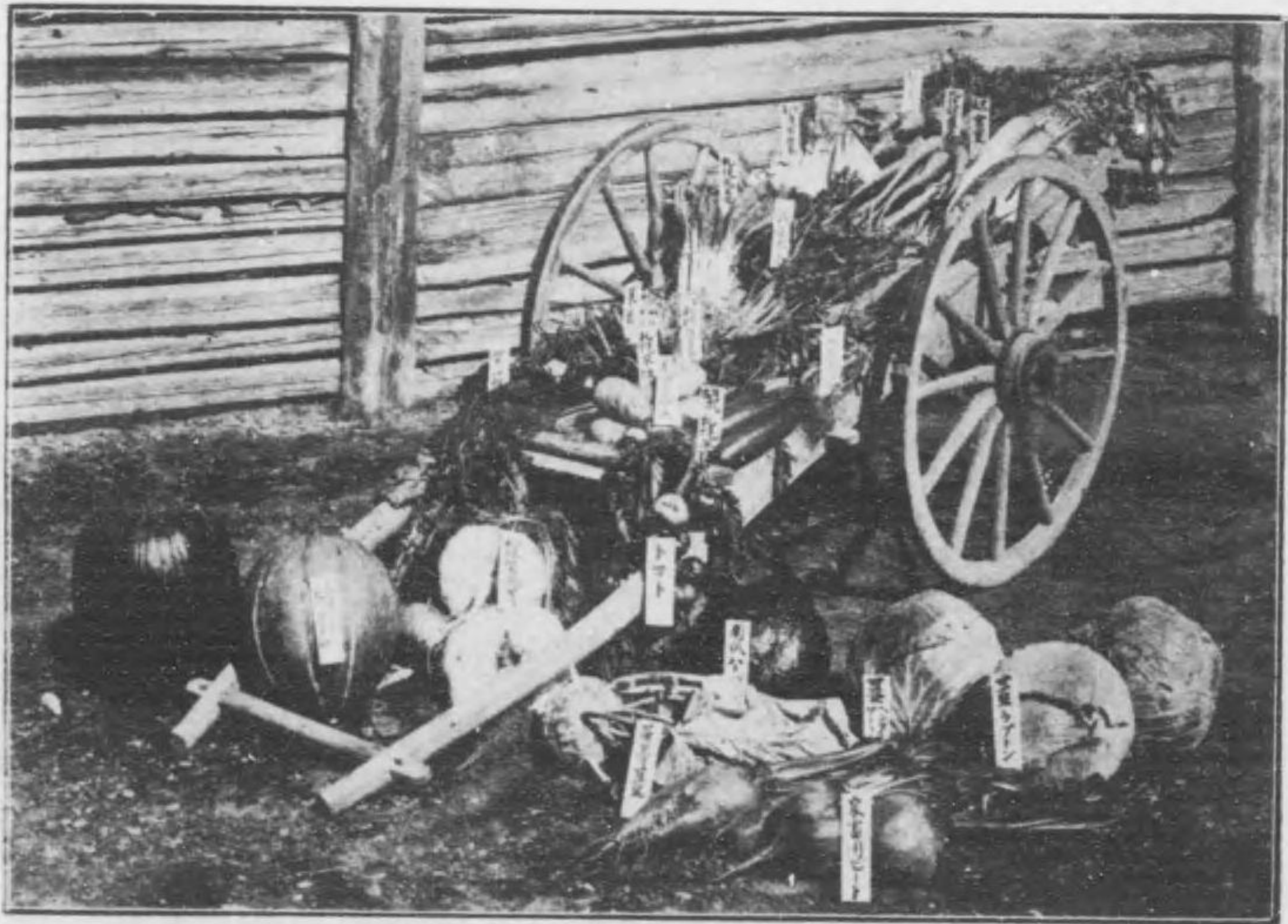
六、其ノ他種牡牛馬ヲ所有シ、又ハ樺太廳ヨリ種牛馬ノ貸付ヲ受ケタル者ニハ、飼養費。農産品評會ヲ開催シタルトキハ、其ノ經費。農畜産製造器具、器械ヲ購入シタルトキ、農事獎勵上必要ト認ムル事業ニ對シテハ、各相當ノ補助金ヲ下付ス。

七、汽車汽船賃ノ割引 移住民ノ經費ヲ輕減センカ爲、四十一年三月内務省告示ヲ以テ、樺太移住民汽車汽船特別取扱方ヲ發布セラレ、本則ニヨリ割引券ヲ携帯スル者ハ、移住ノ往路ニ限り、全國何レノ地點ヨリスルモ、乗車賃及携帶荷物運賃共、概ネ五割ノ割引ヲ受クルコトヲ得ヘシ。尤モ本島内ノ鐵道ハ無賃ナリ。而シテ、此ノ割引券ハ、道府縣廳ニ配付シ、其ノ郡市役所支廳等ニ於テ、移住者ニ之ヲ下付セラルヘシ。

八、移住民取扱所及休泊所 移住者ノ旅行中、之ヲ保護指導スル爲、四十年ヨリ青森、函館、小樽等ニ移住民取扱所ヲ置キ、其ノ船車乗降ニ際シ、諸種ノ保護指導ヲ爲シ、又本島内ノ各要港ニ在リテハ、移住民上陸ノ際、吏員ヲシテ諸種ノ便益ヲ與ヘシメ、毎年移住ノ盛期ニハ、大泊、豊原、眞岡其ノ他ノ要地ニ、移住民休泊所ヲ設置シ、其ノ休憩及宿泊ニ便セリ。



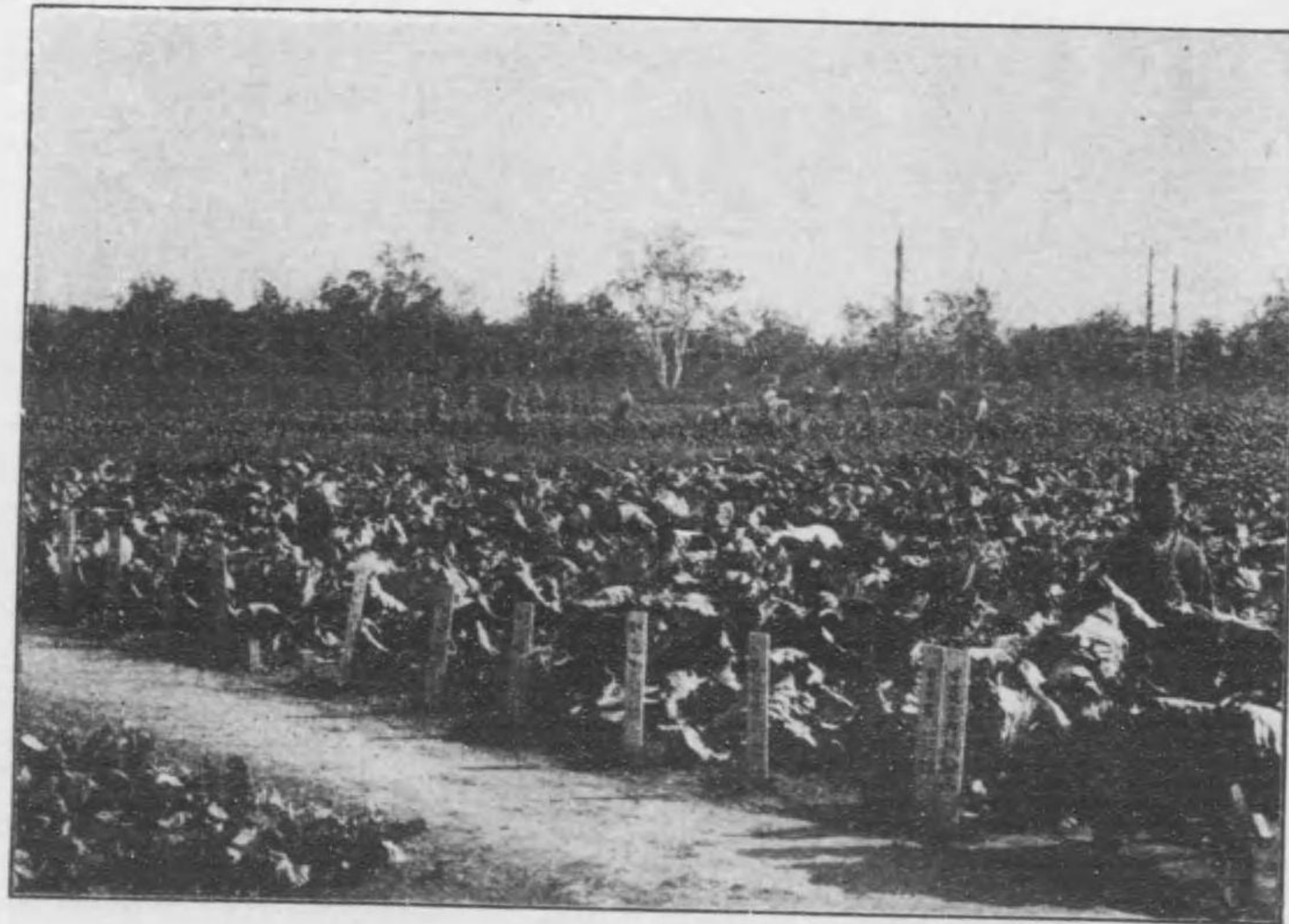
牧草ノ收穫



蔬菜類



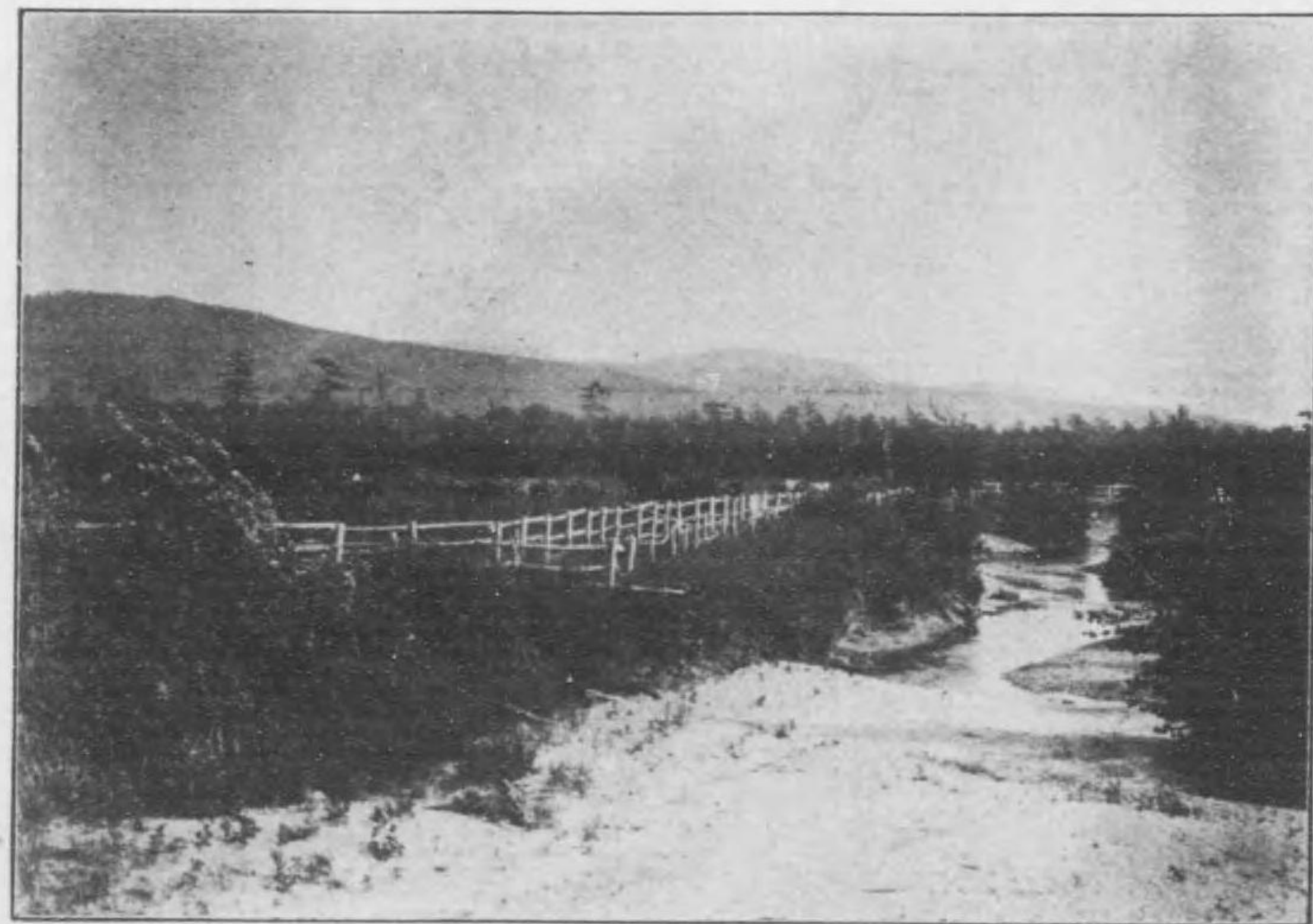
(一其) 場 驗 試 事 農 廳 太 樺



(二其) 上 同



樺太廳種畜場



農民共同放牧場

第四章 農業及牧畜

第一節 總說

本島ハ、露領時代ニ於テ、夙ニ農業殖民ニ關スル調査ヲ遂ケ、作業ノ生育ト、家畜ノ蕃殖ニ適スルコトヲ認メ、爾來各河川ノ流域及交通ノ利便ナル地ヲ選ヒテ、農村部落ヲ設置シ、多大ノ保護獎勵ヲ加ヘシト雖、農民ハ皆刑餘ノ徒ニシテ、毫モ土地ヲ愛スルノ念ナク、僅ニ自家用ノ食料ヲ得ルヲ以テ満足セシヲ以テ、小麥、「ライ」麥、馬鈴薯及數種ノ蔬菜ヲ耕作セシモ、其ノ作付反別多カラサリキ。唯牧畜ハ、始メ大陸ヨリ家畜ヲ輸入シ、農民ニ貸付シテ蕃殖ヲ獎勵セシ結果、彼等生活ノ必要上ヨリ、比較的好成績ヲ示シ、馬ハ役用、牛ハ肉乳用トシテ、其ノ需用ヲ充スニ至レリ。然レトモ種血ノ改良ヲ圖ラサリシ爲、牛馬何レモ體格劣等ナルヲ免レス。三十八年秋、本島南半ノ我領トナルヤ、居住ノ露人ハ續々歸還セシヲ以テ、數十ノ農村部落ト耕地トハ、全ク荒廢ニ歸シ、家畜ノ如キモ、酷寒ノ期ニ飼養主ヲ失ヒ、殆ト皆餓死凍斃スルニ至レリ。

領有以來ハ、露領時代經營ノ狀態ニ稽ヘ、又地味氣候等農牧ニ適スルヲ確メ、三十九年ヨリ農業移住者ノ收容ヲ開始シテ、種子ヲ給與シ、家畜ヲ貸付シ、或ハ農事試驗場、種畜場ヲ設ケテ、農牧業ノ發達ヲ獎勵セシ結果、今ヤ鈴谷、内淵、留多加諸川ノ流域、亞庭灣内及西海岸南部沿岸ノ各地ニハ、

農民充實シテ耕作及飼畜ニ從事シ、各相當ナル生計ヲ營ミ、開墾目的ヲ以テ移住スル者、亦益々増加スルノ趨勢ヲ示セリ。

第二節 農業

第一項 耕地

露領時代ニアリテハ、土地ハ總テ官有ニ屬シ、農村サヘ土地制度ノ設ケナク、耕作ハ他人ノ耕地ヲ侵サ、ル限リ、農民ノ自由ニ委シタルカ如ク、其ノ耕作ノ方法モ、甚タ粗雑ニシテ、圃場ハ各地ニ散在シ、専ラ休田法ヲ採リ、無肥料ニテ栽培シ、其ノ耕作地積モ、概シテ一戸一二町歩ヲ出テサルモノ多カリキ。然ルニ領有後ハ、殖民ノ章ニ述ヘシカ如ク、農牧ニ供スル土地ハ、無償貸付ニシテ成功後讓與スルコト、ナリタルヲ以テ、自カラ農民ノ土着心ヲ鞏固ナラシムルニ至レリ。

現今、開墾耕作セラル、ハ、主トシテ河岸ノ平地ニシテ、地味最モ肥沃ナリ。唯本島一般ノ地質トシテ、下層ハ粘質ニ富ミ、透水性ニ乏シキヲ以テ、各地概ネ排水ヲナサ、ルヘカラス。其ノ甚シキ濕地ニ在リテハ、大排水溝ヲ設クルノ必要アルヲ以テ、四十二年以來、本廳ニ於テハ、主要ナル殖民地ニ繼續シテ之カ施設ヲ爲セリ。

未開地ノ開墾ハ、樹林地ハ其ノ立木ヲ薪炭材トシテ利用シタル後、枝條ヲ下草ト共ニ燒キ、唐鍬等

ヲ用ヒテ、手起ヲ爲シ、數年ヲ經テ根株ノ腐朽スルニ至リ、漸次馬耕ヲ行フ、草原地ハ草ヲ刈拂ヒ、直ニ馬耕ヲ爲スコトヲ得ヘシ。一般耕作ノ方法ニ至リテハ、内地府縣ト多少差異アルヲ免レス。耕地狹隘ナル内地ニアリテハ、周到ナル方法ニ依リテ、收穫ヲ増加シ得ヘキモ、地積廣大ナル新開地ニ在リテハ、牛馬及器械力ヲ用フルニアラサレハ、良果ヲ收ムルコト難シ。又肥沃ナル新開地ハ、數年間肥料ヲ用ヒスシテ、多クノ收穫アルモ、漸次地方ノ減耗ヲ免レサル故ニ、厩肥、堆肥等ヲ保存シテ之ヲ施用シ、又輪作ヲ爲スノ必要アリ。

今四十年以後、各年ノ耕作反別ヲ示セハ左ノ如シ。

四十年	八八〇町
四十一年	一、〇四四
四十二年	一、四四六
四十三年	一、七三四
四十四年	三、五二八
大正元年	四、〇一九

第二項 作物

露領時代ニ耕作セシ農作物ハ、大麥、ライ麦、小麥、裸麥、燕麥、馬鈴薯、大根、人參、豌豆、

蠶豆、甘藍、胡瓜、蕪菁等ナリ、サレト露人ノ栽培法ハ、頗ル粗笨ナルヲ以テ、收穫歩合甚タ僅少ナルヲ免レサリキ。領有以來、移住農民ノ耕作セル結果、并ニ農事試驗場ニ於ケル成績ニ依レハ、本島何レノ地方ニ於テモ、完全ニ成熟スルハ、大麥、小麥、裸麥、「ライ」麥、燕麥、馬鈴薯、豌豆、蠶豆、大麻、蕪菁、牧草、及根菜、葉菜等ノ蔬菜類ニシテ、早熟種或ハ西海岸南部ノ如キ、比較的溫暖ナル地方ニ於テ成熟スルモノハ、稻黍、玉蜀黍、大豆、小豆、菜豆等ナリ。又果樹類ハ須具利、房須具利ノ如キ、小果樹ハ好適セリ。苹果、櫻桃、梨ノ類ニ至リテハ、尙ホ試驗中ニ屬スレトモ、西海岸南部地方ニ於テハ、完全ニ成熟スル見込充分ナリ。要スルニ本島ニアリテハ、各作物ハ、品種ト地方トニ依リ、概ネ登實スルコトヲ得ヘシ。

農作物ノ播種、收穫期ハ農作期間短キヲ以テ、概ネ五月初旬ヨリ十月下旬ノ間ニ於テセサルヘカラス。今、主要作物ノ播種期、收穫期等ヲ舉クレハ左ノ如シ。

作物	適種	播種期	收穫期
大麥	六角種	五月上旬ヨリ下旬	九月
裸麥	丸實	同	八月
春小麥	在來、「ビシヨツプ」	五月上旬ヨリ下旬	九月
秋小麥	「レッドセネオロジカル」	八月下旬ヨリ九月上旬	九月
燕麥	長白「リースホース」	五月上旬ヨリ下旬	九月

作物	在來	皮來	同	同
蕎麥	銀	同	同上	同上
春蕎麥	「ハンブルク」	同上	同上	同上
豌豆	黒、在來	同上	同上	同上
馬鈴薯	在來「アーリーローズ」	同	同上	同上

以上ノ期節ハ、大略ヲ示シタルノミナレハ、地方ニ依リ多少ノ斟酌ヲナサ、ルヘカラス。作物ノ品質ハ、其ノ品種ニ依リ、多少優劣アルモ、概言スルトキハ、島産裸麥、小麥、燕麥、蕪菁等ハ、之ヲ北海道産及内地産ニ比シ、大差ナク、就中、蕪菁ノ如キハ、甚タ優良ナル品質ノモノヲ産ス。作物ノ收穫量ハ、年ノ豊凶ニ依リ、差違ナキヲ得サルモ、小麥、大麥、裸麥ハ一石乃至一石五斗、燕麥ハ二石内外、蕪菁ハ一石五斗内外、馬鈴薯ハ三十俵内外トス。今、大正元年ニ於ケル、管内農作物收穫高及概算價格ヲ示セハ左ノ如シ。

農作物作付反別收量價格調 (大正元年)

作物	作付段別	收穫量	價格	
			一段歩	一段分
大裸麥	麥	三九・三・五	一・〇〇〇	九・七四
	麥	二二・九・八	八・〇〇〇	八・三四
大麥	麥	三・五二・七三	三六・七九・〇三〇	一・〇四
	麥	二二・九・八	一・九四・〇八〇	八・三四

計	春 小 麥	秋 小 麥	燕 麥	蕎 麥	稻 黍	碗 豆	蠶 豆	菜 豆	春 薯 蓴	秋 薯 蓴	馬 鈴 薯	收 草	大 麻	蔬 菜 類	計	平均 除 除 平均	平均 除 除 平均
四、〇九、四・八	一、三、四七・六七一石	九、九〇〇	二、三七・八〇同	一、五八二・二九同	一、五、五七三・六一同	八、七、四・五	二、三、三・八	六、六、七・四	二、三、三・五	二、一、〇・八	一、三、〇・六・九	三、三、六・九	六、〇、六・四	一、〇、〇・八・〇	一、〇、〇・八・〇	一、〇、〇・八・〇	一、〇、〇・八・〇
四、五、八、九、四・八	二、二、九、九、七・四	四、九、一、〇、〇	二、三、七、八、〇同	一、五、八、二、二、九同	一、六、五、七、三、六、一、〇同	四、八、五、四、五同	一、五、四、四同	四、八、五、四、五同	一、四、六、七、六同	六、九、二、六、〇同	一、六、一、〇、五、八、七、一貫	一、九、〇、一、〇、四、〇	四、五、四、五	一、〇、七、四、三	四、四、三、四、九、九、一、七、〇	四、四、三、四、九、九、一、七、〇	四、四、三、四、九、九、一、七、〇
二、八、六	一、四、八、四、三、七、〇	一、〇、〇、〇、〇	六、〇、〇、〇、〇	六、〇、〇、〇、〇	六、六、二、九、四、四、〇	八、〇、〇、〇、〇	一、二、三、三、〇	五、八、五、四、〇、〇	一、四、六、七、六、〇、〇	六、九、二、六、〇、〇、〇	二、三、九、六、一、三、三、〇	九、〇、〇、〇、〇	九、〇、〇、〇、〇	九、六、六、五、二、三、〇	九、五、〇、五、二、〇、〇、〇	四、一、五、〇、〇、〇、〇	八、六、一、九、五、四、四、〇
九、二、九	九、二、九	九、〇、〇、〇	八、八	一、八、八	一、八、八	一、一、八	〇、六	七、二	六、八	六、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	二、五、九	二、五、九	一、七、九	二、八、六
九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三	九、〇、三、三

備考 一、平均一反歩收穫價格ハ馬鈴薯蔬菜類ヲ除ケハ九圓二十四錢六厘ナリ。
 一、單價ハ豊原市街ニ於ケル賣買價格ヲ標準トナシ計算セリ。

第三項 農民

一、蔬菜類ニハ大根、牛蒡、人參、蕪菁、菜類ヲ含ム。
 本島ニ於ケル農業ハ、總テ自作小農組織ニ依ルヲ以テ、現在農家ハ小作ト稱スルモノナク、全部自作シテ獨立經營ヲ爲セリ。而シテ地方ニ依リ、農業ヲ專業トスルモノ、及商業、漁業等ヲ兼業スルモノアリ。大正元年末ニ於ケル、支應管内、農業者ノ戸口ヲ舉クレハ左ノ如シ。

支應別	戸		數		人		口
	專業	兼業	計	專業	兼業	計	
豊原	九三一	七五	一、〇〇六	三、五六一	三、二二	三、八七三	
大泊	二九七	二九五	五九二	一、〇六五	一、三〇一	二、三六六	
眞岡	四九五	一四九	六四四	一、六二二	五五〇	二、一七二	
計	一、七二三	五一九	二、二四二	六、二四八	二、一六三	八、四一一	

即チ、豊原、眞岡兩支應管内ニハ、兼業者少ナク、大泊支應管内ニハ、兼業者甚タ多シ。
 住居ハ、豊原、大泊、兩支應管内ノモノハ、一里乃至二里ヲ距テ、存在スル、十數戸乃至數十戸ノ密集セル、在來家屋ノ貸付ヲ受ケテ、居住スルモノ多キモ、部落ヲ距ルコト遠キ、殖民地ニ入り、自費建設セシモノ亦少ナカラス、眞岡支應管内ノモノハ、在來家屋ナキヲ以テ、概ネ貸付地ニ自費建設

シ、自カラ又散居ノ狀ヲ爲セリ。家屋ノ構造ハ、在來ノモノハ、所謂露式丸太造ニシテ、最モ防寒ニ適シ、新ニ建設セシモノモ、在來ノモノニ倣フカ、或ハ壁付ト爲シテ、寒氣ニ備フルモノ多シ。

農家ノ常食ハ、麥類、馬鈴薯ヲ主トシテ、之ニ多少ノ米ヲ混ヘ、蔬菜鹽魚等ヲ副食トス。一般ノ衛生狀態ハ、頗ル佳良ニシテ、特種ノ病症ナク、嚴寒ノ期ト雖、戶外ノ労働ニ從事シテ、何等ノ障害ヲ見ス。

一戸ノ耕作反別ハ、多キハ六七町步、少ナキハ一町步内外、平均二町步内外ナレトモ、牛馬及機械ヲ用フルモノ、漸ク多キヲ以テ、數年ヲ出テスシテ倍加スルニ至ルヘシ。而シテ、夏期ハ専ラ耕作ニ努メ、餘暇ニハ諸種ノ労働ヲ爲シ、冬期ハ開墾スヘキ土地ノ、伐木ノ傍ラ、薪炭ノ製造、木材ノ伐採運搬ニ從事シテ、相當ノ收入ナキハナク、殊ニ市街附近ノモノニ在リテハ、燕麥、小麥、薯蕷等ノ作物ヲ多少販賣スル外、蔬菜類ヲ市街ニ搬出賣却シテ、多額ノ收入ヲ得ルノ便アリ。平均農家一ケ年ノ收入ハ、副業收入ヲ加ヘテ、二百圓乃至二百五十圓ニ達ス、其ノ移住後日尙淺ク、事業經營ニ多額ノ費用ヲ要スルニ拘ハラス、其ノ勤勉ナルモノニ在リテハ、既ニ土地ノ所有權ヲ得、尙別ニ相當ノ貯蓄ヲ爲セルモノアリ。又共同放牧場、私立小學校ノ經營、貯金組合、農事改良獎勵ニ關スル諸會ノ如キ、公共事業モ漸次良好ナル成績ヲ示スニ至レリ。斯ノ如ク、本島農家經濟ノ基礎、漸ク確實トナルニ至リシヲ以テ、今後益々順境ナル發達ヲ爲スヘキヤ明カナリ。今三十九年以降、毎年ノ農家戸數ヲ舉ク

レハ左ノ如シ。

年次	戸數		人數		計
	專業	兼業	專業	兼業	
三十九年	?	?	三六五		
四十年	?	?	七九八		
四十一年	七七三	五七	八三〇	三、〇四六	二四五
四十二年	七三五	一三一	八六六	二、九一二	四九五
四十三年	八八九	二二五	一一一四	三、六九二	八九二
四十四年	一、二二五	五一二	一、七三七	四、九一五	二、〇五八
大正元年	一、七二三	五一九	二、二四二	六、二四八	二、一六八
					八、四一一

第三節 牧畜

第一項 家畜

氣候、地勢、牧畜ニ適スルノミナラス、農業ニハ、有畜組織ヲ採リ、農民ニ家畜ヲ貸付シ、或ハ其ノ家畜ノ購入ヲ補助シ、或ハ種畜ノ無料種付ヲ爲ス等、専ラ獎勵ニ勉メタル結果、家畜ヲ飼養スルモノ漸次多キヲ加ヘ、之カ利用ノ途モ、漸ク増進スルニ至レリ。今、四十年ヨリ大正元年ニ於ケル、家

畜ノ數ヲ舉クレハ左ノ如シ。

年次	牛	馬	豚	鶏
四十年	一、二三四	一、二四八	二二一	?
四十一年	一、二〇九	一、二九一	七七九	三、二四二
四十二年	一、一一八	一、二九〇	五一〇	五、一七五
四十三年	一、三八三	一、五七八	五八六	八、二二二
四十四年	一、二五四	一、六一〇	三九八	一、八七三
大正元年	一、二七五	一、七二四	四七八	一、九六七

第二項 牧場

民有牧場ハ、漸次増加シ、大正元年末現在、豊原支應管内七箇所、大泊支應管内二箇所、眞岡支應管内七箇所、名好支應管内一箇所、計十七箇所、總坪數四百萬餘坪ニシテ、其ノ飼畜ハ、牛百八十頭、馬八十八頭、豚四十三頭ナリ。

第四節 農事試験場及種畜場

農事試験場ハ、三十九年豊原ノ西南二里ナル竝川村ニ創設シ、次テ四十三年西海岸宇遠泊ニ分場ヲ

設ケタリ。

農事試験場ニ於ケル、事業ノ主ナルモノハ、農産ノ増殖及改良ニ關スル各種ノ試験、并ニ調査、種苗ノ育生配付、農事ニ關スル指導講話等ナリ。而シテ、竝川ニアリテハ、普通作物及特有作物ノ試験ニ重キヲ置キ、宇遠泊ニ在リテハ、特ニ果樹類ニ重キヲ置キ、又西海岸ニ於ケル特種ノ作物ヲ選ヒテ之カ試験ヲ施行シタリ。

種畜場モ亦、三十九年ノ創設ニシテ、舊ト大泊ノ北方三里、貝塚ニアリシカ、四十四年六月ニ至リ、農事試験場ト共ニ、之ヲ小沼ニ移シタリ。其ノ事業ノ主ナルモノハ、家畜ノ種付、畜産製造試験、農民ニ貸付スヘキ牛馬ノ一時飼養、畜産ニ關スル指導、講話等ニシテ、其ノ四十三年末ニ於ケル飼畜ノ數ハ、種牡牛十七頭、種牡馬十四頭、蕃殖牛馬五頭、豚十二頭、緬羊五頭、鶏二十羽等ナリ。

第五節 動植物調査

第一項 植物調査

本島ニ於ケル植物ノ分布、種類并ニ用途ヲ調査スル爲メ、三十九年ヨリ四十二年ニ亙リ、島内各地ヲ跋渉シテ、標本ヲ蒐集シ、四十三年ヨリ標本ノ作製并ニ之カ分類命名ヲ爲シ、四十四年三月完成ヲ見ルニ至レリ、其ノ結果ニ依レハ、顯花隱花兩植物ヲ合シテ、八十餘科ニ上リ、標本ノ數、千有餘ニ

達セリ、其ノ結果ハ四十年樺太植物調査概報ヲ刊行シ、近ク詳細ナル樺太植物誌ヲ發刊セントス。

第二項 動物調査

動物調査ハ、本島ニ於ケル有益、有害鳥獸ノ種類、并ニ其ノ回遊期等ヲ知り、又貴重獸類ノ棲息蕃殖ノ狀況ヲ調査シ、將來ノ施設ニ資スルヲ目的トシ、先ツ四十三年及大正元年ノ兩年ニ互リ、本島各地ヲ跋渉調査シ、主トシテ鳥類ノ標本ヲ蒐集シ、之ヲ分類命名シタリ。其ノ種類約百七十種ニ上リ、中ニハ本島特有ノモノモ少ナカラス。本調査ノ結果ハ近ク樺太動物調査報告トシテ刊行セラルヘシ。

第六節 狩獵

第一項 獵狩免許及獵獲物

狩獵ニ關シテハ、總テ四十二年樺太廳令第二十八號、樺太狩獵取締規則ニ依ルモノニシテ、爆發物、劇毒藥、据銃、陷穽、其ノ他危險ナル裝置ヲ以テ、鳥獸ヲ捕獲スルコトヲ禁シ、狩獵ヲ爲サントスル者ハ、願書ヲ出シ免狀ヲ受クルコトヲ要ス。免狀手数料ハ、一人五十錢ニシテ、其ノ有効期限ハ九月一日ヨリ翌年八月三十一日マテトス。大正元年ニ於ケル免狀下付數左ノ如シ。

銃	獵	銃又ハ獵	銃又ハ網獵	計
四一〇	四二二	七〇七	三	一、五三二

本島ニ於ケル、獵獲物ノ主ナルモノハ貂ニシテ、本邦ニ在テ固ヨリ他ニ比類ヲ見ス、之ニ次クハ、麝香鹿、獺、狐等ナリ。今主ナル獵獲物ノ數量及價格ヲ舉クレハ左ノ如シ。

種	類	數	量	價	格
貂			一、二七八		三五、五〇七
獺			九八		二、一五八
狐			五九		六八七
熊			一九		四三六
馴鹿	鹿		二四		一八九
麝香	鹿		一、四五九		四、七九〇
木	鼠		一、四五〇		三一三
海	驢		一一五		二八八
海	豹		二一五		七九一
兔			三九		一〇
計			四、六五六		四五、一六三

第二項 保護鳥獸

樺太狩獵取締規則ニ於テ定メタル、保護鳥獸ノ種類及保護期間左ノ如シ。



一ノ澤漁場ノ鯨沖揚



昆布乾燥ノ狀況

一、四季ヲ通シテ、捕獲ヲ禁スルモノ。

虎鵜 赤腹 眉白 黑鵜 駒鳥 河鳥 岩鵜 鷓 鶩

葦雀 菊戴 山雀 小雀 日雀 四十雀 五十雀 柄長 鷓鴣

木走 棕鳥 鶴鴿 田鵜 雲雀 燕 雨燕 啄木鳥 杜鵑

郭公 鴟鵂 鴉 鳶 海雀 鶴

二、毎年五月一日ヨリ八月三十一日マテ、捕獲ヲ禁スルモノ。

鴨 鴨 鳩(鳩ヲ除ク) 雁 鳧 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

松鷄

三、毎年三月一日ヨリ八月三十一日マテ、捕獲ヲ禁スルモノ。

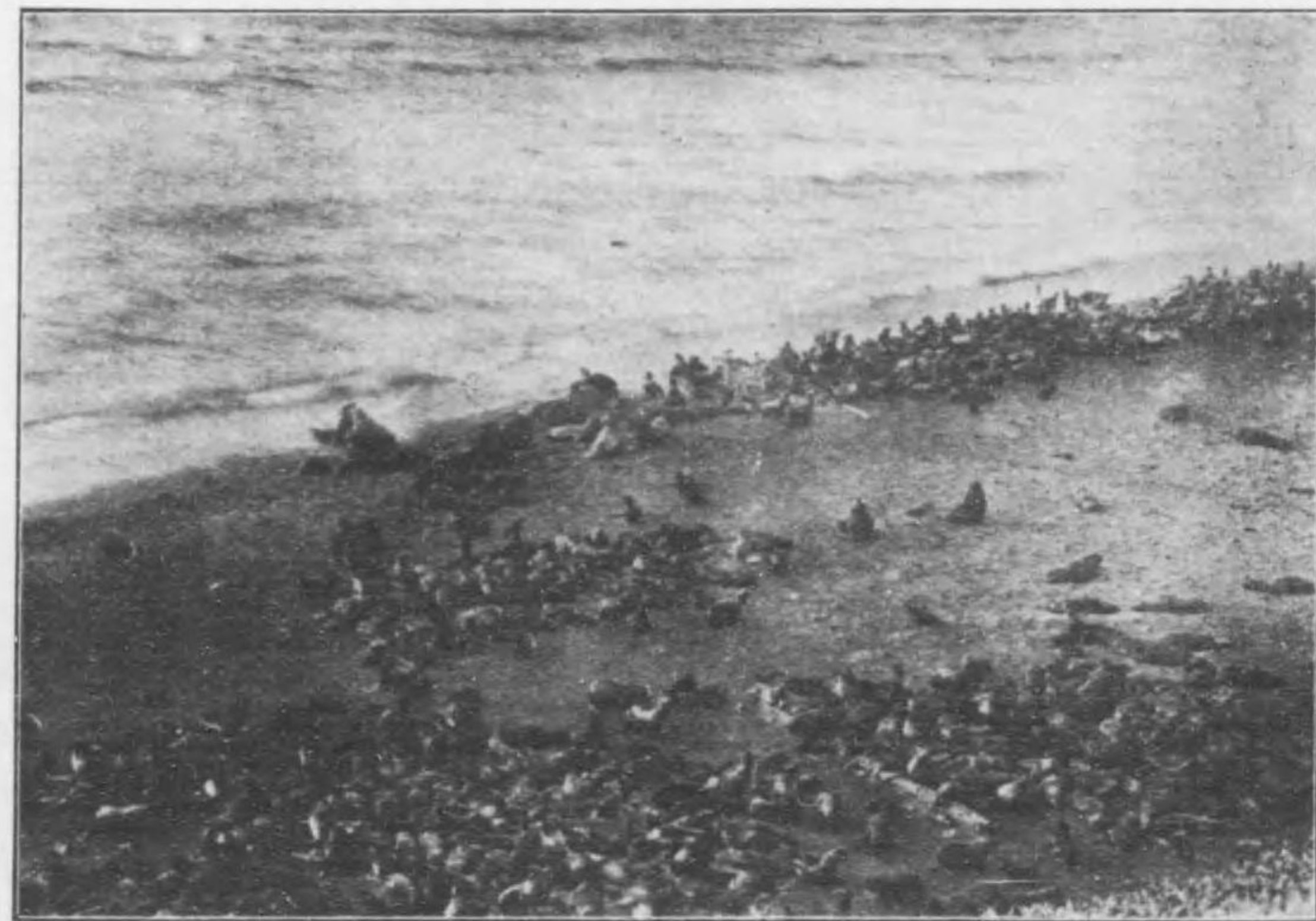
獺 馴鹿 麝香鹿

四、毎年一月一日ヨリ八月三十一日マテ、捕獲ヲ禁スルモノ。

貂



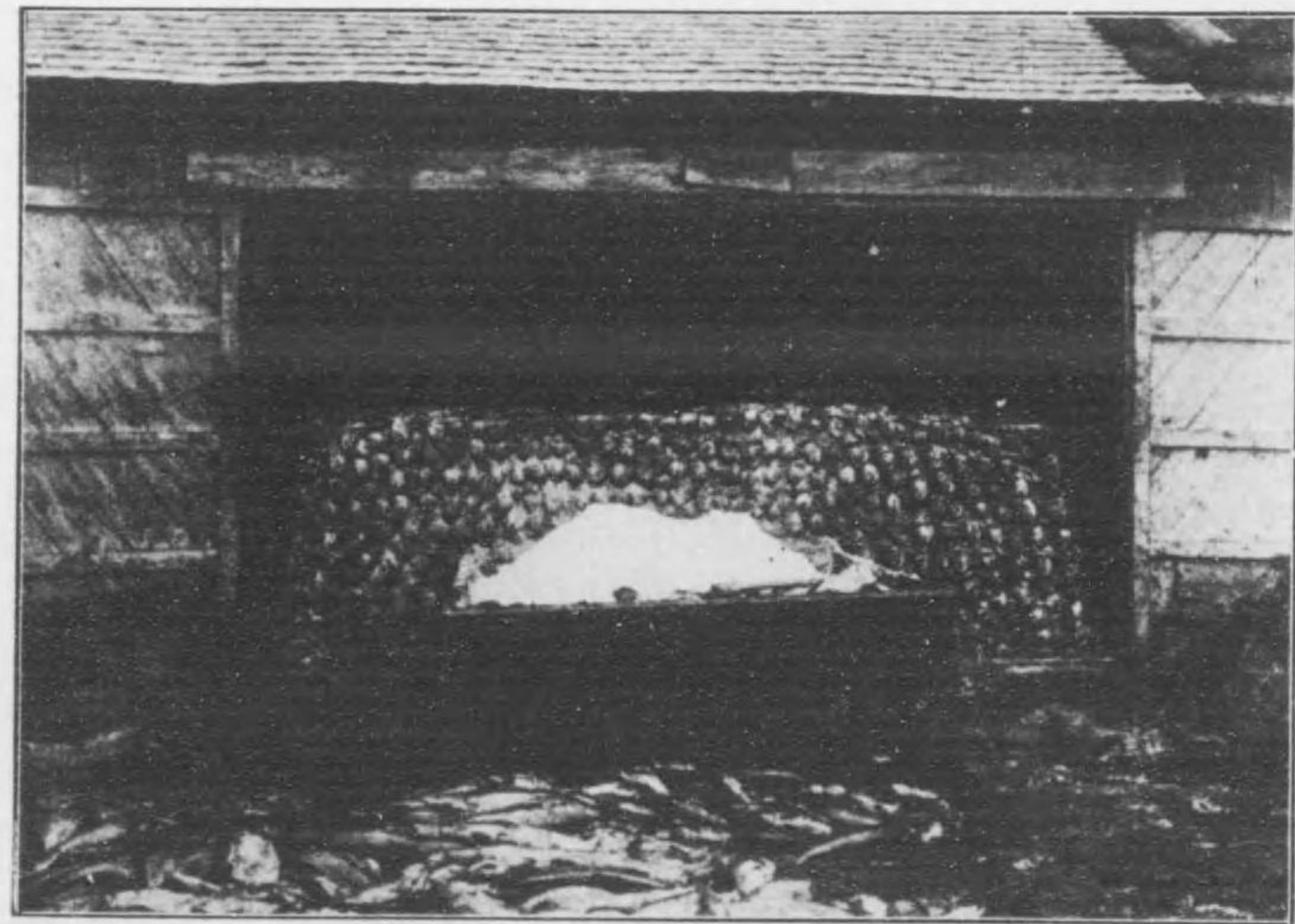
撈漁ノ蟹ルケ於ニ岸海西



況狀ノ居群獸舩臘ルケ於ニ島豹海



場 驗 試 産 水 磨 樂 廳 太 樺



藏 鹽 ノ 鱒 ル ケ 於 ニ 泊 幌 岸 海 東

第五章 水産

第一節 總説

三十八年本島占領後、樺太漁業假規則ヲ發布シ、鯧、鱒、鮭ノ主要漁業ハ、其ノ漁場ニ關係アル從來ノ出稼漁業者ニ限り、所定ノ料金ヲ納メテ、之ニ從事セシムルコト、及露人ノ經營ニ係ル漁場ト、漁業者假規則ニ適合セサル者ノ經營セル漁場トニ就テハ、其ノ漁業料金ヲ入札ニ付シ、最高額落札者ニ漁業ヲ許可スルコト等ヲ規定シ、其ノ他ノ漁業ニ關シテハ、同規則ニ基キ、相當料金ヲ納メ、漁業鑑札ノ交付ヲ受ケ、夫々漁業ニ從事セシムルコト、ナセリ。而シテ三十九年ニ於テ假規則ニ依リ、優先ノ詮議ヲ受ケ鯧、鮭、鱒、漁業ノ許可ヲ受ケタルモノハ、三十三人ニシテ、此ノ漁場數百〇八箇所。又入札ニヨリ鯧、鱒、鮭、漁業ノ許可ヲ受ケタル者ハ、七十三人ニ上リ此ノ漁場數百十二箇所。漁業鑑札ノ下付ヲ受ケタル者ハ、二千五百六十三人、此ノ船數二千八百五十七艘ナリキ。斯クテ三十九年中許可ヲ與ヘシ鯧、鮭、鱒ノ建網漁業ハ、四十年ニ於テモ繼續從業ヲ許可シ、又四十年度ニ於テ開設セシニ十五箇所ノ新漁場ニ對シテハ、前年ノ例ニ依リテ入札ヲ行ヒ、漁場距離ノ關係ニ依リ、前年優先ノ詮議ヲ與ヘ得サリシ二箇所ハ、特ニ其ノ關係者ニ許可シ、海馬島ニ於ケル八箇所漁場モ、同シク之ヲ舊來ノ關係者ニ與ヘ、以テ一段落ヲ告ケシカ、同年漁業法ヲ施行セラレタル結果、鯧、鮭、鱒ノ建

網漁業ハ、之ヲ免許漁業ト認め、免許期間ヲ四十六年九月迄トシ、稍内地ト同一ノ状態ニ進ムヲ得タリ。唯内地ト異ナル所ハ、漁業料ヲ競争入札ニ付シ、最高入札者ニ漁業ヲ免許スルノ點ナリシカ、四十四年二月樺太漁業令ノ改正ト共ニ、從來ノ入札制度ハ之ヲ廢止シ、漁業料ハ樺太廳長官之ヲ査定スルコト、ナレリ。尋テ同年四月改正漁業法全部ヲ施行シ、免許漁業中ニ鯨、鮪、鮭建網漁業ノ外、區劃漁業、専用漁業ヲ加ヘ、同時ニ漁業登録令、漁業組合令ヲモ亦本島ニ施行シ、漁業行政上一段ノ進境ヲ示セリ。又免許漁業以外ノ漁業ニ對シテハ、三十九年八月以降、數回法規ノ改廢アリ、現今ノモノハ大正二年三月所定ノ樺太漁業取締規則、手續網打瀬網漁業規則及樺太漁業鑑札規則等ニシテ、特ニ許可ヲ要スル漁業ノ漁業者ニハ許可證ヲ與ヘ、其ノ他ニハ漁業鑑札ヲ下付シ一般漁撈者ニハ漁撈鑑札ヲ下付スルコト、爲セリ。

現在ノ漁業制度ハ、上來述ヘタル所ニ依リ、略之ヲ知ルコトヲ得ヘキモ、更ニ之ヲ概言スレハ、本島ニ於ケル免許漁業ハ、定置漁業ニ於テ鯨、鮪、鮭ノ建網漁業、區劃漁業ニ於テ海苔、介類、魚鼈類ノ養殖業、専用漁業ニ於テ漁業組合ノ出願ニ係ル地先水面専用漁業ノ三種トシ、之カ免許方法ハ、内地ト略同一ナルモ鯨、鮪、鮭ノ定置漁業ニ對シテハ、樺太廳長官ノ査定セル漁業料納付ノ義務ヲ附帶セリ。免許漁業以外ノ漁業ハ、配繩、水下網、摺網、釣、措等ノ漁具ヲ以テスルモノハ、別ニ許可ヲ要セス、漁業鑑札ノミヲ以テ漁業ニ従事スルコトヲ得レトモ、其ノ他ノ漁業ハ所轄支廳長ニ出願シ、

許可ヲ得サル可カラス。要スルニ本島ノ漁業制度ハ、漸次内地ト同一ナルヘキ趨勢ニアレトモ、鯨、鮪、鮭ハ本島重要ノ水産物ニシテ、蕃殖保護上特ニ之カ漁法ヲ制限スルノ必要アルヲ以テ、領有以來建網ヲ原則トシ、建網以外ノ漁具ヲ以テ鯨、鮪、鮭ノ漁業ニ従事スルコトヲ禁止セリ。今現在ノ建網漁場名ヲ列記スレハ左ノ如シ。

建網漁場名

漁獲物種類欄中、印無キモノハ、鯨、鮪、鮭ノ免許漁場ニシテ、○印アルモノハ鯨ノミノ漁場。
 漁場番號欄中、東一、東二、亞一、亞二、又ハ西一、西二等トアルハ東海岸、亞庭灣又ハ西海岸ニ於ケル一區漁業組合漁場、二區漁業組合漁場等。
 土トアルハ、土人漁場。
 試トアルハ、試驗漁場。
 試場トアルハ、試驗場漁場。

東 海 岸

漁場番號	漁場所在地	漁獲物種類	漁場番號	漁場所在地	漁獲物種類	漁場番號	漁場所在地	漁獲物種類
一〇一	遠内	鮭	一〇二	遠内	鮭	一〇三	遠内	鮭
一〇四	遠内	鮭	一〇五	遠内	鮭	一〇六	遠内	鮭
一〇七	遠内	鮭	一〇八	遠内	鮭	一〇九	遠内	鮭
一一〇	遠内	鮭	一一一	遠内	鮭	一一二	遠内	鮭

五 四	五 三	五 三	五 二	五 一	五 〇	四 九	四 八	四 七	四 六	四 六	四 五	四 四	四 三
ソ	チ	ソ	ベ	ノ	ノ	ホ	フ	ア	モ	ウ	ソ	グ	ボ
(輪)	(近)	(僧)	(邊)	(南)	(北)	(帆)	(婦)	(赤)	(元)	(東)	(東)	(東)	(東)
荒	幌	院	計	登	登	向	禮	浦	泊	類	宗	谷	禮
六 二	六 二	六 一	六 〇	五 九	五 九	五 八	五 七	五 七	五 六	五 五	五 五	五 五	五 五
キ	ソ	エ	オ	ロ	サ	フ	サ	シ	ホ	リ	イ	マ	シ
(南)	(宗)	(崎)	(押)	(魯)	(祭)	(北)	(榮)	(島)	(幌)	(里)	(北)	(東)	(中)
木	運	澤	江	禮	札	踏	濱	矢	奈	耶	板	白	濱
七 四	七 三	七 二	七 一	七 〇	六 九	六 八	六 七	六 六	六 六	六 五	六 五	六 四	六 三
ト	無	無	無	無	イ	ノ	ト	オ	オ	イ	ス	モ	モ
(遠)	(能)	(上)	(中)	(下)	(青)	(野)	(富)	(恩)	(落)	(煤)	(蝶)	(南)	(北)
幌	仁	伊	伊	伊	仁	幌	内	洞	帆	田	牛	入	入
八 九	八 八	八 七	八 六	八 五	八 四	八 三	八 二	八 一	八 〇	七 九	七 八	七 七	七 六
チ	エ	ホ	チ	シ	ミ	ミ	ヤ	オ	カ	ト	ハ	ヤ	ボ
(千)	(江)	(保)	(乳)	(節)	(皆)	(幌)	(矢)	(親)	(神)	(豐)	(鉢)	(愛)	(東)
保	瀬	多	根	句	別	遠	根	口	居	舞	月	耶	泊

一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一	一 一
チ	ハ	ニ	ソ	ツ	ネ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
(千)	(主)	(圓)	(用)	(根)	(輕)	(茂)	(茂)	(茂)	(茂)	(茂)	(茂)	(茂)	(茂)
賀	毛	傾	萬	富	帆	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂	呂
一 四	一 三	一 二	一 一	一 〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
タ	タ	ト	エ	ト	ヤ	ヤ	無	シ	ヤ	コ	ト	ノ	ナ
(氏)	(親)	(粒)	(富)	(遠)	(矢)	(矢)	(珠)	(仁)	(矢)	(此)	(東)	(能)	(内)
錦	株	ビ	岸	岸	花	落	磨	瀧	内	輪	童	登	太
二 八	二 七	二 七	二 六	二 五	二 四	二 三	二 二	二 一	二 〇	一 九	一 八	一 七	一 六
ウ	エ	ナ	ナ	ナ	エ	エ	エ	エ	タ	タ	タ	タ	タ
(畝)	(岸)	(親)	(植)	(床)	(中)	(中)	(東)	(菓)	(手)	(黒)	(父)	(多)	(植)
内	根	藻	柴	佐	耶	耶	耶	茸	牛	木	潮	加	知
四 二	四 一	四 〇	三 九	三 八	三 七	三 六	三 五	三 四	三 三	三 二	三 一	三 〇	二 九
無	ヤ	ス	チ	イ	サ	モ	ア	無	無	ニ	ト	チ	ハ
(宗)	(矢)	(相)	(釜)	(磯)	(東)	(茂)	(愛)	(小)	(鏡)	(新)	(東)	(茶)	(久)
司	向	馬	茶	牛	丹	博	博	取	毛	問	串	牛	茶

漁場番號	漁場所在地	類物漁種獲
九〇	ムラモルヌイ岬第一	○
九一	ムラモルヌイ岬第二	○
九二	白岩	○
九三	小満別	○
九四	泊	○
九五	赤岩	○
九六	茂志利	○
九七	胡蝶別	○
九八	遠	○
九九	野	○
一〇〇	辭	○
一一一	荒	○
一一二	和	○
一一三	内	○
一一四	洞	○
一一五	池	○
一一六	里	○
一一七	釜	○
一一八	奥	○
一一九	禮	○
一二〇	白	○
一二一	丈	○
一二二	初	○
一二三	小田井	○
一二四	具	○
一二五	雄	○
一二六	女	○
一二七	メ	○
一二八	伏	○
一二九	利	○
一三〇	多	○
一三一	赤	○
一三二	内	○
一三三	内	○
一三四	雨	○
一三五	雨	○
一三六	門	○
一三七	菱	○
一三九	石	○
一四〇	石	○

漁場番號	漁場所在地	類物漁種獲
一三六	南	○
一三七	南	○
一三八	泊	○
一三九	古	○
一四〇	問	○
一四一	大	○
一四二	利	○
一四三	内	○
一四四	内	○
一四五	持	○
一四六	南	○
一四七	南	○
一四八	南	○
一四九	南	○
一五〇	知	○
一五一	毘	○
一五二	七	○
一五三	七	○
一五四	小	○
一五五	石	○

漁場番號	漁場所在地	類物漁種獲
一五六	南	○
一五七	北	○
一五八	北	○
一五九	北	○
一六〇	北	○
一六一	北	○
一六二	北	○
一六三	北	○
一六四	南	○
一六五	南	○
一六六	南	○
一六七	南	○
一六八	南	○
一六九	南	○
一七〇	南	○
一七一	南	○
一七二	南	○
一七三	南	○
一七四	南	○
一七五	南	○
一七六	南	○
一七七	南	○
一七八	南	○
一七九	南	○
一八〇	南	○

二三〇	モ	諸口津	二三二	ト	斗運	二三七	ア	海馬島	二三〇	南古丹
二三一	ナ	北小澤	二三三	ア	斗運	二三八	ア	海馬島	二三一	南古丹
二三二	ナ	北好	二三四	ソ	斗運	二三九	ア	海馬島	二三二	南古丹
二三三	ナ	北好	二三五	ヨ	斗運	三四〇	ア	海馬島	二三三	南古丹
二三四	ナ	北好	二三六	チ	斗運	三四一	ア	海馬島	二三四	南古丹
二三五	ナ	北好	二三七	リ	斗運	三四二	ア	海馬島	二三五	南古丹
二三六	ナ	北好	二三八	ニ	斗運	三四三	ア	海馬島	二三六	南古丹
二三七	ナ	北好	二三九	ハ	斗運	三四四	ア	海馬島	二三七	南古丹
二三八	ナ	北好	三三〇	ヘ	斗運	三四五	ア	海馬島	二三八	南古丹
二三九	ナ	北好	三三一	ニ	斗運	三四六	ア	海馬島	二三九	南古丹
三四〇	ナ	北好	三四二	ハ	斗運	三四七	ア	海馬島	三四〇	南古丹
三四一	ナ	北好	三四三	ヘ	斗運	三四八	ア	海馬島	三四一	南古丹
三四二	ナ	北好	三四四	ニ	斗運	三四九	ア	海馬島	三四二	南古丹
三四三	ナ	北好	三四五	ハ	斗運	三五〇	ア	海馬島	三四三	南古丹
三四四	ナ	北好	三四六	ヘ	斗運	三五一	ア	海馬島	三四四	南古丹
三四五	ナ	北好	三四七	ニ	斗運	三五二	ア	海馬島	三四五	南古丹
三四六	ナ	北好	三四八	ハ	斗運	三五三	ア	海馬島	三四六	南古丹
三四七	ナ	北好	三四九	ヘ	斗運	三五四	ア	海馬島	三四七	南古丹
三四八	ナ	北好	三五〇	ニ	斗運	三五五	ア	海馬島	三四八	南古丹
三四九	ナ	北好	三五二	ハ	斗運	三五六	ア	海馬島	三四九	南古丹
三五〇	ナ	北好	三五三	ヘ	斗運	三五七	ア	海馬島	三五〇	南古丹
三五二	ナ	北好	三五四	ニ	斗運	三五八	ア	海馬島	三五二	南古丹
三五三	ナ	北好	三五五	ハ	斗運	三五九	ア	海馬島	三五三	南古丹
三五四	ナ	北好	三五六	ヘ	斗運	三六〇	ア	海馬島	三五四	南古丹
三五五	ナ	北好	三五七	ニ	斗運	三六一	ア	海馬島	三五五	南古丹
三五六	ナ	北好	三五八	ハ	斗運	三六二	ア	海馬島	三五六	南古丹
三五七	ナ	北好	三五九	ヘ	斗運	三六三	ア	海馬島	三五七	南古丹
三五八	ナ	北好	三六〇	ニ	斗運	三六四	ア	海馬島	三五八	南古丹
三五九	ナ	北好	三六一	ハ	斗運	三六五	ア	海馬島	三五九	南古丹
三六〇	ナ	北好	三六二	ヘ	斗運	三六六	ア	海馬島	三六〇	南古丹

第二節 種族及分布

水産生物ノ種類ハ、潮流及水温ノ如何ニ因リテ、強チ限定的斷定ヲ下ス能ハスト雖、從來ノ魚獲經驗ト、其ノ他ノ調査トニ基キ、大約百餘種ニ區分スルコトヲ得ヘシ。然レトモ本島ノ漁業タルヤ、尙過渡時代ニ在ルヲ以テ、之カ發達進歩ハ、同時ニ、漸次其ノ數ヲ増加スヘキハ疑ヲ容レヌ。況ヤ、近來暖流ノ影響著シク、往々、意外ノ漁族ヲ發見スルニ於テヲヤ。今、其ノ有用ナル水族ノ名稱、分布及漁獲期節ノ大要ヲ掲クレハ左ノ如シ。但シ期節ハ、各地漁獲調査等ヲ基礎トシテ定メタルモノナレハ、冬季、漁業ヲナサ、ル期間ニ就キテハ、不明ノ點尠カラス。

分族分布表

名稱	分布方面	期	節
鰩 鰩 獸	海 島	至乃 十六 一月	東海岸
海 豹 獸	本 島 一 圓	至乃 十六 一月	東海岸
海 豚 獸	西 海 岸 南 部 亞 庭 灣 海 馬 島	至乃 十六 一月	亞庭灣
海 豚 獸	本 島 一 圓	至乃 十六 一月	西海岸
座 頭 鯨	同	至乃 十六 一月	海馬島
兒 頭 鯨	同	至乃 十六 一月	海馬島
長 須 鯨	同	至乃 十六 一月	海馬島
白 長 須 鯨	同	至乃 十六 一月	海馬島
かとうぎめ	東 海 岸 北 部 亞 庭 灣 西 海 岸 海 馬 島	至乃 十七 一月	東海岸
あぶらぎめ	亞 庭 灣 西 海 岸	至乃 十六 一月	亞庭灣
かすべ	東 海 岸 南 部 亞 庭 灣 西 海 岸	至乃 十三 一月	亞庭灣
てらぎめ	東 海 岸 南 部 亞 庭 灣 西 海 岸	至乃 十五 一月	亞庭灣

第五章 水産

河豚	かははぎ	ひしこいわし	鯿	しゆしやむ	ちか	きり	いと	あめす	紅鯿	鱈	鮭	とさしらず	ふな	うぐい
本島一圓	同	西海岸中部	本島一圓	同	同	同	同	同	同	同	同	西東海岸、亞庭灣、	東海岸、多來加湖	西東海岸、亞庭灣、
至乃		至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	同	同	至乃	至乃	至乃	周	至乃	
十五		七四	七六	十四	十三	十五			八六	十八	八六	十五		
月月		初下旬	月月	月月	月月	月月			月月	月月	月月	年	月月	
至乃		至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	同	同	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	
十四		七四	六五	十四	十五	十四			八六	十八	八六	十五		
月月		初下旬	月月	月月	月月	月月			月月	月月	月月	月月	月月	
至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	同	同	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	
十四	八七	八七	七四	十五	十四	十五	十六		八五	十八	八六	十六		
月月	月月	月月	初下旬	月月	月月	月月	月月		月月	月月	月月	月月	月月	
至乃		至乃												
十四		七四												
月月		初下旬												

蝶	大	こ	こ	すけとうだら	鱈	は	ぎ	あ	ほ	鮎	鯖	鱒	か	そ
鮎	鮎	なご	まい			た	ん	ぶら	つ				じ	かい
本島一圓	西東海岸、亞庭灣、	本島一圓	西東海岸、亞庭灣、	同	本島一圓	亞庭灣、西海岸	亞庭灣、西海岸	西東海岸、南部、亞庭灣、	西東海岸、南部、亞庭灣、	西東海岸、南部、亞庭灣、	西東海岸、南部、亞庭灣、	同	同	本島一圓
至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃
十七	十六	十二	十二					十六	十九	十九	十六	九八	十三	十四
月月	月月	月月	月月					月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月
周	至乃	至乃	至乃	同	周	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃
八四	十四	翌年七月二	翌年七月二			十九	九七	十五	九五	十七	九七	十七	十三	十四
月月	月月	月月	月月			月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月
年	至乃	至乃	至乃	同	年	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	周	至乃
七五	十四	十三	十三			十九	九七	十六	十五	十九	十五	十六	十三	十三
月月	月月	月月	月月			月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月	月月
至乃		至乃						至乃	至乃			至乃	年	周
八六								八五	十九			十九		
月月								月月	月月			月月		年

の	が	海	蠣	海	北	に	す	蛸	あ	く	い	た
な	ぜ	鼠	扇	ひ	貝	し	る	み	み	る	ば	ら
な	ぜ	鼠	扇	ひ	貝	し	る	み	み	る	ば	ら
亞東	海東	海東	亞庭	亞庭	東海	西海	西海	亞庭	亞庭	東海	西海	本島
庭海	海岸	海岸	灣馬	灣馬	岸馬	岸馬	岸馬	灣馬	灣馬	岸馬	岸馬	島一
灣海	馬愛	馬愛	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	湖淵	圓
島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	島馬	
至乃	至乃		至乃	至乃	至乃					至乃		
七四	七四		七六	八六						八七		
月月	月月		月月	月月						月月		
至乃	至乃	周	至乃	周	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	至乃	同	周
七四	十三	十五	十五	十四	八六	十四	十六	七六				
月月	月月	年	月月	年	月月	月月	月月	月月				
			至乃	至乃	至乃	至乃	至乃				同	年
			九六	九七	九八	十四						
			月月	月月	月月	月月						
至乃	至乃	至乃	至乃	周	至乃	至乃	至乃	至乃				
七三	八三	八三	九六	年	八六	八六	八六					
月月	月月	月月	月月	年	月月	月月	月月					

其ノ他、海藻類ニハ、りしりい昆布、しを昆布、ゑなが昆布、いはのり、ふのり、つのみた、類ヲ

生ス。

以上ノ内、現ニ漁業トシテ、最モ收獲ノ豊富ナルハ鯨、鮪、鮭、ときしらず、蟹、鱈、すけとうだら、蟹、こまゐ、ちか、海扇、北寄貝、牡蠣、海鼠、蝦等ノ數種ナリ。其ノ他、多少ノ收獲アルモ未タ有望ノ域ニ達セス。

第三節 漁業

第一項 免許漁業

本島ニ於ケル免許漁業ハ、現在鯨、鮪、鮭ノ建網漁業ニシテ、此ノ鯨、鮪、鮭ノ漁業ハ、建網以外ノ漁具ヲ以テ、従事スルヲ得サルノ制度ナリ。

一、鯨漁業

本漁業ハ、本島漁業中第一位ヲ占メ其産額ハ、年々三百萬圓内外ナリ。

漁場ノ主ナルモノハ、西海岸ニテハ大穂泊以北、國境ニ至ル間。亞庭灣ニテハ、池邊置、貝塚間、東海岸ニテハ押江以北、鍛丸間トシ。其ノ最モ盛ナル地方ハ、西海岸飛岸、名寄間ニシテ、殆ント漁獲ナキ地方ハ西海岸西能登呂半島、中知床半島及北知床半島ヨリ東國境ニ至ル沿岸ナリトス。而シテ之ニ用ユル漁具ハ、三十九年ニハ露領時代ノ例ニ倣ヒ、建網一統ト曳網一統トヲ使用セシメシカ、四

十年ヨリ曳網ヲ廢シ、副網ノ制ヲ設ケテ、角網ニ統ヲ使用セシムルコト、シ、網ノ大サハ縦十三間横三十五間以内ニ制限シ、副網ト元網ノ距離ハ百五十間以内タルヘキコト、セリ。

網ノ敷設ハ海岸ヨリ沖合ニ向ヒ、垣網百間乃至四百間ヲ出シ、其ノ先端ニ軀網ヲ敷設スルモノトス、此ノ軀網ノ位置ノ水深ハ、普通五六尋ニシテ、深キモ八尋ヲ超ヘス。

漁船ハ磯船、平田、三半、保津等ヲ用ヒ、一漁場ノ使用數ハ、少キモ五六隻多キハ三十隻以上ニ達ス。而シテ漁夫ノ人數モ、建網一統ニ付、二十人ヨリ百人以上ニ及ヒ、等差アリ。

漁況ハ、三十九年ニハ十四萬二千餘石、四十年ニハ空前ノ豐漁ニシテ、二十三萬四千餘石ニ達シ、爾後、年ニ依リ増減アルモ、大正元年度ニ於テハ二十萬九千餘石ノ收穫ヲ爲セリ。着業漁場數ハ、三十九年度百二十四箇所ニシテ、年々増加シ、大正元年度ニハ二百六十二箇所ニ達セリ。今既往七ヶ年ニ於ケル收穫比較ヲ擧ケ、以テ其趨勢ヲ知ルニ便ス。

累年鯨收穫比較表

年別	海岸別		格收穫漁場收穫高價	格收穫漁場收穫高價	格收穫漁場收穫高價	格收穫漁場收穫高價					
	亞庭灣	東海岸					西海岸	計			
三十九年	元	一五、七五	二二、四三	一	三、五五	四九、四九	六	一三、四八	一七、七八	二四、一五	二四、一五
四十年	四	二二、三四	三六、五三	三	八、〇七	一三、六〇	八	二〇、〇五	三三、七〇	五二、七二	五二、七二

四十一年	四	三三、〇〇	三六、五三	四	八、三三	九、四三	九	一八、六〇	二九、五〇	一八、九	一九、七三	二九、五〇
四十二年	五	一五、四三	一〇、〇六	四	七、五七	九、八三	二	四、七〇	一、〇七	二、八	一六、六七	二〇、〇六
四十三年	四	三六、〇七	五〇、五八	四	二、三六	二、七、七〇	一	一、九	五、四九	三、三六	三、三六	三、三六
四十四年	五	三、九〇	四七、五五	三	二、五九	三、八四	一	一、四	〇、六九	一、〇五	二、六	二、六
大正元年	五	元、六四	五、〇三	三	三、九二	五、八二	一	四、八	六、三	五、四	二、三	二、三

漁業經營ノ法ハ、經營者及其ノ資力ノ多少ニ依リ大ニ趣ヲ異ニセリ。本島鯨漁業者ハ、北海道ニ比シ、一漁場ノ收穫多キヲ以テ、規模隨テ大ナルニ依リ、有資力者ノ經營スル者尠カラス。今、近年ノ鯨建網漁場ノ經費ヲ見積レハ左ノ如シ。

建網漁業創業費

鯨二千石收穫漁場ニ就テ

建築費

項	目	個	價	格
番	屋	一	一、九八〇	〇〇〇
網	付	一	三〇〇	〇〇〇
倉	倉	一	三〇〇	〇〇〇
雜	倉	一	一、〇八〇	〇〇〇
粕	倉	一	一、〇八〇	〇〇〇

項目	數量	價格
春 鯨 鯨 鯨 鯨	八	五六・〇〇〇
蓋 胴 及 筵 網 流 釜	二〇	二九四・〇〇〇
	三〇	四〇〇・〇〇〇
	一〇	一二〇・〇〇〇
	一	一八〇・〇〇〇
	五	一八〇・〇〇〇

製造器具費

計	品料繩絲釘板類繩	價格
其網ア越船歩タ實ロ	五〇〇	五〇・七〇〇
他 後	一七〇	一七・〇〇〇
染バ	二五〇	二五・〇〇〇
諸 綿	三四〇	三四・〇〇〇
	二四〇	二四・〇〇〇
	三五〇	三五・〇〇〇
	三六〇	三六・〇〇〇
	二一〇	二一・〇〇〇
	一五〇	一五・〇〇〇
	一	三〇・〇〇〇
	六	六二・〇八七

項目	個數	價格
三 磯 早 友 車 船 船	一	二、六四〇・〇〇〇
半 船 擡 擡 擡	三	七五・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	二〇	五四・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	六	三六・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	二	九・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	二	一二六・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	二	六一七・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	四	一、八三六・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	七	七〇・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	四	四四・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	二	二五二・〇〇〇
網 網 網 網 網 網	六	一七七・〇〇〇

漁船漁網漁具費

項目	個數	價格
草 廊	二	一、〇〇〇・〇〇〇
小 屋 下	二	一〇〇・〇〇〇
計	二	四、七六〇・〇〇〇

其他諸器具	計	110	46,000
其他諸器具	計	2,356,000	

雜具費

項目	數量	價格
鍋大小取合	八	八・〇〇〇
鐵瓶	一〇	八・〇〇〇
秤	二	一・二〇〇
斧	二	一・六〇〇
大鋸	一	一・六〇〇
唐工	一	二・〇〇〇
ス工	三	一・七〇〇
炊事	一	一・四〇〇
其他	一	三・〇〇〇
雜道	一	一・七〇〇
器具	一	一・四〇〇
器具	一	五・五〇〇
計		二〇六・〇〇〇
總計		一三、五三〇・七〇〇

二、鱈漁業

鱈漁業ハ、鱈漁業ニ亞ク、重要漁業ニシテ其漁場ハ鱈漁場ニ反シ、東海岸ヲ主トス。就中主ナル漁場ハ、東海岸幌内川ヲ中心トシ、多來加以南新間ニ至ル間、及内淵川ヲ中心トセル、元泊以南落帆ニ至ル間トス。

漁具ハ、鱈建網ト同型ナルモ、近來内部ノ構造ニ改良ヲ加ヘ、魚族ノ脱逸ヲ防クノ方法ヲ講セリ。網ノ敷設方法ハ、鱈網ト大差ナク、漁船ハ鱈ヲ主トセル漁場ニアリテハ、四五隻ニ過キスシテ、漁夫數ハ一漁場二三十人ヲ使用セリ。

漁況ハ、三十九年ニ四萬七千餘石ヲ漁獲シ、空前ノ豊況ヲナシ、其ノ後、年ニ依リ豊凶アルモ、未ダ總收穫高ニ、著シキ減耗ヲ見サルハ、年々着業漁場數ノ増加セルト、漁業方法ノ發達セルトニ依ル。今既往七ヶ年ニ於ケル漁獲ノ比較ヲ舉クレハ左ノ如シ。

累年鱈收穫比較表

年別	海岸別	收穫漁場數	收穫高價	格
三十九年	亞庭灣	三	一〇、六六五	三、五五〇
	東海岸	六	三、九二五	四、八〇〇
四十年	亞庭灣	三	五、三三六	五、四六〇
	東海岸	三	八、九八〇	八、九八〇
計	亞庭灣	三	一六、〇〇〇	一、六〇〇
	東海岸	九	一二、九〇五	一、三三〇
計		一二	二八、九〇五	二、九三〇

年	西	東	海	亞	計
四十一年	一、七三三	六〇	四〇、四五六	一、七三三	四三、三二一
四十二年	三、七三〇	一〇一	一六、〇五七	三、七三〇	四三、五七〇
四十三年	三、七九七	一〇一	一六、〇三二	三、七九七	四三、五七〇
四十四年	三、七九七	一〇一	一六、〇三二	三、七九七	四三、五七〇
大正元年	二〇、〇七五	一〇三	一八、七六五	二〇、〇七五	四〇、九一三

一一一

鮭漁業ノ經營ハ、多クハ鯨漁業ヲ兼營スルヲ以テ、鯨漁期ヲ終レハ、漁夫數ヲ減シテ本漁業ニ從事ス、而シテ本漁業ノミニ從事スル漁場ニ在テハ、其ノ規模小ナルヲ以テ、一期不漁ニ遭遇スルモ、其ノ影響ハ鯨漁業ノ如ク甚シカラス。

漁獲物ハ皆鹽藏シテ内地ニ移出スルモ、價格年々低落ノ傾アルヲ以テ、近來製造ニ改良ヲ加ヘ、或ハ冷蔵輸送ヲ試ム等、價格ノ向上ヲ圖ルモノ少カラス。

三、鮭漁業

本島ノ鮭ハ、夏季ト秋季トノ二期ニ漁獲セラレ、前者ヲ夏鮭又ハ時しらずト稱シ、後者ヲ秋あぢト唱フ。夏鮭ノ漁期ハ、鮭ト同期ニシテ、秋鮭ノ漁期ハ、鮭ノ終季ヨリ十一月上旬ニ至ル。

鮭ハ其ノ分布極メテ狭ク、夏鮭ハ東海岸敷香附近ヲ主トス。該地方ニアリテハ、一漁場ニシテ漁獲高四五百石ニ達スルモノアルモ、其ノ他ノ地方ハ甚タ稀薄ナリ。秋鮭ハ西海岸南部地方ヲ主トシ、南名好附近ニ於テハ、一漁場五百石以上ヲ漁獲スルモノアリ、同地方ニ於ケル前途有望ノ漁業トナレリ。今

既往四年間ノ收穫比較ヲ擧クレハ左ノ如シ。

累年鮭收穫比較表

年	亞		東		西		計
	收穫	格	收穫	格	收穫	格	
四十二年	三	八六	六	四、四七	三、三六	五〇、四九〇	八、三二
四十三年	三	六九	六	四、五七	三、三七	四、八四四	九、〇〇〇
四十四年	三	七七	六	四、五七	三、三七	四、八四四	九、〇〇〇
大正元年	三	四四	六	五、二六〇	二、六	一〇、五七〇	二、七九

本漁業ノ經營ハ、鮭漁業ト殆ト同一ニシテ、秋鮭ヲ主トセル漁場ニアリテハ、從業期間ヲ約二箇月延長セルニ過キス、皆鮭ト同シク、鹽藏シテ移出スルモ、西海岸南部ノ秋鮭ハ交通ノ便ト、時季宜シキトヲ利用シ、冷蔵汽船ニ依リテ、小樽地方ニ生魚ノ儘移出シテ、爲ニ漁業者ノ利スル所少カラスト云フ。

第二項 雜漁業

一、鱈漁業

鱈ハ露領時代ヨリ、既ニ其ノ饒富ナルコトヲ認メラレシモ、當時ハ纔ニ鯨漁業者ノ食料ニ供スルニ

過キサリキ。然ルニ領有後、利尻、禮文及其他ノ地方人、川崎船ニ乗リ込ミテ渡來シ、鱈延繩ヲ以テ、鱈漁業ヲ經營スルモノ續出シ、今ヤ五十萬圓以上ノ産額ヲ收メ、鱈鱈ニ亞クノ重要漁業トナレリ。初メ西海岸ノ吐鯤保附近沖合ヨリ「有部」附近沖合ヲ恒棲地トシ、比較的近距离ニ於テ撈獲セラレ、三十九年ノ如キハ非常ノ豐漁ナリシカ、翌四十年該魚族深處ニ遷移シタルヲ以テ、遠距離ニ出漁セサルヘカラサルニ至リ、天候モ亦前年ニ比シテ平穩ナラサルコト多ク、爲ニ漁撈上一大打撃ヲ受ケ、俄ニ企業シタル無經驗ノ漁業者ハ、豫定ノ收獲ヲ擧クルヲ得ス、非常ノ損失ノ結果、四十一年ニ至リテハ、實際着業者ノ數、大ニ減シ、一時本業ニ一頓挫ヲ來セリ。サレト、元來魚族ノ減耗シタルニ非サルヲ以テ、入稼漁業者ハ、従前ノ通り着業シテ、自カラ鱈漁場ノ根據モ定マリ。漸次頽勢ヲ挽回セリ。現今ニ於テハ、眞岡附近ヨリ南方「藻白」ニ至ル間ヲ主産地トシ、年々一漁船ニ付テノ平均漁獲ハ千二百東内外ニ上ホリ、收獲ニ大ナル不同ヲ來サ、ルニ至レリ。尙西海岸泊居、北名好、安別附近及亞庭灣内、東海岸富内、榮濱、元泊、散江等各地沖合ニモ棲息シ、從テ着業者ノ數モ尠カラサル有様ナレハ、其ノ分布ハ殆ト、本島全沿岸ニ互ルモノト謂フヘシ。而シテ主ナル製品タル棒鱈ハ、四十三年西海岸南部水産組合ヲ設置シ、製品ノ検査ヲ施行シ、島外ニ移出シテ以來、粗製濫造ノ弊、一掃セラルト共ニ、樺太産ノ聲價頓ニ揚リ、平均價格二割以上ノ昂騰ヲ見ルニ至レリ。尙鹽鱈モ亦近ク製造上改善ヲ加ヘ、其ノ販路ヲ海外ニ擴張スルノ計畫アリ。サレハ本漁業ノ前途頗ル有望ナルヘキヲ信ス。

大正元年度ニ於ケル鱈ノ産額八十一萬六千餘圓ニ及ヘリ。

二、鰈漁業

鰈ノ種類ハ、數種ニ互リ、全沿岸之レカ生棲ヲ見サルナク、雜漁業中鰈ニ次ケル主要ノ漁業ナリ。漁具トシテハ、配繩、手繰網ノ二種トス。鱈釣漁業者ハ春秋兩漁期ノ間ニ於テ行フモ七八ノ二ヶ月間ニ於テ、一隻ノ漁獲平均百二十石ニ達スルモノアリ。漁獲シタル鰈ハ、全部搾粕製造ニ供セラル。大正元年度ニ於ケル鰈粕二萬一千九百石、價格二十七萬六千二百二十七圓ト稱ス、又以テ其ノ富饒ノ一斑ヲ窺フニ足ラン。

三、昆布漁業

昆布ハ本島産及海馬島産ニ分ツ。共ニ重要水産物ノ一ニシテ、其ノ分布廣ク、有用ノ種類、亦尠ナカラス。其ノ主ナルモノハ、りしりい昆布、しを昆布、系なが昆布等トス。りしりい昆布ハ、西海岸ニ於テハ、遠知志岬ヨリ有部岬ニ至ル沿岸ニ産シ、其ノ最モ良ク繁生シ且ツ品質佳良ナルハ、吐鯤保ヨリ、床丹ニ至ル沿岸トス。

海馬島産ハ、其ノ發育良好ニシテ品質最モ優良ナリ。亞庭灣ハ、池邊濱、大泊間ヲ主トシ、其ノ左右ニ多少分布セラル、モ、東海岸ニハ全ク之ヲ認メス。しを昆布ハ西海岸吐鯤保以北、國境附近ニ至ルマテ繁茂シ、其ノ他各地方ニモ廣ク分布ス。系なが昆布ハ、西海岸南部地方ニ産シ、自主附近ヲ以

テ主産地トス。

本漁業ハ、他ノ雜漁業ト異ナリ、容易ニ採取セラル、ヲ以テ、露領時代ニ於テモ、「セメノフ」商會ノ獨占事業ニ屬シ、西海岸主産地ニ限リ、清韓人ヲ使役シテ採收シ、其ノ收穫高ハ、三十二年ヨリ三十六年ニ至ル五箇年間、年平均五五百石ノ收穫ヲ示セリ。其ノ後三十七八ノ兩年間ハ休業ノ状態ニアリシモ、三十九年ニ至リ、頓ニ其ノ産額ヲ増加シ、實ニ十二萬七千石ノ收穫ヲ見タリ、其ノ後又、雜漁業者ノ定着スルモノ、増加スルニ從ヒ、漸次其ノ收穫ヲ増シツ、アリ。

其ノ製造モ、主産地タル地方ヲ除キテハ、大部分、粗製濫造ニ流レ未タ一般ニ價格ノ向上ヲ見ルニ至ラサリシヲ以テ、四十三年以降、西海岸南部水産組合ニ於テ製品ノ検査ヲ勵行シ、其ノ結果、検査濟ノモノハ從來ノモノニ比シ、三割以上ノ高値ヲ保チ、一般平均價格ニ於テハ、百石ニ付七百四十圓ノ相場ヲ示スニ至レリ。

大正元年度收穫高ハ、十六萬二千五百二十五駄ニシテ、此ノ價格十一萬七千三百三十三圓トス。

四、蟹漁業

本島ニ於テ漁獲セラル、蟹ハ「たらばがに」ト稱スル一種ニシテ、主トシテ西海岸ノ野田寒以南ニ産ス。漁具トシテハ、多クハ底刺網ヲ使用ス。延網、手繰網等ニ據ルモノアレトモ、其ノ數、極メテ少シ。四十二年以降、罐詰業勃興ノ結果、該漁業ノ隆盛ヲ來セシヲ以テ、濫獲ノ弊ニ陥ランコトヲ恐レ

蕃殖保護ノ爲、一般ニ雌蟹ノ漁獲ヲ禁止シ、刺網許可人員ヲ制限シ、七月一日ヨリ八月三十一日迄ヲ禁漁期トスル等保護ノ方法ヲ設ケ、漁利ノ維持ヲ圖レリ。

五、海鼠漁業

海鼠漁業ハ三十九年、亞庭灣及海馬島ニ於テ行ハレシカ、蕃殖力大ナラサルヲ以テ、次第ニ減少シ、現今ハ此等ノ地方ニ於テ、突取ノ方法ニヨリテ、僅ニ漁獲シ得ルニ過キス。大正元年度ノ漁獲高ハ海參トシテ、一千七百五十斤、價格一千〇六十七圓五十錢ニ止マル。

六、海扇及北寄貝漁業

海扇ハ、主トシテ亞庭灣ニ産ス。三十九年來桁網ヲ使用シテ盛ニ漁獲セシ爲、目下ノ漁場ハ、大ニ衰微シ、大正元年度ノ漁獲乾上二千斤、此ノ價格一千圓ニ過キス。將來新漁場ノ發見セラル、ニ非ラサレハ、大ナル發展ヲ期シ難シ。北寄貝ハ海扇ノ如ク、桁網ヲ以テ、漁獲セラル、灣内及西海岸名寄附近ニ産シ、七、八、九ノ三ヶ月、最モ盛ニシテ、乾燥品八萬五千五百斤、價格二萬二千二百三十二圓ニ及フ。此ノ漁場ハ比較的廣大ナルヲ以テ、相當ノ發達ヲ期シ得ヘシ。

七、捕鯨業

本島沿岸ハ、鯨族豊富ニシテ、殊ニ兒鯨ノ一種「がんけ」ト稱スルモノ極メテ多シ。南部ニ於テハ、座頭、長須等ノ來游ヲ見ル。露領時代ヨリ、既ニ捕鯨ヲ開始セシモノアリシモ、設備ノ不完全ト交通

ノ不便トノ爲、其ノ發達ヲ見ルヲ得サリシカ、四十三年以來、大日本水産會社ハ、亞庭灣ノ東岸ニ位
 スル内音ヲ根據地トシテ、諾威式捕鯨ヲ開始シ、同年ニハ四十餘頭ヲ捕獲セシモ、大正元年ニハ設備
 ノ整頓ト共ニ捕獲數五十八頭ニ上ホリ、且ツ價格ヲ向上シ得タルヲ以テ、事業ノ基礎定マリ、漸ク世
 人ノ注意ヲ惹クニ至レリ。

第三項、臘肭獸

海豹島ハ我邦唯一ノ臘肭獸蕃殖場ニシテ、米領ブリピロツブ群島及露領コンマンドルスキー群島ト
 共ニ、北太平洋ニ於ケル三大棲息場トシテ并ヒ稱セラル。該島ハ北知床岬ノ南端約十哩ノ海中ニ孤立
 シ、北東ヨリ南西ニ延長シ、幅員約一町、長約六町ニ過キス。北方ノ大部ハ水面上五十尺餘ノ岩礁ヨ
 リ成リ、頂部ハ平坦ニシテ、其ノ海濱ハ勾配ナキ草原又ハ砂礫地ナリ、露領時代ノ初期ニアリテハ、
 年々數萬頭ノ上陸ヲ見タルモ、臘肭獸獵業者ノ激增シタルト、一方、蕃殖保護ノ實舉カラサリシ爲、
 濫獲甚シク、爲ニ非常ノ減少ヲ來セリ。三十八年本島ノ我領有ニ歸スルヤ、直ニ獵獲ヲ禁止シ、尋
 テ之カ繁殖狀態ヲ調査シ、翌三十九年ヨリ年々監視員ヲ駐在セシメテ、専ラ臘肭獸蕃殖保護及調査ニ
 從事セシメタル爲、年々逐フテ分娩數及上陸數ヲ増加シ且ツ死兒率ヲ減シ、其ノ效果歷々トシテ見ル
 ヘキモノアリ。本年度ノ如キハ實ニ一萬二千頭ニ上リタリ。今其ノ狀況一斑ヲ表示スレハ左ノ如
 シ。

海豹島臘肭獸蕃殖狀態各年比較表

年度	項目	三十九年度	四十年	四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年度	備考
	上陸初期	牝七月五日	六月十四日	六月十六日	六月十八日	六月十八日	六月十七日	牝六月二十日	監視員ノ出張ハ流水ノ爲之レ 以上ニ早クスルヲ得メニ 着島ノ際ハ常に牝獸數十頭ノ 上陸ヲ見ル 本年ノ分ハ未ダ報告ニ接セス 十月十日 十月二十一日 日以降
	上陸最多	二五〇〇	四〇五〇	五五二〇	六五九一	六八五六	八九〇一	八九〇一	
	退却期	十月中旬	九月下旬	九月三十日	十月十四日	十月十九日	十月二十三日	十月十日	
	生兒數	二七八頭	一、一九〇	一、六〇〇	一、六五〇	一、八〇〇	二、七〇〇	二、三〇〇	
	死兒數	五〇頭	九〇	八〇	五三	四四	六九	六九	
	死兒率	一割八分弱	七分六厘弱	五分三分二厘強	二分四厘強	二分六厘弱	二分八厘弱	四十四年度ハ十月十四日迄	
	分娩時期	自七月五日自八月三日	自六月廿九日自八月三日	自六月廿六日自八月六日	自六月廿六日自八月十日	自六月廿七日自八月十日	自六月廿七日自八月七日		
	交尾期日	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不		
	牝獸數	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不		
	牡獸數	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不	詳不		
	牝獸數	約三千頭	約三千五百頭	約三千五百頭	約三千八百頭	約三千八百頭	約四千頭		
	牡獸數	約千頭	約千五百頭	約千五百頭	約千三百頭	約千三百頭	約千五百頭		

四十四年英、米、露ト條約ノ結果、大正元年度之カ獵獲ニ着手セシモ、或事情ノ爲、之ヲ中止セリ
 ト雖、本年度ハ五百五十頭ヲ撲殺セリ。

第四節 水産物製造

本島海産物ノ製造業ハ、其ノ種類未タ多カラス且ツ其ノ方法ハ未タ幼稚タルヲ免レスト雖、近來水産試験場ニ於ケル試験ノ結果及水産組合等ノ製品検査ニ依リ、漸次其ノ面目ヲ一新スルニ至リタルハ欣フヘキ現象ナリトス。

一、鯨製造

鯨ハ從來搾粕ニノミ製造セシモ、勞銀其ノ他ノ便宜ヲ有スル漁場ニ在リテハ、近來之ヲ身缺鯨ニ製シ副産物トシテ、鱈、白子、胴鯨、笹目、鱈等ヲ製造加工シ、漸次食料品ニ製造スルノ傾向ヲ生シタルト共ニ、一面鯨粕及鱈ノ如キハ、特ニ改良ヲ加ヘテ精品ヲ産出スルニ至リ、之ヲ平均スレハ、北海道産ヲ凌駕ス。

鯨油モ亦其ノ製造ニ注意スルノ結果、採油量ノ増加ヲ來タシ、品質モ一般ニ向上シ、從來ハ搾粕百石ニ對シ、約六石内外ナリシモノ、近年七石以上ヲ採油シ得ルニ至レリ。

鹽鯨ハ多年水産試験場ニ於テ試製シ、四十三年支那へ試賣ノ結果、其ノ販路ノ有望ナルヲ確メ、十四年ニ於テハ四百餘石ノ試賣ヲ爲シ、四十五年度以降、毎年當業者ニ製造ヲ奨励シ、水産組合ヲ組織セシメ、三井物産會社ヲ一手販賣ト定メ、約三千五百石ノ製品ヲ輸出セリ。

二、鱈製造

鱈、鮭製造ハ、依然トシテ舊來ノ鹽藏法ヲ踏襲スルモノ多キモ、近來製法ニ注意シ、箱詰トシテ輸出シ又ハ鹽水漬トシテ桶漬ニ製造スルモノアリテ、一般ニ改良ノ傾向ヲ示セリ。

罐詰製造業モ漸次勃興セルモ、多クハ蟹罐詰製造ノ副業ニシテ、専門ニ従事スルハ、東海岸及大泊地方ノ數箇所ニ過キス。

鹽鱈、鹽鮭ノ副産タル筋子ノ鹽藏ハ、在來ノ式ニ從ヒ、漸次用鹽及製造法ニ改良ヲ加フルモノアリ、或ハ又露國式筋子(イクラ)製造ヲ指導セル結果、之レカ製造ヲ試ムルモノアリ。

鱈節製造ノ如キモ亦、一兩年前ヨリ之カ試製ヲ爲シ、今年度東海岸ニ於テ二、三該事業ノ計畫ヲ爲ス者生スルニ至レリ。

三、棒鱈及昆布製造

鱈及昆布ハ鱈、鮭ニ次クノ重要水産物ニシテ、鱈ハ主トシテ棒鱈ニ製シ、昆布ハ多クハ長切昆布ニ製造スルモ、動モスレハ、粗製濫造ニ流レ、價格モ北海道産ニ比シ、甚シキ逕庭アルヲ以テ、其ノ主産地タル西海岸同業者ヲ促シテ、水産組合ヲ設置セシメ、鱈及昆布ニ對シ、嚴密ナル検査ヲ勵行セシニ、其ノ結果良好ニシテ價格騰貴シ、市場ノ信用ヲ高ムルニ至リタルハ前ニ述ヘタル所ノ如シ。

灣内ニ於テモ四十五年水産組合ヲ組織シ、昆布其ノ他ノ検査ヲ實行セリ。

鱈ハ棒鱈ノ外、開乾鱈、鹽鱈ノ食料品ニ製シ、肥料トシテハ身粕及骨粕ニ製造ス。昆布ハ駄昆布、花折、細昆布等ニ製セラル。

四、鱈肝油製造

鱈油ハ棒鱈製造ノ副産物タル、肝臓ヨリ製造セラル、其製油所ハ主トシテ西海岸ニ在リ、殊ニ本斗真岡及野田塞附近ヲ多シトス、而シテ近來著シク其ノ數ヲ増加シタリ。是等ノ製油ハ工業油ヲ主トシ、罕ニ藥用肝油ノ製造ヲ見ルノミ。而シテ肝臓一函(石油空箱)ヨリ製出スル工業油ハ、八升乃至一斗ニシテ、肝臓一函ノ價格四十錢内外ナルニ對シ、工業油一箱ノ價格ハ三圓四十錢内外ナリ。最近ニ於ケル工場數及製油高ヲ示セハ左ノ如シ。

工場數	製油高
工業用油	藥用油
八 四 箇 所	一五、三四〇箱
	七二三箱

五、其ノ他ノ製造業

蟹ハ罐詰ノ外、乾製及魚煎餅ヲ製スルモ、其ノ數尙微々タルモノトス。海苔ハ各沿岸地ニ於テ、多少乾製セラル、モ、淺草海苔ニ製造スルハ海馬島ノミ、未タ一般ニ普及スルニ至ラス。而シテ佃煮トシテハ、四十三年散江ニ於テ罐製シタルモ、之カ輸出量ハ僅少ニ過キサリキ。

海參、乾蝦、淡菜、乾北寄貝、乾海扇、乾牡蠣ノ如キモ地方ニ依リ年々多少輸出スルモノアリ。其ノ他、蝶粕、雜粕ノ如キハ、産額夥シキモノアリト雖、製造法ニ至テハ、從來ノ方法ニ異ナラス。

第五節 水産試験場

水産試験場ハ、四十一年十月、始メテ西海岸ノ樂磨ニ設置ス、其ノ設備及試験ノ概要ヲ記セハ左ノ如シ。

第一項 設備

一、魚粕製造機

「アメリカカンブロセス」會社ノ製作ニ係レル蒸熱罐(圓筒形蒸熱機ニシテ高壓蒸汽ヲ以テ蒸熱ス)、壓搾機(「チユート」及螺旋壓搾器ヨリナリ、「チユート」ニテ、自壓ニヨリ水分ヲ去リ、螺旋壓搾器ニテ強壓セラル)及乾燥機(直火乾燥機ニシテ石炭ヲ燃燒シ、其ノ熱氣ト乾燥空氣トニヨリ乾燥ス)ノ三部ヨリ成ル。而シテ三部相聯結セルヲ以テ、一方、蒸熱罐ニ原料ヲ供給スレハ、自動的ニ蒸熱シ、壓搾シ乾燥シ、完成シタル製品トナリテ、他端集聚室ヨリ吐出サレ、一晝夜二萬七千貫ノ鱧ヲ處理シ、優ニ百二十石ノ粕ヲ製造スルコトヲ得。動力ハ之ヲ八十馬力ノ汽機ニ仰キ、百二十五馬力ノ汽罐ヲ置キテ一方蒸熱機ニモ蒸汽ヲ供給ス。

二、鹽藏庫

第一號庫及第二號庫ノ二棟ヲ設ク。第一號庫ハ氷藏裝置ヲ有シ、夏季ト雖室内ノ溫度ヲ攝氏四十五度以下ニ保タシムルコトヲ得、積込容器ニハ桶ヲ具ヘ、一桶ノ容積ハ七十立方尺ニシテ、總數二十個全部一時ニ、生鯧一萬貫ヲ漬込ミ得ヘシ。二號室ハ氷藏裝置ナキモ、外氣ハ之ヲ遮斷シ得ルノ構造ニシテ、常ニ室内ヲ冷濕ニ保タシムルコトヲ得、漬込容器ニ木槽六十個ヲ使用シ、全部地下室ニ併列ス一個ノ容量生鯧一千二百貫ニシテ、一時ニ生鯧七萬二千貫勿ノ漬込ヲナシ得ル裝置ナリ。

三、煙製場

煙製場ハ二階建ノ建築ニシテ、周圍ニ廣キ廊下ヲ繞ラシ、原料ノ陰乾、并ニ製品放冷ノ場所ニ充ツ中央ニ五個ノ煙室アリ、一室ニ、鮭ニ在テハ六百乃至七百尾、鯧ニ在テハ三千尾以上ヲ收メテ、煙乾スルコトヲ得。室ノ構造ニ二様アリ、一ハ階上ニ原料ヲ懸吊シ、下床ニ煙材ヲ置キ、直接魚體ニ煙烟ヲ供給ス。他ハ煙烟ヲ室外ヨリ導キ、下床ニ開口セシメ、稍冷却セシメテ、魚體ニ供給スルノ裝置トス。前者ハ溫煙製造ニ適シ、後者ハ冷煙製造ニ適ス。

四、氷藏庫

氷藏庫ハ二階建、草葺、周壁二重、外壁ハ板張ニシテ、盛土ヲ以テ覆ヒ、内壁ハ鐵板張ニシテ、兩壁間ニ、氷ヲ藏シ、尙室内所々ニ氷ヲ收ムル圓筒ヲ置キ、室内ノ溫度ハ攝氏一度乃至二度ニ保ツヘシ。

五、調理場

調理場ハ、普通家屋ニシテ、床ヲ板張トシ、中央ニ用水ヲ導キ、一方ニ鹽倉ヲ置キテ、附近ニ煮釜及焙乾用竈ヲ排置ス。

六、附屬建網漁場

所在ノ兩隣接地、即チ「矢來」及「島泊」ニ附屬ノ建網漁場ヲ置キ、漁業者ヲシテ、漁撈ヲ請負ハシメ其漁獲物、即チ鯧、鱒及鮭ヲ以テ、試驗ノ原料ニ供ス。

第二項 試驗事項及成績

試驗事項中著シキモノ、成績ヲ擧クレハ左ノ如シ。

一、鯧搾粕製造試驗

前記製粕機ヲ使用シ、四十二年度ヨリ試驗ヲ開始セリ、同年度ハ薄漁ノ爲、充分ノ試驗ヲナス能ハス、僅ニ機械各部ノ運用試驗ヲナシタルニ過キス。四十三年度ニ於テハ、進ンテ經濟的試驗ニ着手シ四十四年度ニ於テ、稍見ルヘキ結果ヲ得タリ。

鯧ハ一時ノ漁獲甚タ饒多ニシテ、乾場ノ狹隘ナル漁場、又ハ雨天續キ等ノ場合ニアリテハ、多大ノ漁獲物ヲ、徒ニ腐敗セシメ、若クハ粗惡ノ製品ヲ出スノ已ヲ得サル等、其損害夥シキモノアリ。該機械ハ此等ノ弊ヲ一掃スル上ニ於テ、特ニ顯著ナル效果ヲ有スルノミナラス、製品ノ品質ヲ一定ナラシ

メ、且ツ製品ヲ粉末状態タラシムルハ、實ニ本機ノ一大特色ナリトス。換言スレハ機械粕ハ品質、色澤等、一定シタル製品ヲ得ルノミナラス、乾燥充分ナルカ故ニ、夏季ヲ經過シテ貯藏スルモ、虫害及歩減極メテ尠シ。又製品ノ形狀、粉末状態ナルカ故ニ、使用者ニ於テ、粉碎ノ手數ヲ省略スルヲ得ヘシ。而シテ副産物タル油ノ量モ、亦其分離器完全ナルカ爲、普通粕製造ノ際ニ比シ、遙ニ多量ナリ。嘗テ四十二年ニ製造シタル機械粕ヲ、愛知縣農事試驗場ニ托シ、實地施肥試驗ヲナシタルニ、好結果ヲ得タリ。即チ大麥ニ施シテ一反歩ノ收穫、普通粕五十六貫匁ニ對シ、機械粕ハ七十四貫匁ニシテ、十八貫匁ノ增收ナリ。

二、鹽藏試驗

鯧、鱈及鮭ノ鹽藏試驗ハ、毎年之ヲ施行シ、各種ノ製造方法ニ就キ、研究ヲ重ネ、四十四年度ヨリ、鱈鹽藏試驗ヲモ開始セリ。鱈鹽藏試驗ハ、重要ナル試驗ノ一トシテ、歐米各國ノ方法ヲモ參酌シ、各種ノ製法ヲ研究シタリ。大正元年度ニ製造シタル鹽鯧ハ、二千兩餘(一兩ノ容量百五十斤)ニシテ、全部、支那及朝鮮ノ方面ニ試賣セリ。

鮭、鱈ノ鹽藏品ニ付テハ、各種、魚類ノ鹽藏法及露國ニ於ケル製法等ヲ參酌シ、試驗ノ結果、二三善良ノ方法ヲ得タレハ、目下當業者ノ指導ニ努メツ、アリ。

鮭卵ノ露國式鹽藏品(イクラ)ニ付テモ亦當場ニ於テハ、露國ノ製法ニ倣ヒ、試驗ノ結果、良品ノ製

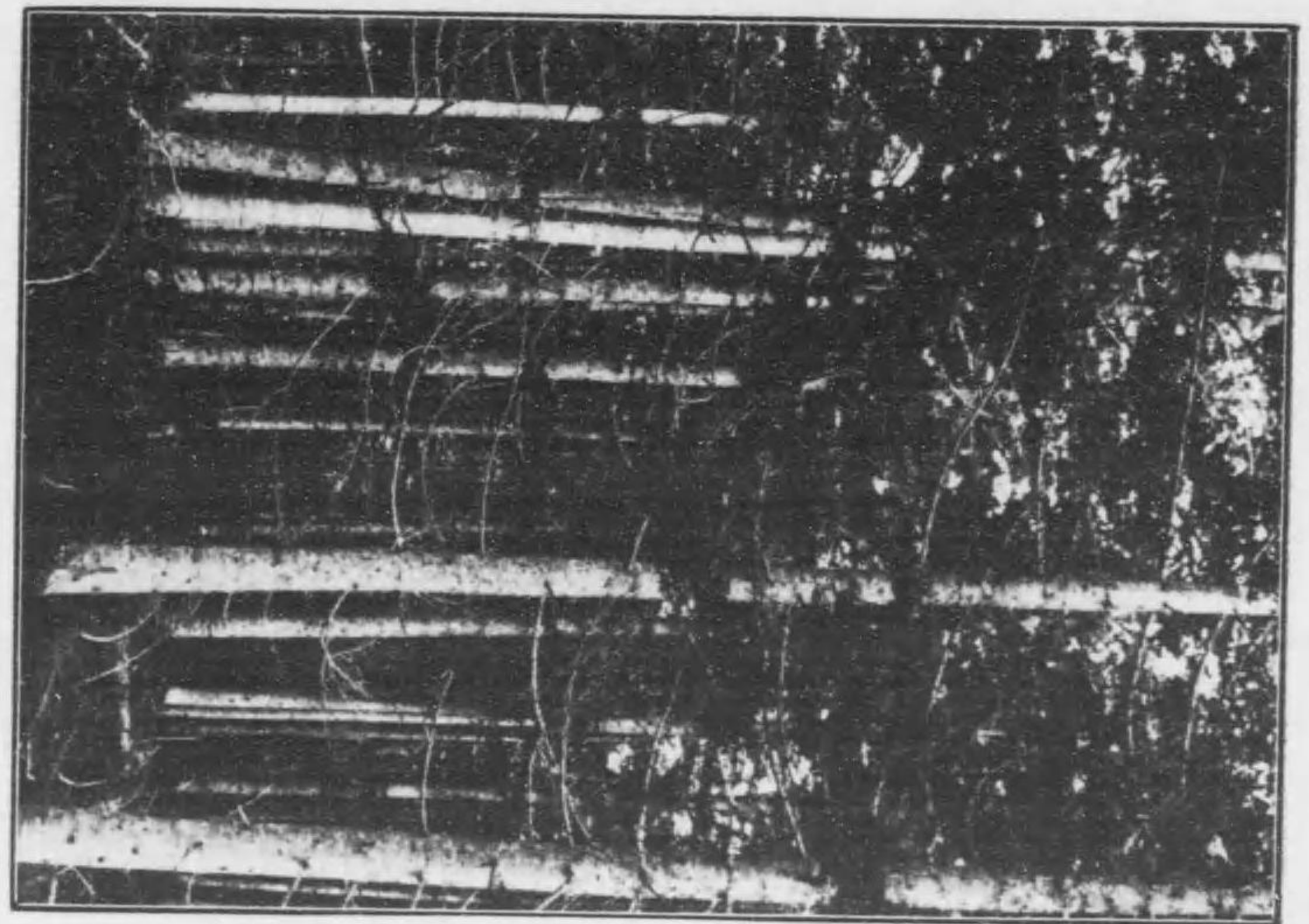
出ヲ見ルニ至レルヲ以テ、四十四年以來、各地方ニ試賣シ。尙ホ該製造法ヲ、當業者ニ指導セリ。鹽鯧ハ近時南清ニ輸出セラル、ニ至リ、需要漸次擴大スヘシト認メラル、ヲ以テ四十四年各種ノ製法ニ依リタル鹽鯧六千尾ヲ製造シ、同地方ニ向ケ輸出試賣セシモ十分ノ效果ヲ得ス、仍テ試賣時期及方法ニ就キ更ニ調査ヲ續行シツ、アリ。

三、燻製試驗

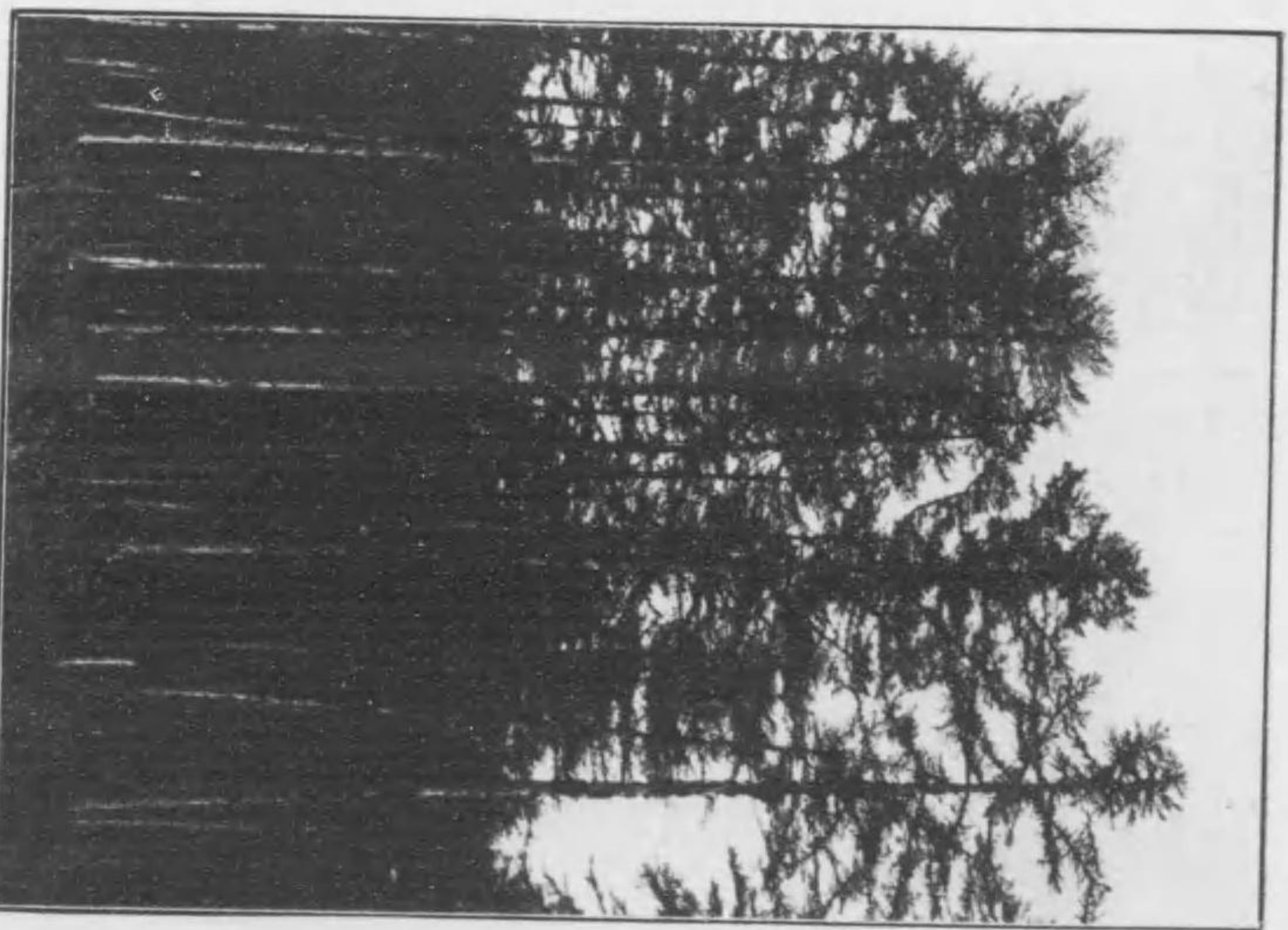
鯧及鮭ノ燻製ハ、毎年各種ノ製造試驗ヲ重ネ、今日ニテハ、優秀ノ製品ヲ出シ得ルニ至レルモ、未タ確固タル販路ヲ開拓スルニ至ラス。

四、鱈節製造試驗

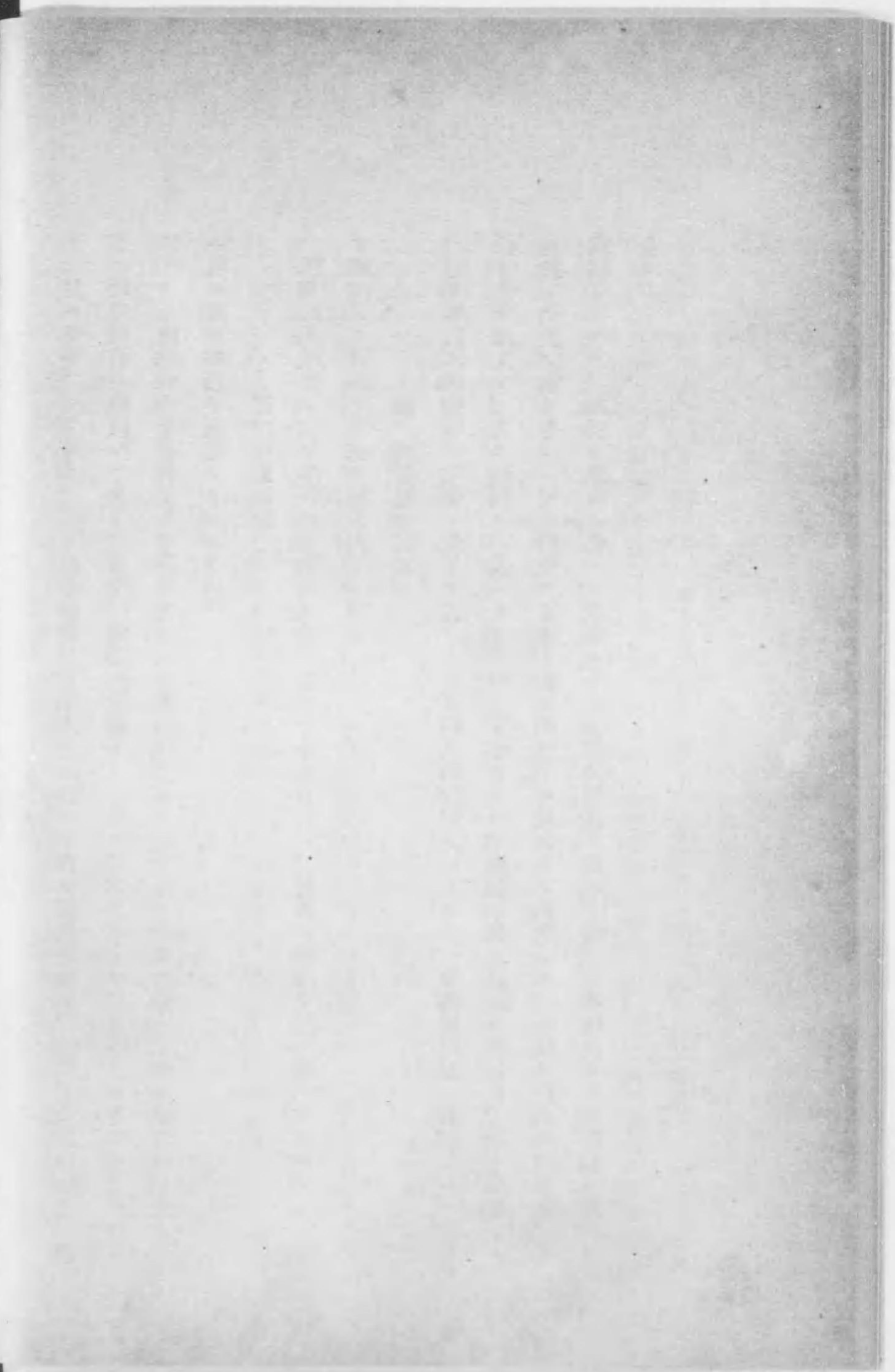
鱈ハ本島水産物中、重要ノ位置ヲ占メ、年産額八萬石以上ニ昇ルモ、全部鹽藏品ニ製セラレ、價格極メテ低廉ナリ、之カ利用ノ一助トシテ、四十三年ヨリハ、鱈節ノ製造試驗ヲ開始シ、四十四年ニハ煮熟、焙乾、削リ等ニ一層ノ研究ヲ重ネ、特ニ熟練セル技術者ヲ備聘シテ、形狀ノ仕上ニ注意シ、良成績ヲ得タリ。原料ノ價格ハ極メテ低廉ニシテ安價ノ製品ヲ造ルヲ得、味亦佳良ニシテ鱈節ニ優ルカ如シ。



林 松 檜



林 松 葉 落

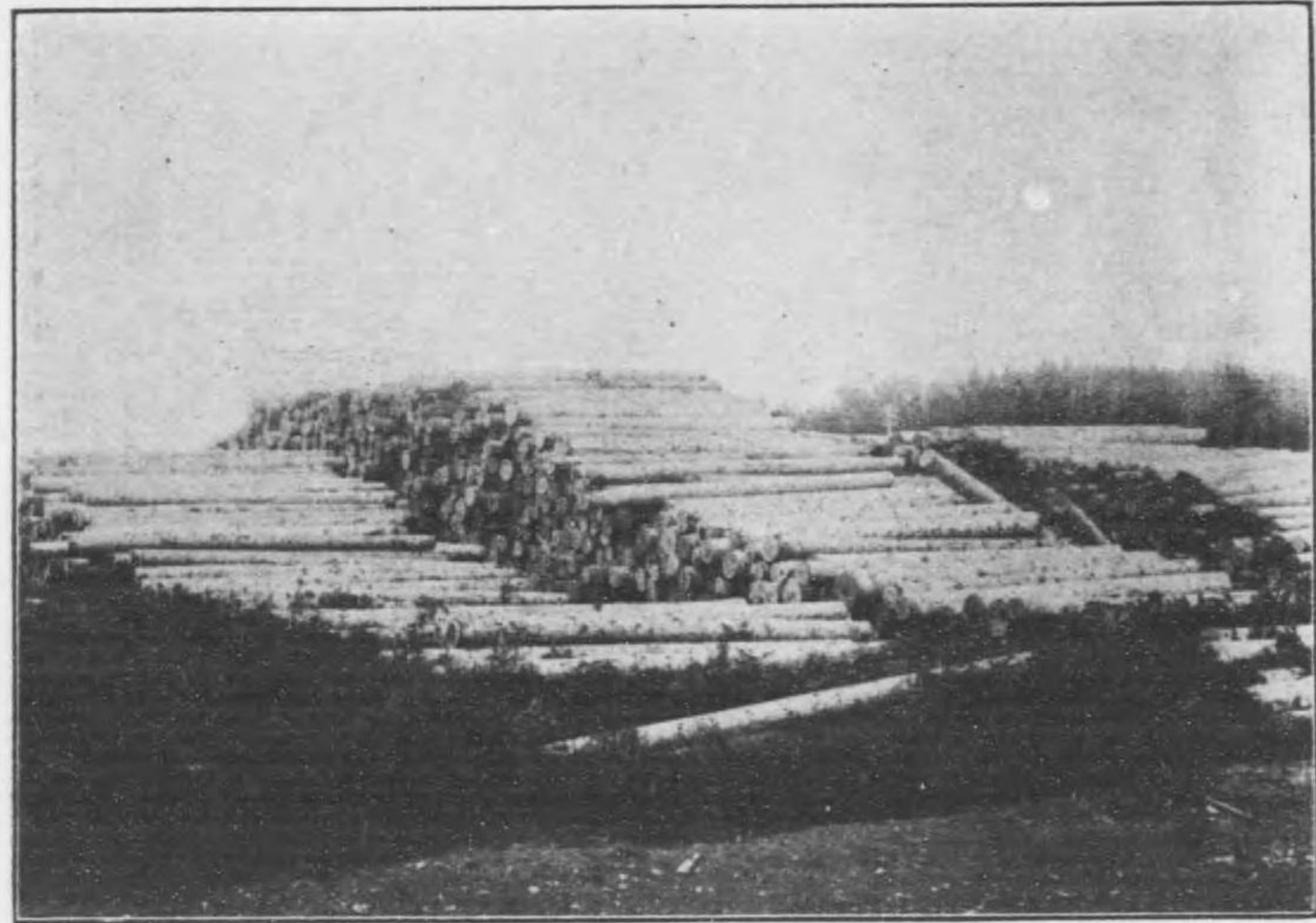




白 樺 林



天 然 更 新 ノ 狀 況



丸太材ノ集積



木材搬出ノ状況

第六章 森林

第一節 總說

本島ノ林野ハ、其ノ面積約三百三十五萬町步餘ニシテ、本島、全面積ノ九割ニ當リ、海岸砂地、河岸ノ一部、農牧地、市街村落宅地及湖沼等ヲ除クノ外、全島、悉ク蒼鬱タル樹林ヲ以テ蔽ハル。樹種ハ椴松、蝦夷松、樺太落葉松ノ三針葉樹ヲ主トシ、白樺、山楡、柳類、榆類、花楸樹、白楊等ノ闊葉樹之ニ亞キ、或ハ單獨ニ或ハ數種相混淆シテ宏大ナル森林ヲ形成セリ。
今其ノ林種別面積及蓄積ヲ舉クレハ、左ノ如シ。

林種	面積	蓄積
針葉樹林	二、一〇四、四六二 <small>町步</small>	一、三八五、七八八、〇三八 <small>尺</small>
闊葉樹林	四七三、七五〇	五三、五九四、一一八
針闊混淆林	三六一、八九八	九四、八三三、五九七
未立木地	一六〇、四七二	五〇、一八〇、六七六
ツンドラ地	二五二、一三〇	
計	三、三五二、七一二	一、五八四、三九六、四二九

第六章 森林

内
 針葉樹林 一、四八〇、六二一、六三五
 闊葉樹林 一〇三、七七四、七九四
 一三九

一、針葉樹林ハ、主ニ、蝦夷松、椴松ノ混生林及是等ト落葉松トノ混生林ニシテ、又落葉松ノ單純林モ少ナカラス、通例海岸ヨリ海面高、凡千二三百尺ノ間ニ互リ、其ノ面積、全森林ノ約七割ヲ占ム。

二、濶葉樹林ハ、多ク、山岳ノ上部及河川沿岸ノ平地ニ存在シ。山岳ニ在リテハ白樺、花楸樹等、河川沿岸ノ平地ニ在リテハ山欖、柳類、榆類等ノ林ヲ成ス。其ノ面積全森林ノ約一割七分ヲ占ム。

三、針濶混淆林ハ、山岳濶葉樹林ノ下位ニ在リテ、大抵山腹部ヲ占メ、蝦夷松、椴松ヲ主トシテ、之ニ白樺ヲ混セリ。

左ニ森林概査ノ結果ヲ綜合シテ、本島、材木ノ生長狀況ヲ、各直徑級別ニ就テ示セハ、左表ノ如シ。

直徑	本島		町歩		全島	
	高サ	年數	材積	材積	面積	材積
三寸	三五	四九	八四六	一八二	八四五	二〇〇
四寸	四五	六三	一六六三	一五九	二七三	四四〇
五寸	五五	七三	二七三三	一三九	一八七四	七二六
六寸	六五	八四	三九二〇	二二〇	二三三三	一〇三三
七寸	七五	九四	四七八二	一〇二	二六九三	一、二六七
八寸	八〇	一〇三	五五〇四	八二	二八二五	一、四四六
九寸	九〇	一一一	五八九二	六四	二七七二	一、五五六
一〇寸	九五	一二九	五七二九	四八	二六四〇	一、五五六

計	本島		町歩		全島	
	高サ	年數	材積	材積	面積	材積
二寸	一〇〇	一二六	五、六〇	三四	二、三七六	一、四一八
三寸	一〇五	一三三	四、六四四	二六	二、〇〇六	一、二三六
四寸	一一〇	一四一	三、六一四	一七	一、五三一	九五〇
五寸	一一〇	一五〇	二、六〇九	一二	一、一三五	六八九
六寸	一一五	一六〇	二、八六六	〇八	九二四	五七八
七寸	一二〇	一七一	一、〇二四	〇三	三、九六	二、六二
八寸	一二〇	一八五	五、五八	〇三	二、三六	一、三六
九寸	一二〇	二〇一	六、三五	〇三	二、六四	一、五二
一〇寸	一二〇	二一七	二、四〇	〇二	一、〇六	五五
計	二二五	二六〇	五、二五九	一〇三	二、四〇〇	一、七七〇

備考 本表中ノ立木地、總面積ハ、林野總面積三百三十五萬町步中、農牧豫定地三十萬町步、未立木地十六萬町步、除地(ツンドラ地帯ヲ含ム)二十五萬町步ヲ控除シタル殘積二百六十四萬町步ニ依ルモノナリ。

第二節 森林調査